松江市文化財調査報告書　第203集

朝酌矢田地区共同墓地整備事業に伴う発掘調査報告書

若宮谷遺跡

令和3（2021）年12月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書　第 203 集

朝酌矢田地区共同墓地整備事業に伴う発掘調査報告書

若宮谷遺跡
（わかみやだに）

令和 3（2021）年 12 月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

大橋川南岸から若宮谷遺跡を望む　（西から）　写真中央が若宮谷遺跡、右側に塩楯島

C1 区　中世貝塚検出状況　（南西から）

巻頭図版2

若宮谷遺跡出土　14 世紀後半～ 15 世紀後半の中世土師器・陶磁器

例　言

1. 本書は、令和元年度に実施した朝酌矢田地区共同墓地整備事業に伴う若宮谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松江市公園緑地課から依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。
   （名　称）若宮谷遺跡（わかみやだにいせき）
   （調査地）島根県松江市朝酌町（しまねけんまつえしあさくみちょう）1034 番 1 外
4. 現地調査の期間
   令和元年 11 月 20 日～令和 2 年 3 月 23 日
5. 開発面積および調査面積
   開発面積　1,600㎡
   調査面積　581㎡（1 区：200㎡、2 区：64㎡、3 区：218㎡、4 区：99㎡）
6. 調査組織
   依 頼 者　松江市公園緑地課
   主 体 者　松江市　　市　　長　松浦　正敬（～令和 3 年 4 月 23 日）
   　　〃　　上定　昭仁（令和 3 年 4 月 24 日～）

【令和元年度】　発掘調査業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部　長	須山　敏之
	〃	次　長	比田　誠
	〃	〃	稲田　信
	〃　まちづくり文化財課	課　長	飯塚　康行
	〃　〃　埋蔵文化財調査室	室　長	宮本　英樹
	〃　〃　〃　調査係	係　長	川上　昭一
	〃　〃　〃　〃	主　任	徳永　隆
	〃　〃　〃　〃	学芸員	三宅　和子
	〃　〃　〃　〃	嘱　託	門脇　誠也
調査指導	島根県教育庁　文化財課	企画員	仁木　聡
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野　芳伸
	埋蔵文化財課	課　長	赤澤　秀則
	〃　調査係	主　任	小山　泰生（担当者）
	〃　〃	調査補助員	宇津　直樹

【令和２年度】　出土遺物整理業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部　長	須山　敏之

	松江市歴史まちづくり部	次　長	松尾　純一
	〃	〃	稲田　信
	〃　まちづくり文化財課	課　長	飯塚　康行
	〃　〃　埋蔵文化財調査室	室　長	尾添　和人
	〃　〃　〃　調査係	係　長	川上　昭一
	〃　〃　〃　〃	主　任	徳永　隆
	〃　〃　〃　〃	嘱　託	門脇　誠也
調査指導	広島大学総合博物館　埋蔵文化財調査部門	研究員	石丸　恵利子
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野　芳伸
	埋蔵文化財課	課　長	宮本　英樹
	〃　調査係	係　長	小山　泰生（担当者）

【令和３年度】 報告書作成業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部　長	須山　敏之(～５月31日)
	〃	〃	松尾　純一（６月１日～）
	〃	次　長	松尾　純一(～５月31日)
	〃	〃	井上　雅雄（６月１日～）
	〃　まちづくり文化財課	課　長	尾添　和人
	〃　〃　文化財総合コーディネーター		丹羽野　裕
	〃　〃　埋蔵文化財調査室	室　長	川上　昭一
	〃　〃　〃　調査係	係　長	川西　学
	〃　〃　〃　〃	主　幹	古藤　博昭
	〃　〃　〃　〃	副主任	野村　豪士
	〃　〃　〃　〃	嘱　託	門脇　誠也
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野　芳伸
	埋蔵文化財課	課　長	宮本　英樹
	〃　調査係	係　長	小山　泰生（担当者）
	〃　〃	調査補助員	宇津　直樹

7. 調査に携わった発掘作業員

門脇貴教、金坂　昇、佐々木洋吉、千原　昌、土江伸明、深津靖博

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

宇津直樹、角　優佳、金坂　昇

9. 報告書作成にあたっては、以下の方から多大なご指導・ご教授を頂いた。記して謝意を表する。

松江市鹿島歴史民俗資料館　館長　赤澤秀則（縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器）

松江市史料調査課　松江城調査研究室　西尾克己（中世陶磁器）

松江市埋蔵文化財調査室　主事　灘　友佳（石器）

10. 動物遺存体の鑑定および分析は、石丸恵利子氏（広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門研究員）のご教示を得て、第５章に掲載した自然科学分析の成果について玉稿を賜った。
11. 本書の執筆は、第１章を野村、第２・３・４・６章を小山、第５章を石丸が担当した。編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て小山が行った。
12. 本書に掲載した土器および陶磁器の器種名・分類・編年については、以下の文献に準拠した。

［弥生土器］

松本岩雄　1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』 木耳社

（本文中では、松本編年○様式と記載する。）

［土師器］

鹿島町教育委員会　1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』

（本文中では、草田編年○期と記載する。）

松山智弘　2015 「山陰」『前期古墳編年を再考するⅡ　－古墳出土土器をめぐって－』 中四国前方後円墳研究会

（本文中では、松山編年○期と記載する。）

［須恵器］

大谷晃二　1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第 11 集』 島根考古学会

（本文中では、大谷編年出雲○期と記載する。）

島根県教育委員会　2013 『史跡出雲国府跡　－９　総括編－』

（本文中では、出雲国府編年第○型式と記載する。）

［中世陶磁器・中世土師器］

森田　勉　1982 「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究№.２』 日本貿易陶磁研究会

（本文中では、森田編年○群と記載する。）

上田秀夫　1982 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究№.２』 日本貿易陶磁研究会

（本文中では、上田分類○類と記載する。）

乗岡　実　2008 「備前焼の編年について」『山陰地方における備前焼』 山陰中世土器検討会

（本文中では、乗岡編年○期と記載する。）

愛知県史編纂室　2007 「古瀬戸製品編年表」『愛知県史　別編　窯業２』

（本文中では、古瀬戸編年○期様式○期と記載する。）

廣江耕史　1992 「島根県における中世土器について」『松江考古　第８号』 松江考古学談話会

13. 註と参考文献は、各章末に掲載した。
14. 本書に掲載する土層の色調は、『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修に従って表記した。
15. 本書で用いた方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、水準値は海抜標高を示し、本文中では標高○ｍと記した。
16. 本書における遺構名の表記は、以下のように略号を冠した。

SA：杭列　**SF**：道路　**SM**：貝塚　**SP**：柱穴

17. 本書の遺構番号は、調査時に設定した番号をそのまま踏襲して掲載した。
18. 本書に掲載した遺構図は、各図に縮尺とスケールを配した。遺物実測図の縮尺は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器・中世土師器・石製品・金属製品・土製品は 1/3、木製品は 1/4、銭貨•土錘は 1/2、石器は等倍を原則としているが、これに従えないものにはその都度縮尺を明記した。断面の表現は須恵器を黒塗り、それ以外を白ヌキとし、石製品は網フセで示した。
19. 墨書土師器の赤外線写真と金属製品の X 線写真の撮影は、島根県立古代出雲歴史博物館の澤田正明学芸員にご協力を頂いた。
20. 報告書作成は、遺構図•遺物図は IllustratorCC2021（Adobe 社）を用いて浄書し、図版レイアウトおよび原稿執筆などの編集作業は InDesignCC2021（Adobe 社）を用いて行った。
21. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は、松江市で保管している。
22. 本書に掲載した弥生土器・土師器・須恵器については、出雲地域における土器編年および畿内との併行関係を捉えるために、以下の各編年で設けられている時期区分を年代の指標とした。

時代		松本編年	草田編年	松山編年		大谷編年	出雲国府編年	畿内編年
弥生時代	前期	Ⅰ－１様式						
		Ⅰ－２様式						
		Ⅰ－３様式						
		Ⅰ－４様式						
	中期	Ⅱ－１様式						
		Ⅲ－１様式						
		Ⅲ－２様式						
		Ⅳ－１様式						
		Ⅳ－２様式						
	後期	Ⅴ－１様式	草田１期					
		Ⅴ－２様式	草田２期					
		Ⅴ－３様式	草田３期					
		Ⅴ－４様式	草田４期					
			草田５期					
古墳時代	前期		草田６期	Ⅰ期	小谷１式			布留０式
			草田７期		小谷２式			布留１式
					小谷３式			布留２式
				Ⅱ期	小谷４式			布留３式
	中期				大角山			布留４式・TG232
				Ⅲ期	夫敷中層			TK73・TK216
				Ⅳ期	夫敷上層	出雲１期		TK208・TK23・TK47・(MT15)
	後期					出雲２期		MT15 ～ TK10
						出雲３期		MT85 ～ TK43
	終末期					出雲４期		TK209・飛鳥Ⅰ古
						出雲５期		TK217 古・飛鳥Ⅰ新
古代						出雲６a 期		TK217 新・飛鳥Ⅱ
						出雲６b 期	国府第１型式	飛鳥Ⅲ～Ⅳ
						出雲７・８期	国府第２型式	飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ～Ⅱ
							国府第３型式	平城Ⅲ
							国府第４型式	平城Ⅳ～Ⅴ
							国府第５型式	平城Ⅵ・平安Ⅰ中～新
							国府第６型式	平安Ⅱ古～中
中世							国府第７型式	平安Ⅱ新
							国府第８型式	平安Ⅲ

出雲地域における弥生土器・土師器・須恵器編年および畿内編年併行関係対照表

目　次

巻頭図版
例言
第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と環境 …… 2
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の手法 …… 7
第１節　調査区の設定 …… 7
第２節　調査の方法 …… 8

第４章　調査の成果 …… 9
第１節　調査の概要 …… 9
第１項　試掘調査の概要 …… 9
第２項　本調査の概要 …… 10
第２節　C1 区の調査 …… 12
第１項　基本層序 …… 12
第２項　第１遺構面 …… 14
第３項　第２遺構面 …… 22
第４項　旧地形について …… 27
第３節　C2 区の調査 …… 30
第１項　基本層序 …… 30
第２項　遺物包含層 …… 32
第３項　旧地形について …… 34
第４節　C3 区の調査 …… 35
第１項　基本層序 …… 35
第２項　遺物包含層 …… 37
第３項　旧地形について …… 43
第５節　C4 区の調査 …… 44
第１項　基本層序 …… 44
第２項　出土遺物 …… 46
第３項　旧地形について …… 46

第５章　自然科学分析 …… 47
若宮谷遺跡出土の動物遺存体 …… 47

第６章　総括 …… 59
第１節　若宮谷遺跡の遺構と出土遺物の様相 …… 59
第２節　若宮谷遺跡周辺の旧地形について …… 64
第３節　結語 …… 67
遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　島根県・松江市位置図 …… 1
第 2 図　調査地位置図 …… 2
第 3 図　若宮谷遺跡周辺の遺跡分布図 …… 5
第 4 図　若宮谷遺跡と周辺遺跡 …… 6
第 5 図　開発範囲および調査範囲図 …… 7
第 6 図　若宮谷遺跡試掘トレンチ配置図 …… 10
第 7 図　若宮谷遺跡遺構配置図 …… 11
第 8 図　C1 区基本土層模式図 …… 12
第 9 図　C1 区北壁・西壁土層図 …… 13
第 10 図　C1 区第 1 遺構面平面図 …… 14
第 11 図　SA01 平面図・断面図 …… 15
第 12 図　SF01 平面図・断面図 …… 16
第 13 図　SF01 出土遺物分布図（遺物 S=1:4）…… 18
第 14 図　SF01 出土遺物（1）…… 19
第 15 図　SF01 出土遺物（2）…… 20
第 16 図　SF01 出土遺物（3）…… 21
第 17 図　C1 区第 2 遺構面平面図 …… 22
第 18 図　SM01 ～ 05 平面図・断面図 …… 23
第 19 図　SM01 ～ 05 調査グリッドおよび資料採取地点平面図 …… 25
第 20 図　SM01・02・05 出土遺物 …… 26
第 21 図　C1 区旧地形平面図 …… 27
第 22 図　礫層（第 6 層）出土遺物 …… 28
第 23 図　砂礫層（第 7 層）出土遺物 …… 29
第 24 図　C2 区基本土層模式図 …… 30
第 25 図　C2 区平面図・北壁・東壁土層図 …… 31
第 26 図　遺物包含層上層（第 3 層）出土遺物 …… 32
第 27 図　遺物包含層下層（第 4 層）出土遺物（1）…… 33
第 28 図　遺物包含層下層（第 4 層）出土遺物（2）…… 34
第 29 図　C3 区基本土層模式図 …… 35
第 30 図　C3 区平面図・北壁・西壁土層図 …… 36
第 31 図　遺物包含層上層（第 3・4 層）出土遺物（1）…… 38
第 32 図　遺物包含層上層（第 3・4 層）出土遺物（2）…… 39
第 33 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（1）…… 40
第 34 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（2）…… 41
第 35 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（3）…… 42
第 36 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（4）…… 43
第 37 図　C4 区基本土層模式図 …… 44
第 38 図　C4 区平面図・南壁土層図 …… 45
第 39 図　地山面出土遺物 …… 46
第 40 図　貝塚 SM01 ～ 05 貝類出土量分布図 …… 51
第 41 図　ヤマトシジミ・サルボウの殻高組成 …… 53
第 42 図　魚類の計測位置説明図 …… 58
第 43 図　若宮谷遺跡における中世後期の土師器・陶磁器変遷図（遺物 S=1:6）…… 63
第 44 図　若宮谷遺跡周辺の小字名 …… 64
第 45 図　谷地形の復元 …… 65
第 46 図　中世後期の貝塚と居住域の推定範囲 …… 66

挿表目次

表　1　若宮谷遺跡試掘調査トレンチ一覧…… 9
表　2　若宮谷遺跡出土動物遺存体種名一覧…… 55
表　3　若宮谷遺跡出土動物遺存体一覧（貝類）…… 56
表　4　若宮谷遺跡出土動物遺存体一覧（骨類）…… 57
表　5　若宮谷遺跡出土遺物一覧（県調査区の出土遺物を含む）…… 61

図版目次

本文中写真

写真 1　バックホーによる表土除去…… 8
写真 2　中世貝塚の貝層資料採取作業…… 8

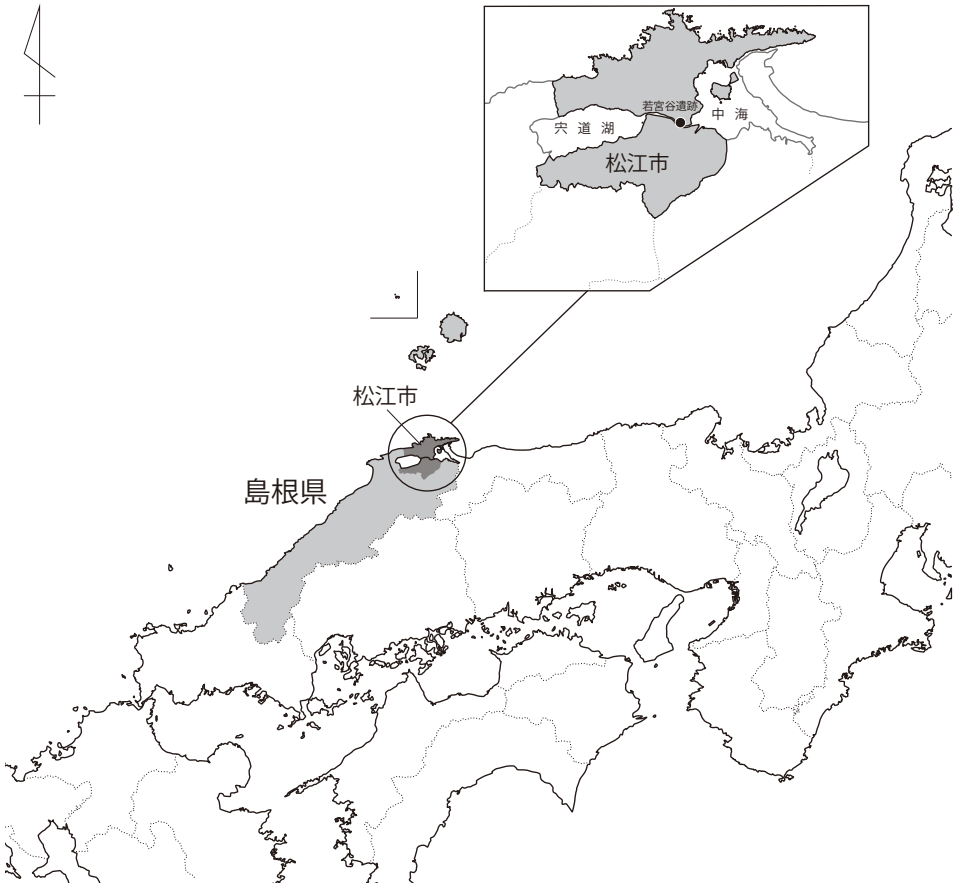
巻頭 1　大橋川南岸から若宮谷遺跡を望む（西から）
　C1 区　中世貝塚検出状況（南西から）
巻頭 2　若宮谷遺跡出土　14 世紀後半～ 15 世紀後半の中世土師器・陶磁器
図版 1　調査地遠景・全景
　1　調査地遠景 (西から)
　2　調査地調査前全景 (南から)
図版 2　調査地近景
　1　松江市朝酌町字若宮谷所在の水神 (南西から)
　2　水神の祠 (西から)
　3　水神の南側に隣接する湧水地 (北西から)
　4　大橋川北岸から松江市街地を望む (南から)
　5　発掘調査風景
図版 3　C1 区
　1　C1 区調査前全景 (南東から)
　2　C1 区北壁土層断面 (南東から)
図版 4　C1 区
　1　C1 区西壁土層断面 (南東から)
　2　C1 区西壁土層断面 (一部)(東から)
図版 5　C1 区
　1　第 1 遺構面道路 SF01 完掘後 (西から)
　2　SF01 と北東方向の延長線上に水神 (南西から)
　3　SF01 北側側溝埋土断面 (南西から)
　4　SA01 木杭 (北から)
図版 6　C1 区
　1　SF01 北側側溝備前擂鉢出土状況 (14-10)
　2　SF01 北側側溝土師器坏出土状況 (15-6)
　3　SF01 土師器坏出土状況 (15-3)
　4　SF01 土師器皿出土状況 (15-13)
　5　SF01 土師器坏出土状況 (15-5・7・8)
　6　SF01 北側側溝墨書土師器坏出土状況 (15-9)
　7　SF01 南側側溝小柄出土状況 (16-7)
　8　SF01 北側側溝鉄鍋出土状況 (16-8)
図版 7　C1 区
　1　第 2 遺構面貝塚 SM01 ～ 05 検出状況 (南から)
　2　SM02 貝層の広がり (南から)
　3　調査区内西壁混貝土層接写 (東から)
　4　SM01 獣骨 (イヌ下顎骨) 出土状況 (南東から)
　5　SM01 と地山 (基盤層) の境界部分 (北から)
図版 8　C1 区
　1　C1 区地山面完掘後 (南西から)
　2　礫層遺物出土状況①
　3　礫層遺物出土状況②
　4　C1 区南東角付近東壁礫層・砂礫層断面 (西から)
図版 9　C2 区
　1　C2 区調査前全景 (南から)
　2　C2 北壁土層断面 (南から)
図版 10　C2 区
　1　C2 区東壁土層断面 (一部)(西から)
　2　遺物包含層下層古墳時代前期の土師器壺出土状況 (北西から)
図版 11　C2 区
　1　遺物包含層上層須恵器皿出土状況 (26-8)
　2　遺物包含層下層土師器壺出土状況 (27-8)
　3　遺物包含層下層土師器壺出土状況 (27-7)
　4　C2 区地山面完掘後 (南から)
図版 12　C3 区
　1　C3 区調査前全景 (南西から)
　2　C3 区北壁土層断面 (南から)
図版 13　C3 区
　1　C3 区西壁土層断面 (南東から)
　2　遺物包含層上層完掘後 (南から)
　3　遺物包含層上層遺物出土状況 (北から)
　4　遺物包含層上層須恵器無高台坏出土状況
図版 14　C3 区
　1　遺物包含層上層須恵器高台付坏出土状況
　2　遺物包含層上層須恵器甕片出土状況
　3　遺物包含層下層土師器壺口縁部出土状況
　4　遺物包含層下層弥生土器甕口縁部出土状況
　5　C3 区地山面完掘後 (南から)
図版 15　C4 区
　1　C4 区調査前全景 (南西から)
　2　C4 区南壁土層断面 (北西から)
図版 16　C4 区・出土遺物整理作業
　1　C4 区地山面完掘後 (北から)
　2　出土貝層水洗選別作業①
　3　出土貝層水洗選別作業②
　4　動物遺存体調査指導状況
　5　貝類等採取遺物分類作業
図版 17　出土遺物①
図版 18　出土遺物②
図版 19　出土遺物③
図版 20　出土遺物④
図版 21　出土遺物⑤
図版 22　出土遺物⑥
図版 23　出土遺物⑦
図版 24　動物遺存体①（貝類）
図版 25　動物遺存体②（貝類）
図版 26　動物遺存体③（骨類）
図版 27　動物遺存体④（骨類）

第１章　調査に至る経緯

大橋川の河川改修事業に関連して、朝酌矢田地区共同墓地の移転が計画された。開発予定地は未調査地であったため、平成 29 年 3 月 9 日付で松江市大橋川治水事業推進課より試掘調査依頼書が松江市埋蔵文化財調査室に提出された。この依頼を受けて、埋蔵文化財調査室では事業区域内に 6 箇所のトレンチ（T1 ～ T6）を設定し、遺跡の有無確認のため、同年 3 月 22 ～ 24 日にかけて試掘調査を実施した。その結果、3 箇所のトレンチ（T1・T3・T6）で遺構や遺物が確認された。

これにより、平成 29 年 4 月 12 日に大橋川治水事業推進課から遺跡発見の届出が提出され、「若宮谷遺跡」として周知されることとなった。その後、前述の試掘調査期間に調査できなかった事業区域南東側の田地において、平成 30 年 2 月 15 日に追加調査として 2 箇所のトレンチ（T7・T8）を設定して試掘調査を実施し、ここでは遺物包含層を確認した。

これらの試掘調査の結果を受けて開発部局と協議を重ねたが、遺跡を外しての設計変更は困難であるとの結論に至り、平成 31 年 4 月 12 日に松江市公園緑地課から発掘届が提出された。この内容について、島根県教育委員会と協議した結果、発掘調査の勧告を受けることとなり、これにより「若宮谷遺跡」の発掘調査を実施するに至ったものである。なお、平成 29 年 3 月に設定したトレンチのうち、1 箇所（T2）については試掘調査の承諾が得られなかったため調査を行っていない。



第１図　島根県・松江市位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境（第２図）

島根県北東部に位置する島根半島（東西約 65㎞・南北約 15 ～ 20㎞）は、北を日本海、南を宍道湖と中海に囲まれ、島根半島内には平均標高 350ｍの山塊が東西に連なる北山山系が走り、松江市域には北山山系から南に向けて派生する多くの支脈丘陵が延びている。若宮谷遺跡は、島根半島と本土とを分かつ宍道湖と中海を結ぶ大橋川が最も川幅を狭めるところの北岸にあたる、標高約 115ｍの独立丘陵の南側山麓部に立地し、ここから大橋川を挟んで南岸の松江市街地を間近に望む場所に所在している。

発掘調査対象地は、大橋川北岸の狭隘な谷地と丘陵部に位置している。谷は北側の丘陵部から南側の大橋川へ向かって緩やかな弧を描く形で繋がり、調査開始以前から谷筋には湧水が流れていた。県道に面した場所は、以前は水田として利用されており、この北東側も石垣を積み上げて一段高くした水田となっていた。水田からさらに北東側の丘陵部には竹林が広がっているが、丘陵部の一部に平坦地があり、ここには現在も「水神」の祠が祀られている。

なお、今回報告する発掘調査対象地の西側にあたる主に水田と丘陵部において、令和元（2019）年度に島根県教育委員会による若宮谷遺跡（A・B 区）の発掘調査が行われている。この調査では、谷部底面の礫層から縄文時代～弥生時代の遺物包含層、丘陵部の地山面から古墳時代前期の竪穴建物跡、埋没谷の貝層を含む粘質土から中世後半の掘立柱建物跡や遺物包含層などが確認されている。

第２図　調査地位置図

第２節　歴史的環境（第３・４図）

若宮谷遺跡周辺の大橋川両岸の丘陵上は、古墳時代に多くの大型古墳が分布する一帯である。古代においては、奈良時代（733 年）に編纂された『出雲国風土記』に「朝酌促戸（あさくみのせと）」と記載され、若宮谷遺跡から南の意宇平野に位置する出雲国府から隠岐国へと至る古代山陰道（枉北道）が大橋川を渡る際の「朝酌渡（あさくみのわたり）」（島根郡側）が所在していた場所の近接地として推定されている。以下では、若宮谷遺跡周辺の遺跡について時代を追って概観する。

旧石器時代　旧石器時代の遺跡として確認されるものは少なく、若宮谷遺跡から南に位置する大庭町周辺の低丘陵の台地上において僅かにみられる。下黒田遺跡（61）で玉髄製剥片のブロック、山代郷南新造院跡（62）で玉髄製のナイフ形石器、石台遺跡（25）でサヌカイト製の大型ナイフ形石器などが出土している。また、若宮谷遺跡から北西に位置する朝酌川流域周辺の西川津遺跡やタテチョウ遺跡では尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土していることから、付近に旧石器時代の遺跡が存在する可能性が想定されている。

縄文時代　気候が温暖な時期にあたり、縄文草創期以降に海水面が上昇し、縄文早期には現在の海水準に近い状態であったと推定される。縄文前期には現在と同様の地形および植物相が成立するようになった。宍道湖と中海は汽水域となり、鳥取県米子市から境港市に連なる弓ヶ浜や島根県出雲市の稲佐の浜などの砂州が形成されるようになる。

意宇平野北部に所在する縄文時代の遺跡として、縄文前期の土器が出土した法華寺前遺跡（54）、縄文後期の土器や石器が出土した才塚遺跡（63）が挙げられる。若宮谷遺跡周辺の大橋川北岸では、朝酌菖蒲谷遺跡（5）で縄文中期末～後期初頭の堅果類の貯蔵穴 1 基、九日田遺跡（84）で縄文後期初頭を中心とする堅果類の貯蔵穴 23 基が検出されている。縄文晩期には大橋川の河口付近などに砂州や三角州が形成されるようになり、遺跡数が増加する。大橋川北岸では、シコノ谷遺跡（2）で縄文早期または晩期を中心とする土器・石器・サメの歯などが、福富松ノ前遺跡（83）で縄文晩期の突帯文土器が出土している。大橋川南岸では、官道下遺跡（8）で縄文後期～晩期の土器、石台遺跡で籾殻圧痕が付いた縄文晩期の土器や大型の打製石斧が出土している。

弥生時代　縄文時代終末期から弥生時代前期にかけての海面低下により、現在よりも 2m程度低く砂州や三角州の陸地化が進んだとされ、意宇平野も東側の中海に向けて拡大したと考えられている。

意宇平野東部に所在する弥生時代の遺跡として、弥生前期後葉～中期の土器や農工具が出土した布田遺跡（55）、弥生後期前葉の水田跡を検出した夫敷遺跡（56）、弥生後期の水田跡と水路の柵状遺構を検出した上小紋・向小紋遺跡（48・49）が挙げられる。若宮谷遺跡周辺の大橋川北岸では、魚見塚古墳（20）の墳裾において弥生後期の竪穴建物跡、キコロジ遺跡（19）で土器が出土している。

墳丘墓は、大橋川南岸に所在する間内越墳墓群（33）や来美墳墓（35）で弥生後期の四隅突出型墳丘墓が確認されている。

古墳時代　若宮谷遺跡周辺の大橋川両岸の丘陵上や茶臼山西麓の山代町から大庭町にかけて多くの古墳（古墳群）がみられ、出雲地域の中でも大型古墳が分布する一帯である。意宇平野北部に所在する古墳時代の遺跡として、古墳前期の小規模古墳である社日古墳（52）、古墳前期末には出雲最古の前方後円墳として知られている廻田１号墳（46）が挙げられる。

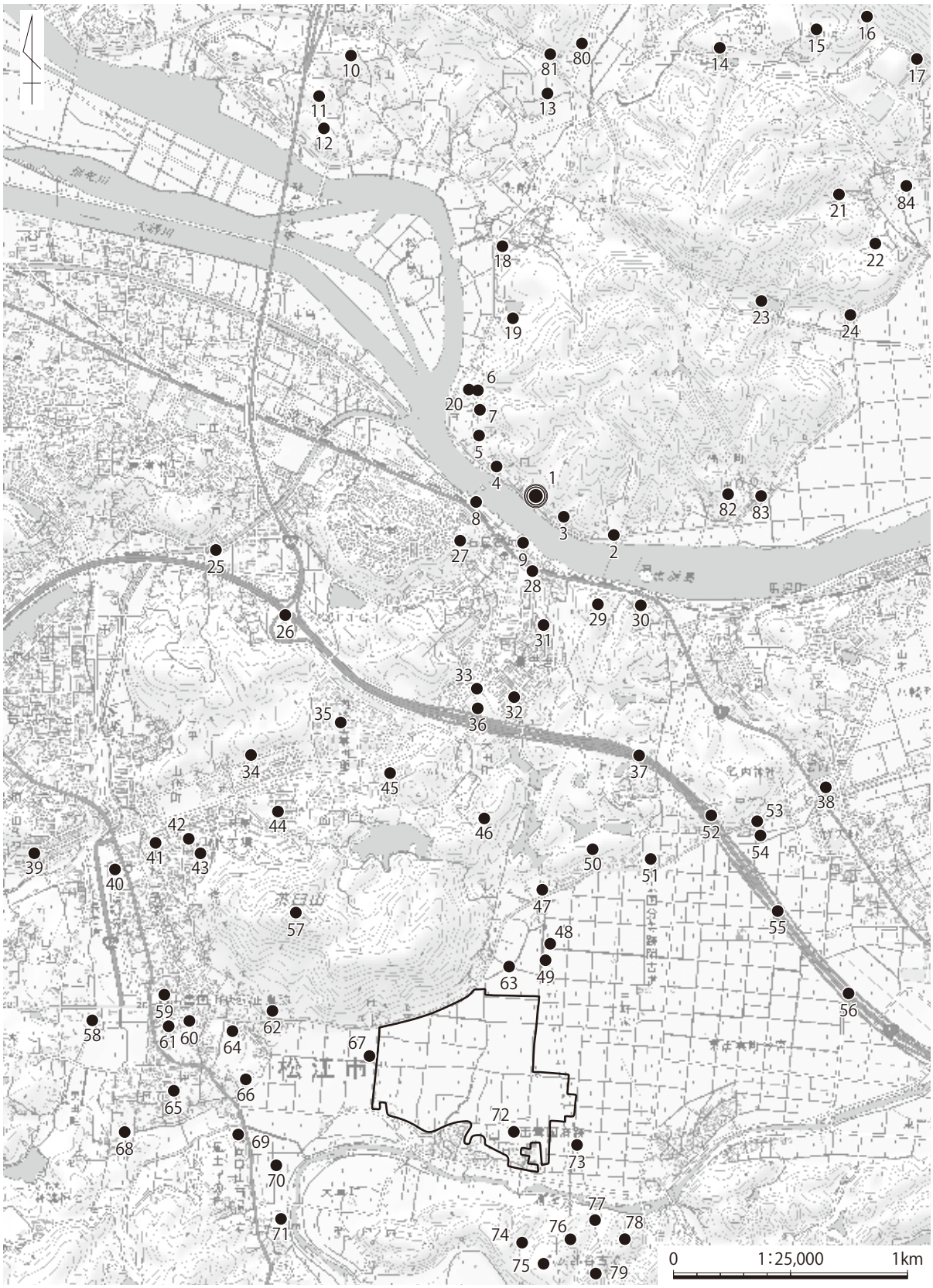
古墳中期になると、大橋川南岸に方墳の石屋古墳（27）、前方後円墳の井ノ奥４号墳（32）、前方後方墳の竹矢岩舟古墳（30）が築かれる。若宮谷遺跡周辺の大橋川北岸では、廟所古墳（10）、観音山古墳群（11・12）が築かれている。

古墳後期に入ると、古墳築造の中心は茶臼山西麓に分布が移り、島根県内でも有数の大型古墳が築かれるようになる。６世紀中頃に造り出し付方墳の大庭鶏塚古墳（40）、６世紀後半に全長 94mを測る前方後方墳の山代二子塚古墳（41）が築かれる。意宇平野西部では、東淵寺古墳（58）、御崎山古墳（71）、岡田山古墳（69）が、大橋川北岸では、全長 61mを測る前方後円墳の魚見塚古墳（20）などが築かれ、これらは山代二子塚古墳を頂点とする各地域の首長墓と考えられている。７世紀初頭～前半には出雲地域に特徴的な石室として、石棺式石室を主体部とする山代方墳（42）、山代原古墳（43）、団原古墳（66）、向山１号墳（39）などが築かれる。若宮谷遺跡周辺の大橋川北岸では、朝酌岩屋古墳（18）や廻原古墳群（13）で横穴式石室を有する古墳が築かれている。また、朝酌地域の集落遺跡として、キコロジ遺跡（19）周辺が有力な候補地として想定されている。キコロジ遺跡では、圭頭大刀の柄頭や漆容器などを含む多量の遺物が付近の丘陵から流れ込んだ状態で出土している。

古代（奈良・平安時代）　意宇平野とその周辺部において７世紀末頃に出雲国府（72）をはじめとした政治上重要な施設が配置されるようになる。意宇平野北東部では、出雲国分寺（51）や出雲国分尼寺（53）が、意宇平野西部では、茶臼山を挟んだ北と南に山代郷北新造院跡（来美廃寺）（34）と山代郷南新造院（四王寺跡）（62）がそれぞれ建立される。茶臼山西麓では、総柱建物群と多量の炭化米が出土した山代郷正倉跡（59）、大溝や掘立柱建物群を検出した下黒田遺跡（61）、黒田館跡（60）などの官衙関連の遺跡が所在している。

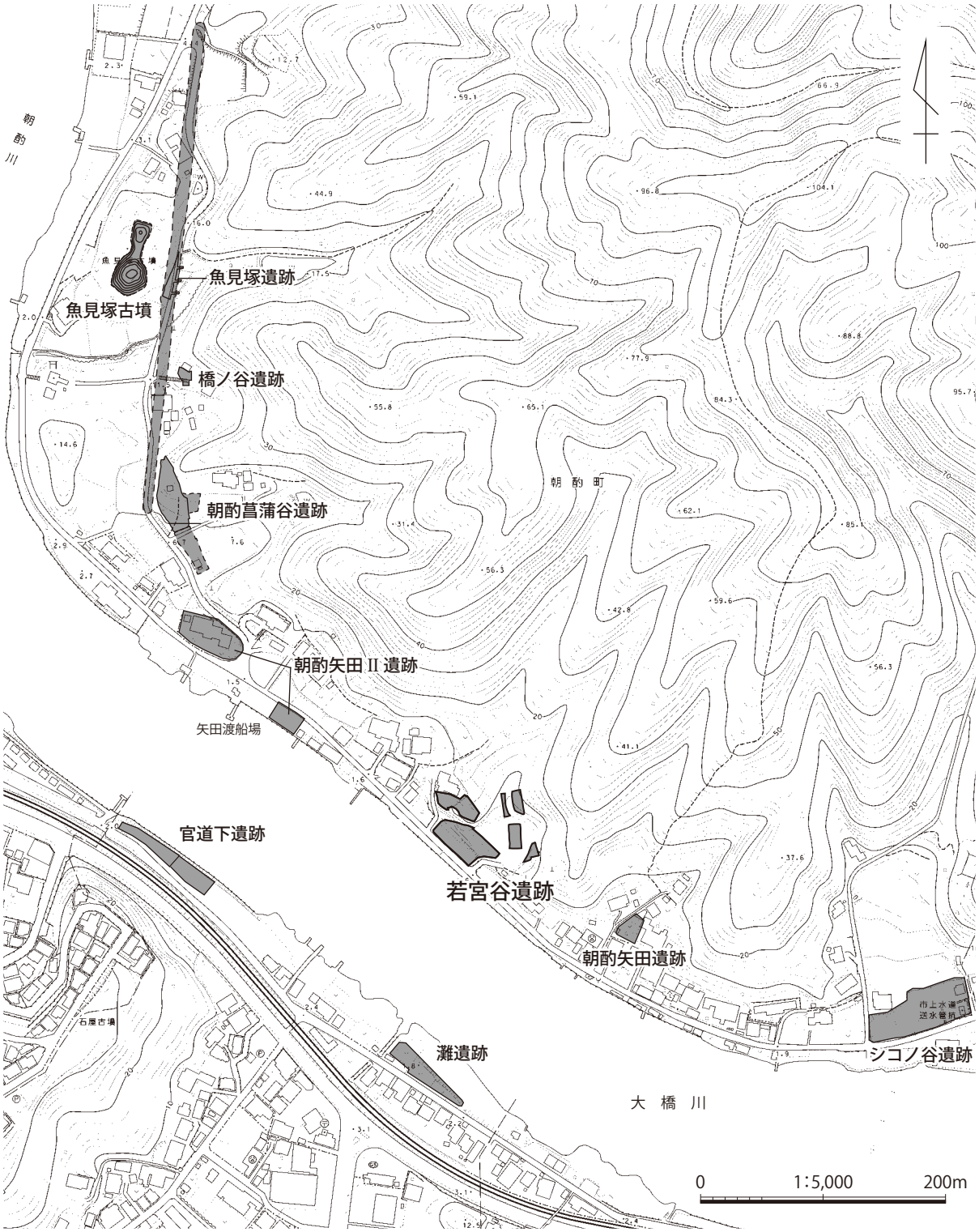
また、近年では駅使の往来する官道と考えられている山陰道駅路として、出雲国府の北側にある十字街から隠岐国へ至る枉北道の推定ルート上で古代山陰道関連の遺跡が相次いで見つかっている。出雲国府から朝酌地域周辺までの枉北道は、十字街から北へ向かって大橋川南岸の官道下遺跡（8）あるいは灘遺跡（9）周辺から大橋川を渡り、大橋川北岸の船着き場や荷揚場と想定されている護岸状石敷き遺構を検出した朝酌矢田Ⅱ遺跡（4）周辺を経由して、波板状凹凸面と側溝を伴う道路遺構を検出した魚見塚遺跡（6）を通るルートが推定されている。

中世　若宮谷遺跡周辺の中世の遺跡は少なく、意宇平野一帯を含む出雲府中が政治と文化の中心となっていたものと考えられている。若宮谷遺跡（県調査区）（1）では、谷部の貝層を含む遺物包含層から 14 世紀後半～ 15 世紀代の青磁や白磁などの中世陶磁器や土師器が出土し、そこから約 300 m東に所在するシコノ谷遺跡（2）では、12 世紀代を主体とした中世陶磁器や土師器が出土している。



1.若宮谷遺跡 2.シコノ谷遺跡 3.朝酌矢田遺跡 4.朝酌矢田Ⅱ遺跡 5.朝酌菖蒲谷遺跡 6.魚見塚遺跡 7.朝酌橋ノ谷遺跡 8.官道下遺跡 9.灘遺跡 10.廟所古墳 11.観音山1号墳 12.観音山2号墳 13.廻原古墳群 14.薦沢A遺跡 15.勝田谷窯跡 16.明曽窯跡 17.池ノ奥窯跡群 18.朝酌岩屋古墳 19.キコロジ遺跡 20.魚見塚古墳 21.寺尾窯跡 22.廻谷窯跡 23.岩汐窯跡 24.ババタケ窯跡 25.石台遺跡 26.勝負遺跡 27.石屋古墳 28.荒神畑古墳 29.手間古墳 30.岩舟古墳 31.井ノ奥古墳群1号墳 32.井ノ奥古墳群4号墳 33.間内越墳墓群 34.山代郷北新造院跡(来美廃寺) 35.来美墳墓 36.平所遺跡 37.才ノ峠遺跡 38.的場遺跡 39.向山古墳群 40.大庭鶏塚 41.山代二子塚 42.山代方墳 43.山代原古墳(永久宅後古墳) 44.狐谷横穴群 45.十王免横穴群 46.廻田古墳群 47.間内遺跡 48.上小紋遺跡 49.向小紋遺跡 50.上竹矢古墳群 51.出雲国分寺跡 52.中竹矢遺跡群(社日古墳・中竹矢古墳) 53.出雲国分尼寺跡 54.法華寺前遺跡 55.布田遺跡 56.夫敷遺跡 57.茶臼山城跡 58.東淵寺古墳 59.出雲国山代郷正倉跡 60.黒田館跡 61.下黒田遺跡 62.山代郷南新造院跡 63.才塚遺跡 64.山代郷南新造院瓦窯跡(小無田Ⅱ遺跡) 65.黒田畦遺跡 66.団原古墳 67.大坪遺跡 68.出雲国造館跡 69.岡田山古墳群 70.岩屋後古墳 71.御崎山古墳 72.出雲国府跡 73.大屋敷遺跡 74.西百塚山古墳群 75.東百塚山古墳群 76.古天神古墳 77.天満谷遺跡 78.安部谷古墳群 79.大草岩船古墳 80.九日宮古墳群 81.遅倉横穴墓群 82.阿弥陀寺古墳 83.福富松ノ前遺跡 84.九日田遺跡

第３図　若宮谷遺跡周辺の遺跡分布図



第４図　若宮谷遺跡と周辺遺跡

参考文献

加藤義成　1981 『修訂出雲国風土記参究』

島根県教育委員会　2021 『若宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』 斐伊川水系大橋川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

松江市・松江市スポーツ・文化振興財団　2019 『朝酌矢田遺跡』 松江市文化財調査報告書　第 193 集

松江市史編纂委員会　2012 『松江市史　史料編２　考古資料』

第 3 章　調査の手法

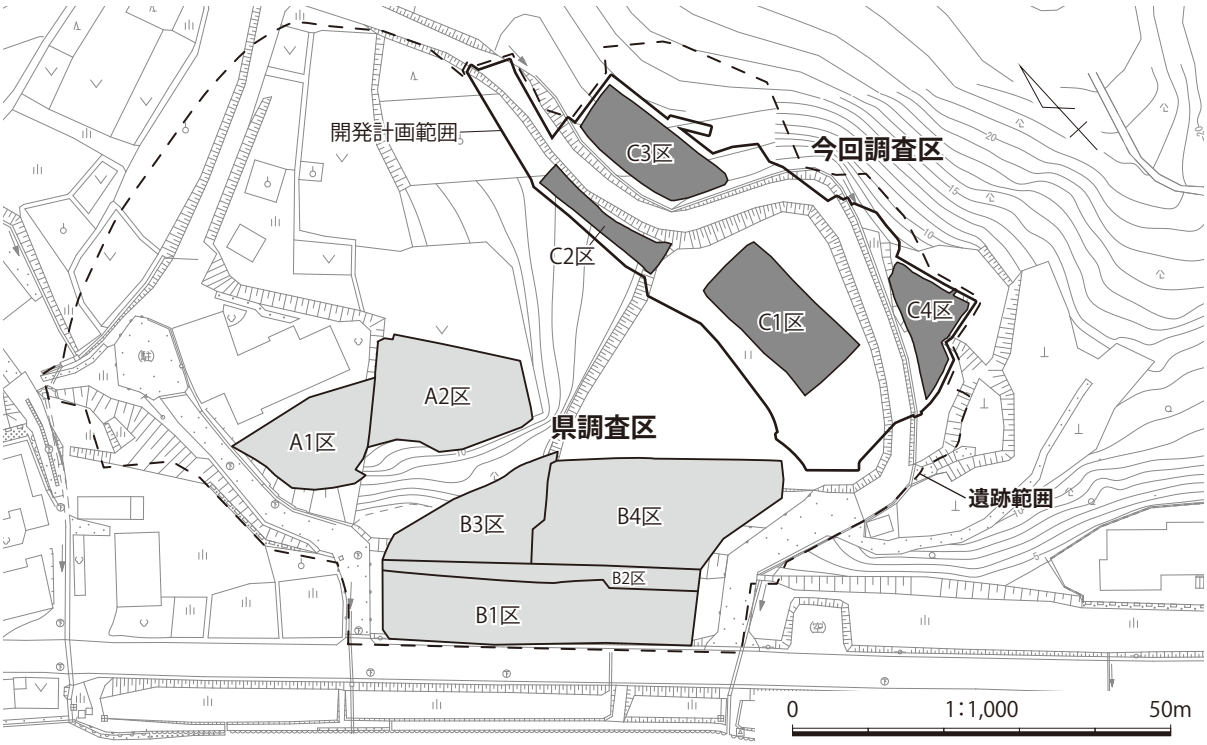
第 1 節　調査区の設定（第 5 図）

若宮谷遺跡の発掘調査対象範囲は、松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査の結果（第 4 章第 1 節第 1 項）から遺跡範囲とした 1,600㎡のうち、作業ヤードの確保および重機等の移動のために必要な既存道路部分を除いた 581㎡を本発掘調査の対象範囲としている。調査区の呼称は、若宮谷遺跡（県調査区）において丘陵部を A 区・谷地の平坦部を B 区とされているため、今回調査を実施した調査区は C 区と呼称する。C 区は発掘調査を実施した順に、C1 ～ 4 区の 4 つの調査区に分けている。

調査は発掘作業の工程上、遺跡範囲の南西側にあたる近年まで水田となっていた平坦面に設定した C1 区から調査を開始し、続いて C1 区の北側丘陵裾の緩斜面に設定した C2 区の調査を行った。C2 区の調査を行いながら、既存道路を挟んで東側に隣接する丘陵裾の緩斜面に設定した C3 区の調査を行い、最後に遺跡範囲の南東側の丘陵斜面に設定した C4 区の調査を行った。

本報告では各調査区を個別に取り扱うが、面的な調査が可能であった C1 区は基本層序と各遺構面の調査成果について詳細を報告する。また、C2 区と C3 区は埋没谷に堆積した遺物包含層の調査が主体となっているため、基本層序と遺物包含層出土遺物について詳細を報告する。C4 区は調査区の全域にわたって地滑りの影響を受けている点が指摘されている[(1)]。そのため、C4 区で検出した遺構は地滑りの痕跡を平面的に検出したものか、あるいは地滑りの影響を受けた後の痕跡を遺構として検出している可能性が高いものと考えられることから、基本層序と出土遺物の報告に留まっている。

調査にあたってはグリッド設定を行わず、出土層位を記載して遺物の取り上げを行った。なお、時期や形態がわかる遺物については、出土地点の標高と座標をその都度記録して取り上げを行った。



第 5 図　開発範囲および調査範囲図

第２節　調査の方法

表土掘削と遺構検出

調査地の現況は竹林・草地・水田で、表土の除去はバケットに平爪を装着したバックホーを用いて実施した。表土掘削は事前に掘削深度を把握する目的で、各調査区の調査範囲のうち、試掘トレンチとは重複しない場所に新たにバケット幅のトレンチを設定して土層堆積状況を確認した。この成果を基に調査区内の表土（耕作土）を重機で除去し、以下は重機を併用しながら人力掘削によって遺構面および遺構の検出を行った。

遺構の検出は、鋤簾により精査した後、さらに草削りを用いて検出に努めた。遺構の掘り下げは主に移植ゴテにより実施した。遺構内の調査は、平面的に全体を検出し終えた後、ベルトを設定するか半截を行い、切り合うものについては先後関係を確認した。その後の段階で各遺構の断面図を作成し、完掘後に平面図を作成した。遺構内の出土遺物は、出土状況を記録した後、遺物番号を付記して取り上げを行った。調査区の土層断面は、分層した後に写真撮影を行い、報告書に掲載が見込まれる箇所の土層断面図を作成した。

写真１　バックホーによる表土除去

写真２　中世貝塚の貝層資料採取作業

調査の記録

地形測量および遺構の平面測量にはトータルステーションを用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。平面図の方位は、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺 1/20 で作成し、土層観察の注記は新版標準土色帖を使用した。

遺構と遺物の記録写真は、フルサイズデジタル一眼レフカメラ（Nikon D610）を主に使用し、6×７判フィルムカメラおよび 35㎜フィルムカメラを授用して撮影を行った。遺構完掘後の調査区全体写真は、各調査区の調査が完了した段階に写真撮影用足場を用いて、高所からの撮影を実施した。

註

（1）　2020 年３月に文化財調査コンサルタント株式会社の渡邉正巳氏に依頼して、若宮谷遺跡発掘調査現地にて C4 区の地山面および壁面土層の乱れについてご教示をいただいた。この土質指導では「調査区外北側から東側にかけて円弧滑りを受けている可能性があり、調査区内においては少なくとも２～３回程度の小規模な地滑りの痕跡を平面的に検出しているのではないか」との指摘を受けている。

第 4 章　調査の成果

第 1 節　調査の概要

第 1 項　試掘調査の概要（表 1・第 6 図）

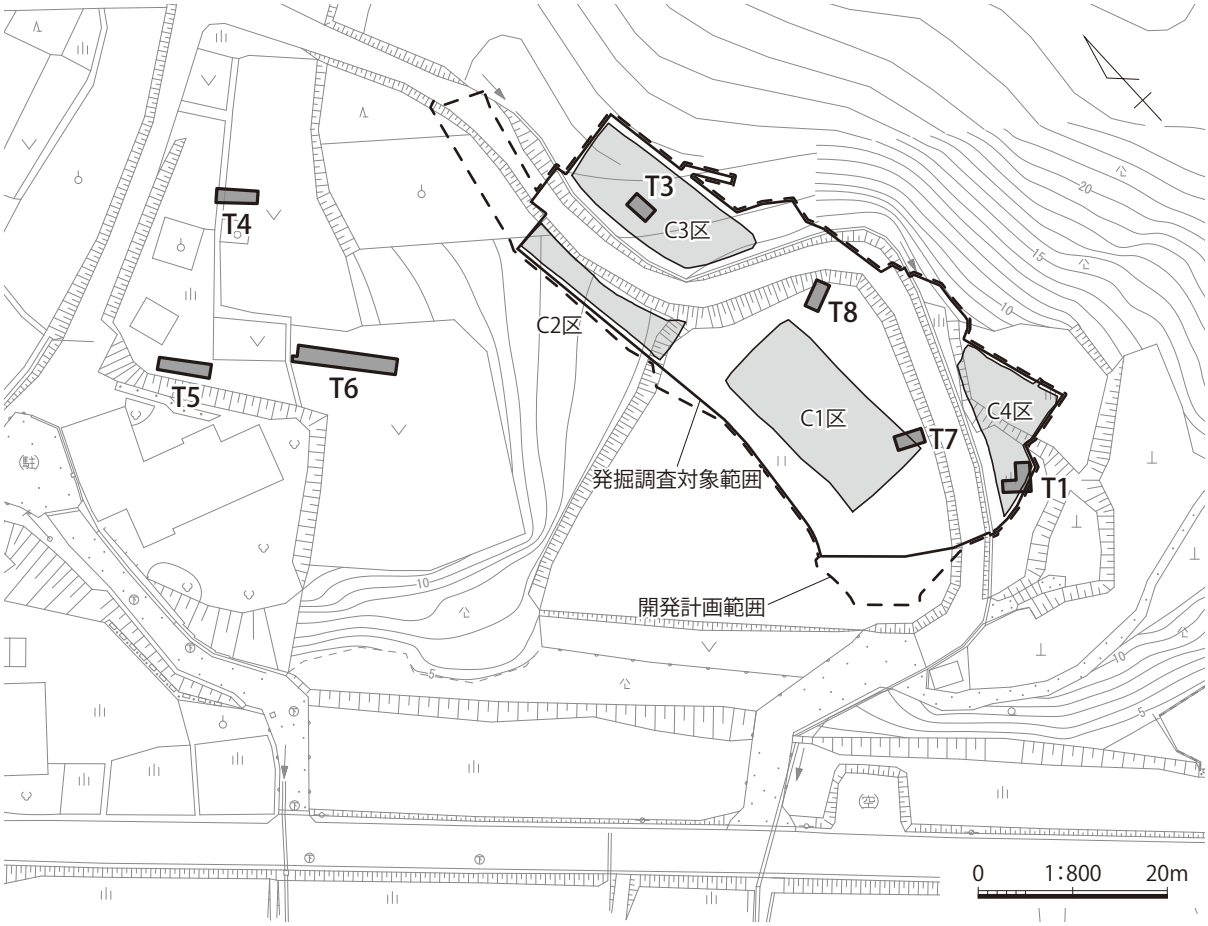
朝酌矢田地区共同墓地整備事業に先立って、開発予定地内において遺跡の存在を確認するために松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を実施した。試掘調査は 2 次にわたり、第 1 次調査は遺跡の有無確認、第 2 次調査は遺跡推定範囲内で試掘調査の承諾が得られていなかった水田部分において、遺跡までの深さを確認するための追加調査を目的とし、開発予定地内に合計 8 箇所のトレンチを設定して重機掘削と手掘りによる調査を行った。トレンチ調査の詳細は表 1 に、トレンチの位置関係は第 6 図に示し、以下では試掘調査の概要と調査結果について述べる。

第 1 次調査は、開発予定地内に 6 箇所のトレンチ（T1 ～ T6）を設定し、平成 29 年 3 月 22 日～ 24 日に調査を実施した。トレンチは平坦地や緩斜面に散在的に設定しているが、概ね地形の傾斜に沿った方向を主軸とし、調査面積は合計 35.8㎡である。調査の結果、開発予定地内の中央部～南側に設定した T1 で谷の落ち込み、T3 で遺物包含層を検出し、開発予定地内の北側に設定した T6 で柱穴と土坑を検出した。遺物は、T1 から須恵器・中世土師器、T3 の遺物包含層から古墳時代の土師器・須恵器、T6 の土坑から近世土師器が出土した。開発予定地内の北側に設定した T4・T5 から遺構と遺物は検出していない。第 1 次調査では、開発予定地内の中央部～南側（T1 ～ T3 の範囲）にかけて古墳時代から中世までの遺跡が存在することを確認した。遺跡の呼称は当地の小字名をとって「若宮谷遺跡」とし、文化財保護法上の手続きを行った。

第 2 次調査は、開発予定地内の南東側の水田部分に 2 箇所の追加トレンチ（T7・T8）を設定し、平成 30 年 2 月 15 日に調査を実施した。調査面積は合計 9.0㎡である。調査の結果、T7・T8 でいずれも遺物包含層を検出した。遺物は、T7 の表土直下の粘土層から中世土師器が出土し、また、T7・T8 の谷地形の底面付近に厚く堆積する礫層直上の粘土層から古墳時代～古代の土師器・須恵器が出土した。以上の試掘結果を踏まえて、T1・T3・T7・T8 にかかる場所を遺跡範囲として本発掘調査を実施するに至った。

表 1　若宮谷遺跡試掘調査トレンチ一覧

調査次数	トレンチ	現況（調査前）	設定箇所	トレンチ設定方向	設定範囲（長軸×短軸）	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
第 1 次	T1	草地	C4 区南	北東－南西	3.0m × 1.5m（南西側へ 1.0m拡張）	5.50㎡	120㎝	谷地形の落ち込み	須恵器・中世土師器
	T2	試掘調査の承諾が得られなかったため未実施							
	T3	竹林	C3 区北	南－北	3.0m × 1.5m	4.50㎡	170㎝	遺物包含層	土師器・須恵器
	T4	畑地	調査区外	北西－南東	4.0m × 1.2m	4.80㎡	20㎝	遺構無し	遺物無し
	T5	畑地	調査区外	北西－南東	5.0m × 1.2m	6.00㎡	40㎝	遺構無し	遺物無し
	T6	畑地	調査区外	北西－南東	10.0m × 1.5m	15.00㎡	30㎝	柱穴 6・土坑 3	近世土師器
第 2 次	T7	水田	C1 区南東	東－西	3.0m × 1.5m	4.50㎡	200㎝	遺物包含層	土師器・須恵器・中世土師器
	T8	水田	C1 区北東	北東－南西	3.0m × 1.5m	4.50㎡	172㎝	遺物包含層	土師器・須恵器



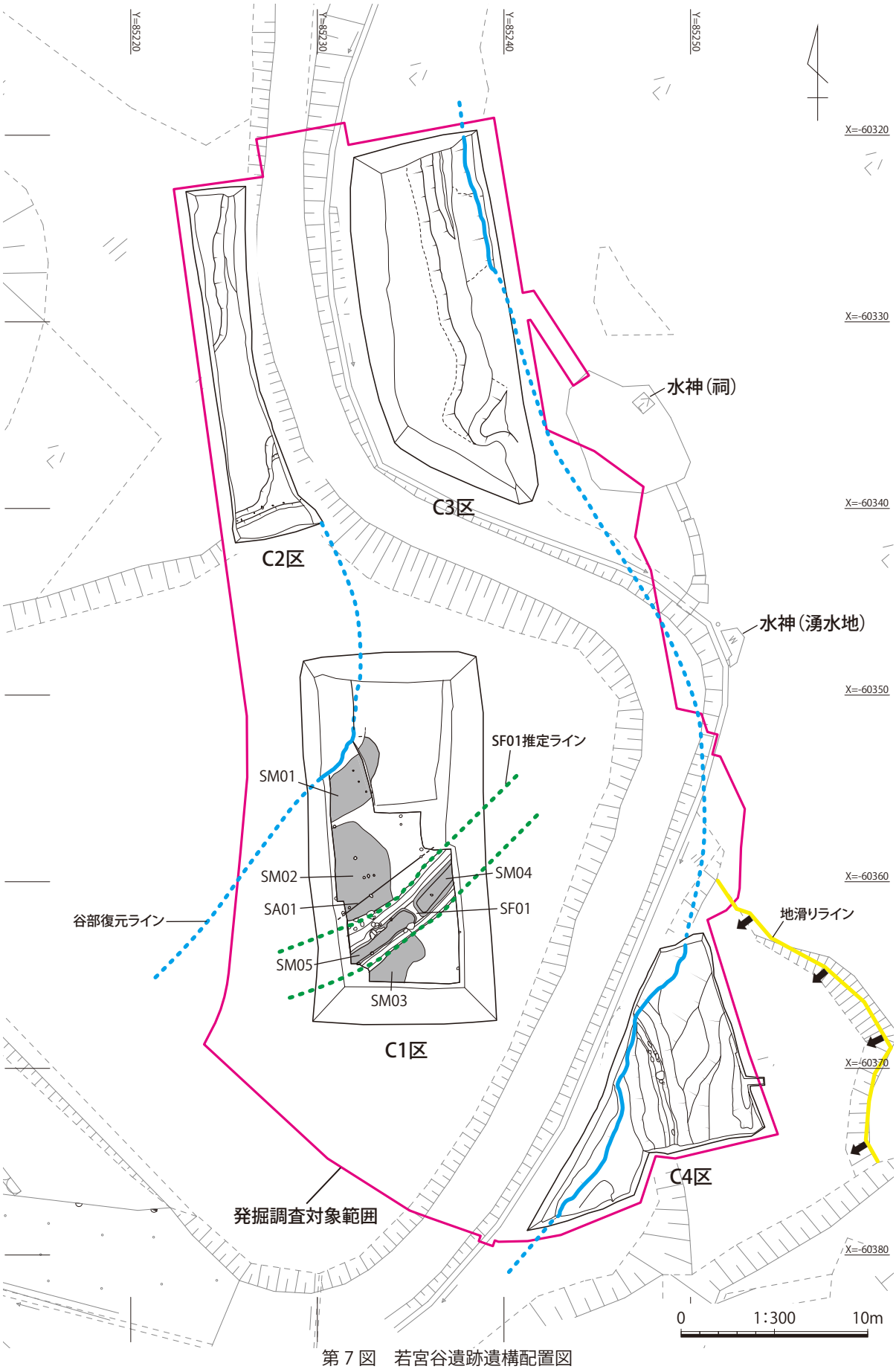
第６図　若宮谷遺跡試掘トレンチ配置図

第２項　本調査の概要（第７図）

試掘調査を行った結果、開発予定地内に遺跡が存在することを確認した。このため、開発予定地内の工事で遺跡に影響がおよぶ範囲について、遺跡の詳細を記録するために本発掘調査を実施した。

今回の調査では、C1 区で２つの遺構面を検出したが、それ以外の C2 ～ 4 区において明確な遺構は検出していない。C2 区と C3 区では埋没谷に堆積する遺物包含層の調査が主体となっている。遺物包含層の出土遺物はほとんどが破片で、縄文時代から古代までの各時期にわたる。検出遺構と遺物の出土量から想定される遺跡の時期的なピークは、古墳時代前期～中期前葉・古代・中世後期の３時期と考えている。

縄文時代に属する遺物は希薄で、後期の土器や石器が少量出土した。弥生時代に属する遺物も希薄だが、後期を主体とする壺甕類などの土器や石器が少量出土した。古墳時代に属する遺物は、前期～中期を主体とする複合口縁や単純口縁の壺甕類などの土師器が多量に出土した。古代に属する遺物は、7 世紀末～ 8 世紀を主体とする無高台坏・高台付皿・蓋坏・高坏などの須恵器が多量に出土した。中世の遺構は、C1 区の第 1 遺構面で杭列 SA01 と両側側溝を伴う道路 SF01 を検出したほか、第 2 遺構面で貝塚 SM01 ～ 05 を検出した。当該期に属する遺物は、14 世紀後半～ 15 世紀後半を主体とする中世陶磁器・中世土師器・木製品・金属製品・銭貨・石製品・動物遺存体が一定量出土した。



第７図　若宮谷遺跡遺構配置図

第２節　C1 区の調査

C1 区は、遺跡範囲の南西側にあたる標高 5.90mを測る水田部分に位置し、既存道路の西側に東西 10.0m×南北 20.0mの範囲で設定した長方形の調査区である。発掘調査は、重機により表土（耕作土）を剥ぎ取り、以下は重機を併用しながら人力掘削によって遺構面および遺構の検出を行った。土層観察は、調査区内に面する東西南北の四方の壁面を記録した。

第１項　基本層序（第８・９図）

ここでは C1 区の基本土層模式図を第８図、北壁・西壁土層図を第９図に示し、土層の詳細について述べる。調査区西壁土層を標準とした基本的な層序は、上層から耕作土（第１層）、暗灰色粘質土（第２層）、淡灰色粘土（第３層）、黒色有機質粘土を主体とする混貝土層（第４層）、黒褐色粘質土（第５層）、礫層（第６層）、砂礫層（第７層）、淡黄灰色粘土（第８層）からなる土層堆積を確認した。

第１層は標高 5.90mに堆積する層厚 30㎝の茶褐色粘質土（耕作土）である。第２層は標高 5.60mに堆積する層厚 30 ～ 70㎝の暗灰色粘質土である。第３層は標高 4.80 ～ 5.40mに堆積する層厚 30㎝の淡灰色～灰白色粘土で、この土層上面で木杭と道路遺構を検出したことから第１遺構面とした。遺物は中世陶磁器・中世土師器（墨書土師器含む）・木製品・金属製品・石製品が出土している。第４層は標高 4.30 ～ 4.80mに堆積する層厚 15 ～ 35㎝の黒色有機質粘土を主体とする混貝土層（土壌が大部分を占め、貝殻が混じる層）で、この土層上面で貝塚の遺構を検出したことから第２遺構面とした。遺物は中世陶磁器・中世土師器・土製品・銭貨・動物遺存体が出土している。第５層は標高 4.10 ～ 4.50mに堆積する層厚 30㎝の黒褐色粘質土で、遺物は須恵器が出土している。第６層は標高 3.80 ～ 4.20mに堆積する層厚 10 ～ 20㎝の大海崎石[(2)]や河原石を主体とする礫層で、遺物は須恵器が出土している。第７層は標高 3.50 ～ 3.80mに堆積する層厚 30㎝前後の砂礫層で、遺物は縄文土器・弥生土器・土師器が出土している。この砂礫層は調査区内全域ではみられず、南端の一部で確認した土層である。第８層は淡黄灰色粘土の地山である。地山面の検出標高は、調査区北端で標高 4.80m、中央部で標高 4.20m、南端で標高 3.40m を測り、北から南に向かって傾斜している。

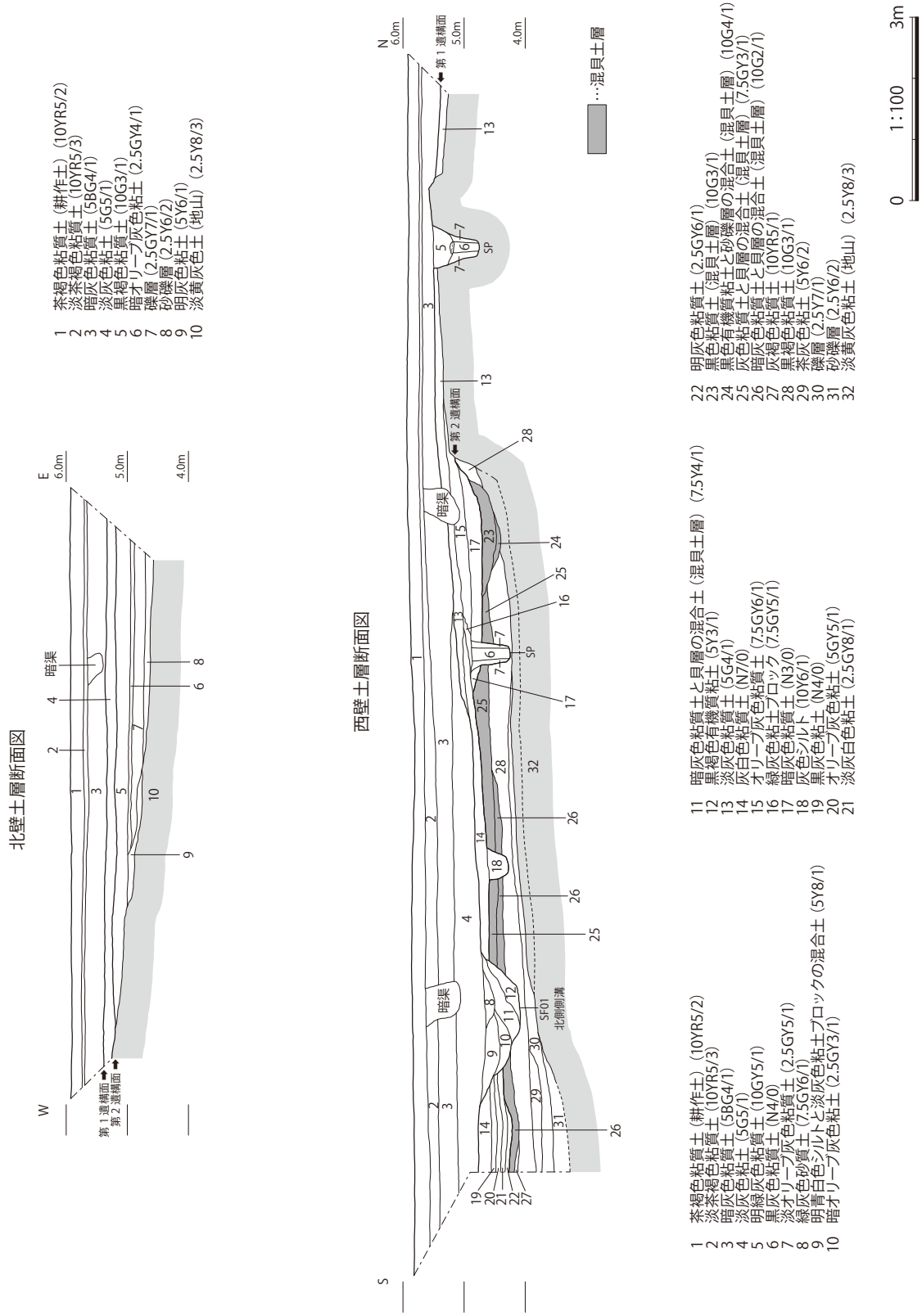
C1 区基本土層

第１層（耕作土）
第２層
第３層（第１遺構面）
第４層（第２遺構面）
第５層
第６層（礫層）
第７層（砂礫層）
第８層（地山）

C1 区基本土層と西壁土層の対応関係

第１層 ＝ 西壁第１・２層　茶褐色粘質土
第２層 ＝ 西壁第３・４層　暗灰色粘質土
第３層 ＝ 西壁第 13・14 層　淡灰色粘土
第４層 ＝ 西壁第 23 ～ 26 層　混貝土層（貝塚）
第５層 ＝ 西壁第 28 層　黒褐色粘質土
第６層 ＝ 西壁第 30 層　礫層
第７層 ＝ 西壁第 31 層　砂礫層
第８層 ＝ 西壁第 32 層　淡黄灰色粘土

第８図　C1 区基本土層模式図



第 9 図　C1 区北壁・西壁土層図

第２項　第１遺構面

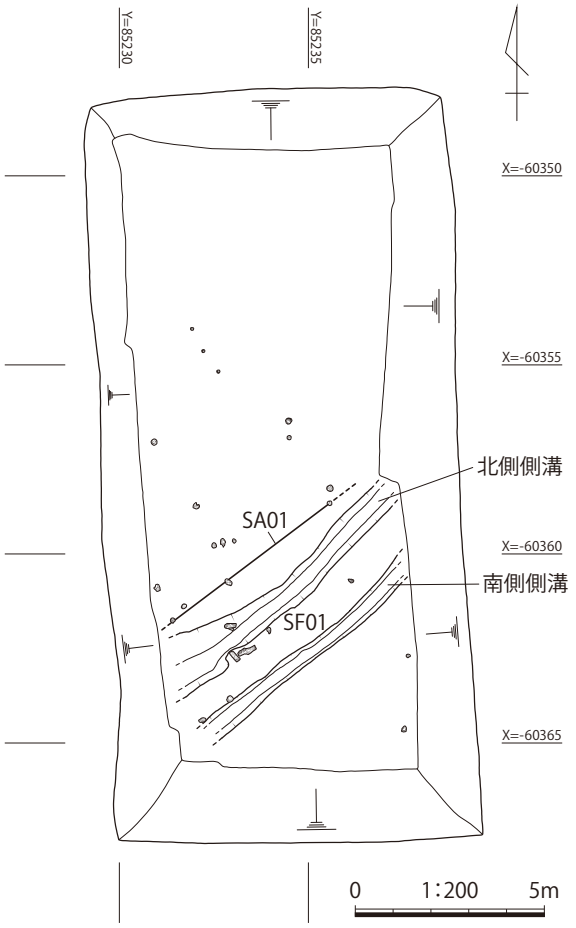
調査の結果、C1 区では２つの遺構面を検出した。遺構面の呼称は、層位上層の淡灰色粘土（基本層序第３層）の遺構検出面を第１遺構面、その下層に堆積する黒色有機質粘土を主体とした混貝土層（基本層序第４層）の遺構検出面を第２遺構面として取り扱う。

遺構は､第１遺構面で杭列 SA01 と道路 SF01､第２遺構面で貝塚 SM01 ～ 05 を検出した。遺物は、C1 区全体を通して縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・木製品・金属製品・銭貨・石製品・土製品・動物遺存体が出土した。以下では各遺構面の詳細について報告する。

第１遺構面の概要（第 10 図）

第１遺構面は、標高 4.80 ～ 5.40m で検出した遺構面である。遺構は、杭列 SA01 と両側側溝を伴う道路 SF01 を検出した。遺構面は、現地表面（標高 5.90m）以下に堆積する、層厚 50 ～ 110㎝の耕作土および暗灰色粘質土を除去した段階で遺構を検出したことから、これを第１遺構面とした。

第１遺構面の基盤層となる淡灰色粘土は層厚 30㎝を測る。遺構面の検出標高は、調査区北端で標高 5.40m、中央部で標高 5.10m、南端で標高 4.80m を測り、北から南に向かって緩やかに傾斜している。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 15 世紀前半～後半を想定している。



第 10 図　C1 区第１遺構面平面図

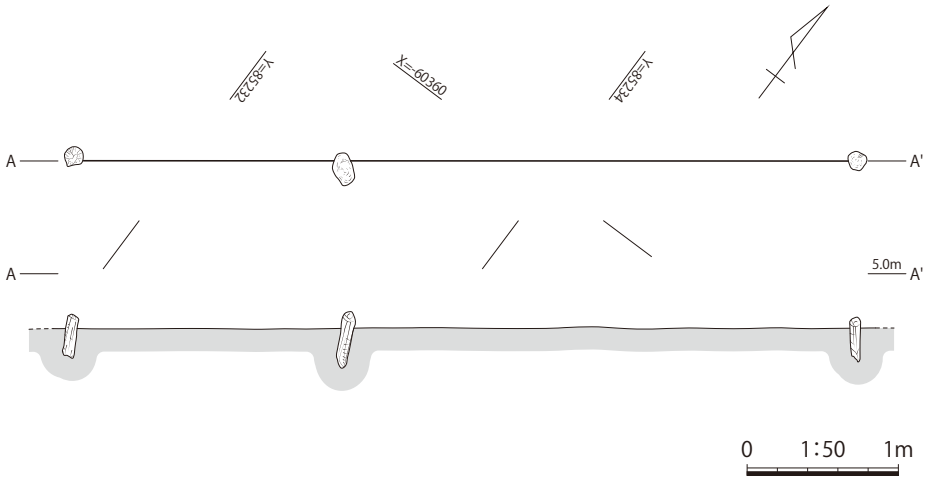
杭列 SA01

①遺構の概要（第 11 図）

調査区内中央から南側にかけて疎らに 25 本の木杭を検出したが、このなかで後述する SF01 の主軸と同一方向を示す木杭を杭列 SA01 とした。SA01 は、標高 4.80m のほぼ平坦面で北東－南西方向に配置される。検出した範囲での規模は、長さ 5.3m 以上を測り、主軸方位は N － 52°－ E である。木杭は直径 12 ～ 15㎝、残存長 60 ～ 80㎝で、自然木の先端を加工した杭と丸太材をミカン割りにして先端を加工した杭が混在しており、木杭の間隔は 1.8 ～ 3.4m を測る。

②遺構の性格と時期

SA01 は SF01 の北側に並行する位置関係にあり、SF01 と同時期に併存していた可能性は高いものと考えている。SA01 の性格は SF01 に伴う遮蔽施設と考えられ、時期は SF01 と同様に 15 世紀前半～後半に属する遺構と想定しておきたい。



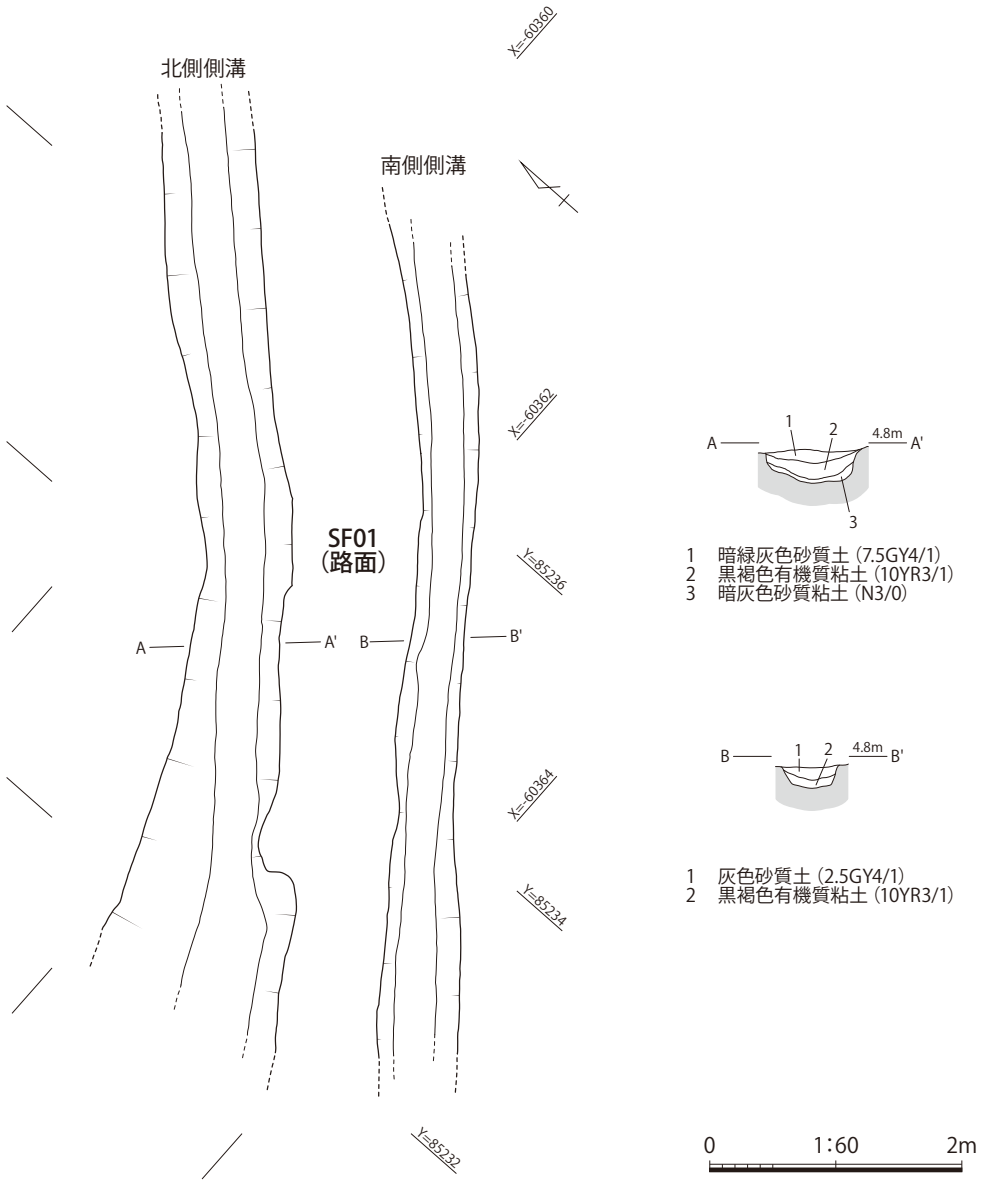
第 11 図　SA01 平面図・断面図

道路 SF01

①遺構の概要（第 12 図）

SF01 は、調査区内南側に位置する標高 4.50 ～ 5.20m で検出した道路跡である。SF01 は北東－南西方向に直線的に延び、道路の両側には排水機能をもつ側溝を伴う。検出した範囲での規模は、長さ 8.0m 以上、幅 2.5 ～ 2.8m を測り、主軸方位は N － 52°－ E で道路の両端は調査区外へ続く。路面は幅 1.0 ～ 1.2m を測り、断面形は蒲鉾状を呈する。路面の検出面には直径 1㎝前後の円礫を含む暗灰色粘質土が堆積する。

SF01 の両側で検出した道路側溝はいずれも素掘溝で、断面形は浅い U 字状を呈する。北側側溝の規模は、長さ 7.0m 以上、幅 80 ～ 95㎝、深さ 30 ～ 40㎝を測る。北側側溝から 1.5m 離れた位置で、SF01 の主軸と並行する形で検出した南側側溝の規模は、長さ 6.5m 以上、幅 40 ～ 60㎝、深さ 20 ～ 30㎝を測る。側溝の底部は標高 4.20 ～ 4.60m で、排水方向は北東から南西に向かって下る。側溝の埋土は上層から暗緑灰色砂質土・黒褐色有機質粘土・暗灰色砂質粘土が堆積する。



第 12 図　SF01 平面図・断面図

② SF01 出土遺物（第 13 ～ 16 図）

遺物は SF01 の検出面および道路側溝の埋土中から中世陶磁器・中世土師器（墨書土師器を含む）・石製品・金属製品・木製品が出土した。第 13 図に SF01 出土遺物の分布状況を図示している。

中世陶磁器　14-1 ～ 9 は貿易陶磁器である。14-2・4・9 は厳密には遺構外出土遺物となるが、SF01 と近接した位置から出土しているため、ここに含めた。14-1 は白磁の端反碗で、口縁部のみ残存する。15 世紀前半、森田編年白磁碗 B 群に相当する。14-2 は白磁碗で、胴部のみ残存する。胴部下方の外面は露胎。15 世紀前半のものか。14-3 は青磁の蓮弁文碗で、胴部のみ残存する。外面にヘラ先による細線で幅広の蓮弁文を描く。15 世紀後半、上田分類龍泉窯系碗 B2 類に相当する。14-4 は青磁の雷文帯碗である。口縁部外面に雷文帯、胴部外面に大きな線描きの蓮弁文をもつ。15 世紀前半～中頃、上田分類龍泉窯系碗 C2 類に相当する。14-5 ～ 9 は青磁の端反碗である。14-5 ～ 8 は口縁部のみ残存、14-9 は底部のみ残存する。14-6 には断面に漆継ぎの痕跡がみられる。14-9 は見込みに草花文の陰刻

をもち、畳付は無釉。14-5 ～ 9 は 15 世紀中頃～後半、上田分類龍泉窯系碗 D 類に相当する。

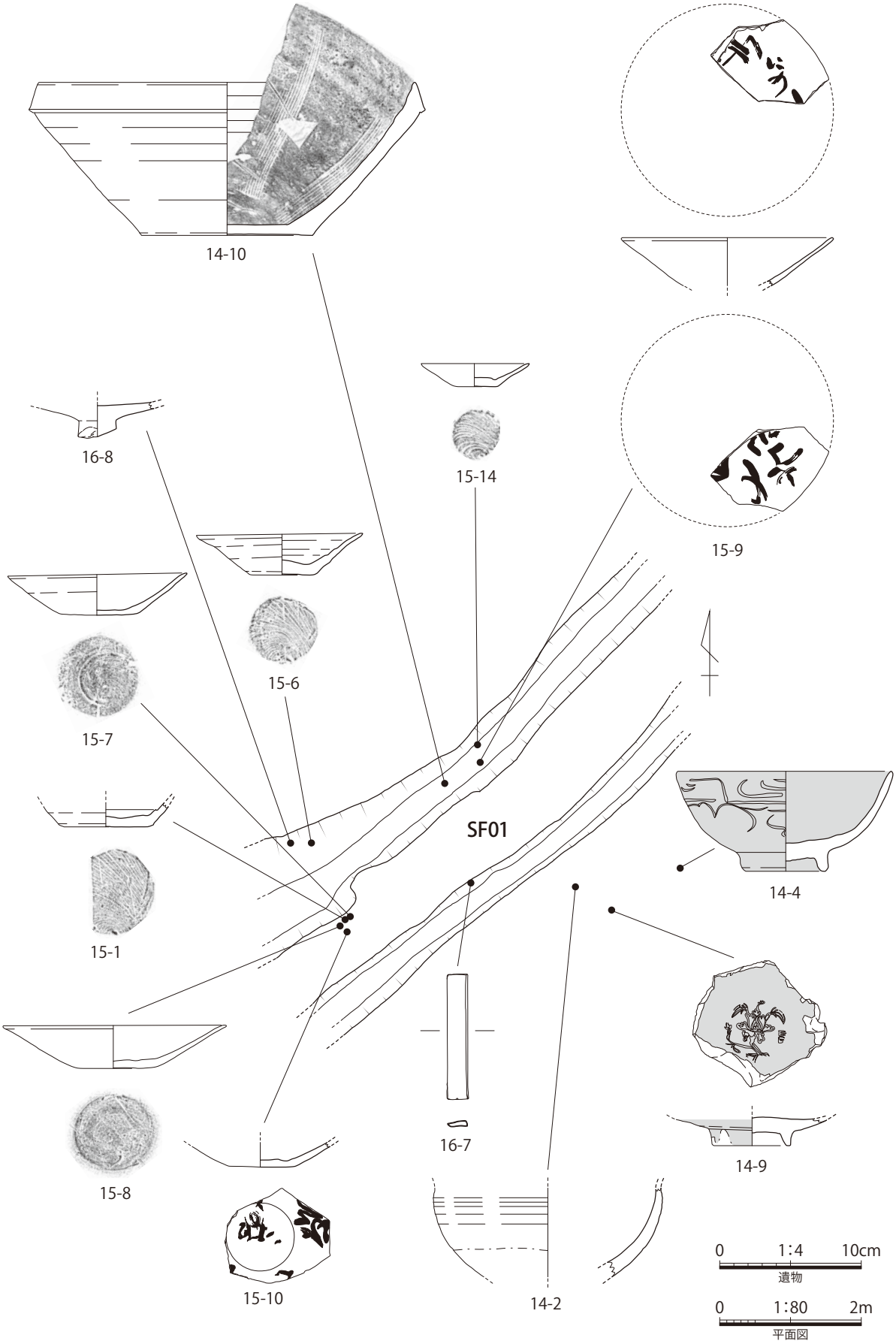
14-10 ～ 12 は国産陶磁器である。14-10・11 は備前の擂鉢である。14-10 は底部から口縁部への拡張が明確化し、口縁部外面の半ばに屈曲部をもち、下角の垂下を僅かに突出させる。胎土は暗赤褐色を呈し、砂粒を含む。15 世紀中頃、乗岡編年中世 4b 期に相当する。14-11 は 14-10 よりもやや新しいタイプで、口縁部の立ち上がりが台形状で、真上に向かう。口縁部外面の下角の垂下は小さくてシャープである。胎土は赤褐色を呈する。15 世紀中頃～後半、乗岡編年中世 5a 期に相当する。14-12 は瀬戸・美濃陶器の卸目付大皿の口縁部である。口縁上端部をくの字状に屈曲させている。断面に漆継ぎの痕跡がみられる。15 世紀前半、古瀬戸編年後期様式Ⅲ期に相当する。

中世土師器　15-1 ～ 10 は土師器坏、15-11 ～ 14 は土師器皿である。15-1 ～ 3 は橙褐色を呈する坏で、15-1・2 は底部のみ残存する。15-3 は底部と口縁部径の差が少なく、底部から体部への立ち上がりの傾斜がきつく、器高が高い。口縁部～体部上方に油煙痕がみられることから、灯明皿として使用されたものか。15-4・5 は褐色～橙褐色を呈する坏で、口縁部が大きくなるために体部が開き気味に立ち上がり、体部下半に丸みがなくなる。15-6 は橙褐色を呈する坏で、体部が外反気味に立ち上がり、体部下半に丸みを残している。15-7 ～ 10 は灰白色を呈する坏で、口径が大きく、器高が低い。体部の器壁が薄く、底部から体部への立ち上がりが開き気味に外傾して直線的である。15-8 は器壁が一段と薄くなっている。15-9・10 は墨書土師器である。15-9 は口縁部のみ残存し、内面に記号と「にの」の文字、外面に判読不明の文字が墨書されている。15-10 は底部のみ残存し、外面中央に梵字または記号が墨書されている。15-11 ～ 14 は橙色～褐色を呈する土師器皿である。15-11 は内外面全体に油煙痕または灯心油痕がみられることから、灯明皿と考えられる。土師器の時期は 15-1 ～ 3 が 14 世紀後半、15-4 ～ 6・11・12 が 15 世紀前半、15-7 ～ 10・13・14 が 15 世紀後半と考えられる。

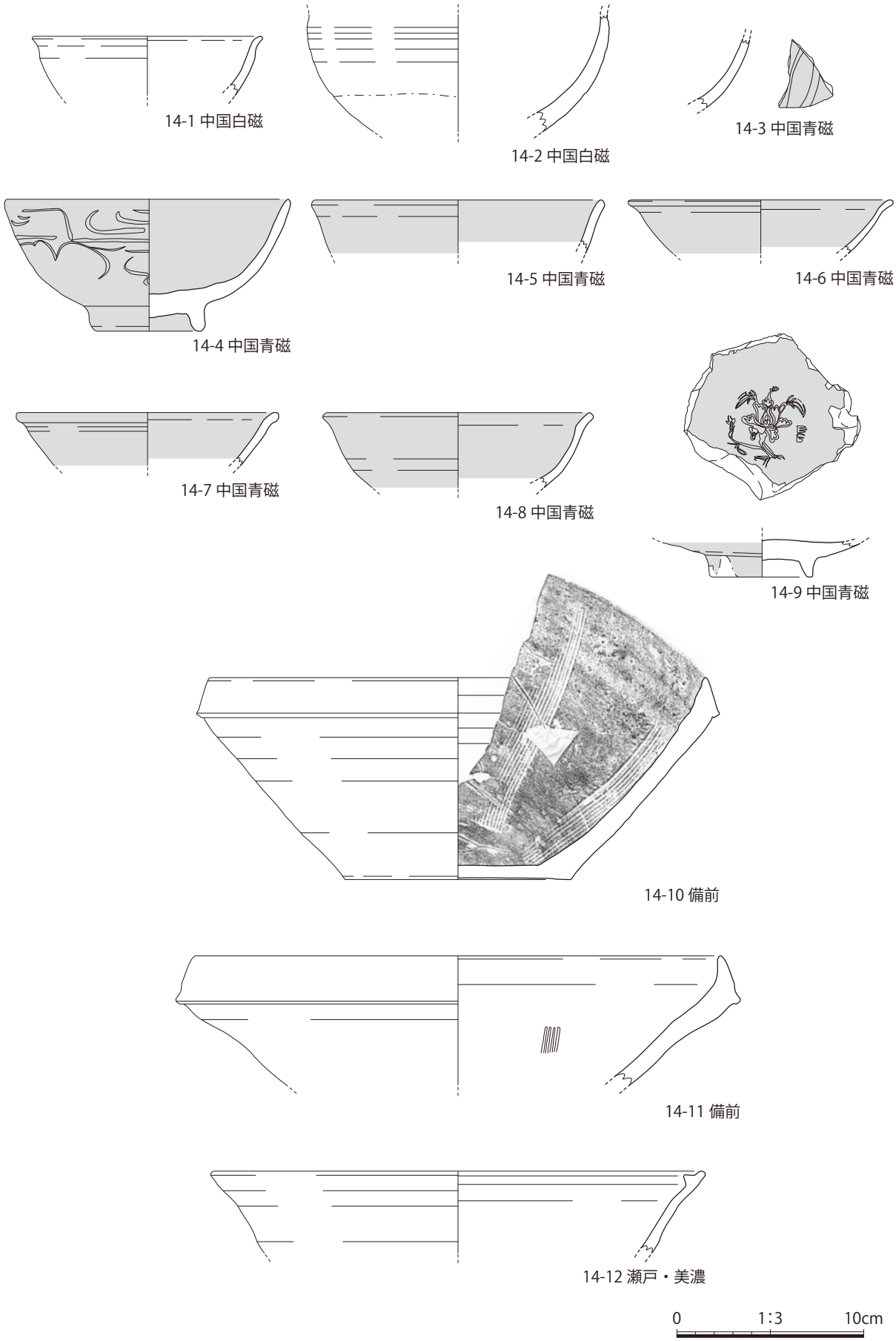
石製品　16-1 ～ 3 は砥石である。16-1 は凝灰岩製の仕上げ砥で、上下は欠損している。残存長 4.5㎝、幅 3.3㎝、厚さ 1.0㎝を測り、断面形は平行四辺形を呈する。 4 面の使用が認められ、表面には横方向の筋状使用痕が顕著にみられる。16-2 は粘板岩製の仕上げ砥で、上下は欠損している。残存長 5.1㎝、幅 3.5㎝、厚さ 8㎜を測り、断面形は長方形を呈する。表裏 2 面の使用が認められ、両面に斜め方向の磨痕がみられる。16-3 は砂岩製の荒砥で、上下は欠損している。残存長 8.8㎝、幅 3.4㎝、厚さ 2.2㎝を測り、断面形は正方形を呈する。4 面の使用が認められ、上方に向けて磨り減っている。

金属製品　16-4 ～ 6 は鉄釘である。鉄釘は長短の差はあるが、いずれも頭巻の角釘で、16-4・6 は使用により湾曲している。16-7 は真鍮製の小柄である。柄部のみ残存し、外面は無文である。16-8 は鉄鍋である。底部のみ残存し、鉄鍋を鋳造する際の湯口部分（丸型湯口）が残っている。

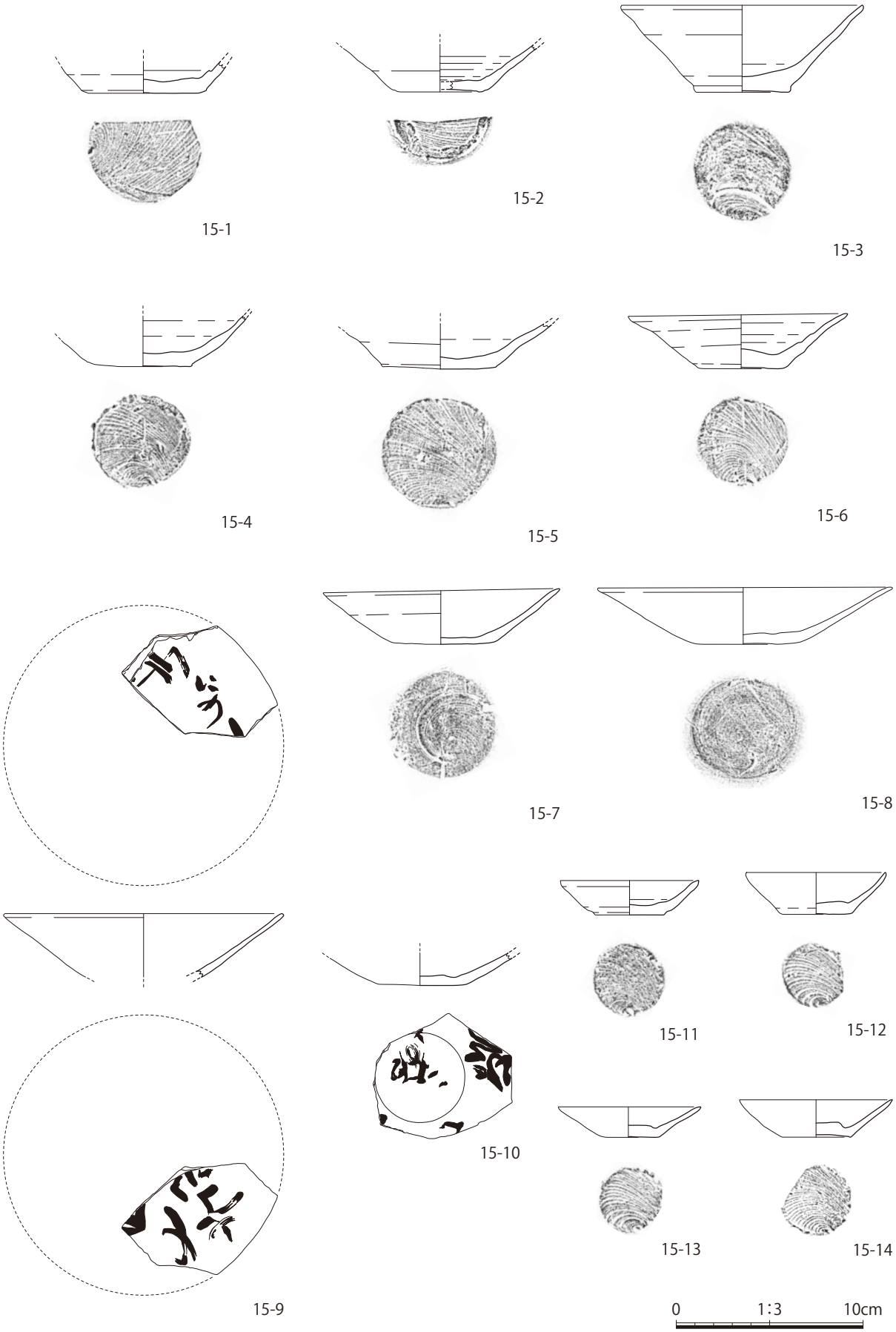
木製品　16-9 は曲物の底板で、1/2 程度残存し、木取りは柾目である。16-10 は部材の一部と考えられるが、用途不明品である。底部両端にはスリット状の抉り加工がみられ、断面形は蟻組継ぎのような形状を呈する。16-11・12 は木錘である。丸木材が用いられ、円柱状の丸材の両端に丸木面を残し、中央に向かって両側から円錘形状に削り込む。いずれも粗雑な加工で、いわゆる「槌の子」である。16-13 ～ 15 は箸である。いずれも白木の箸で、中心付近に最大径をもつ両口箸である。16-16 は叩板または杓子形木器である。羽子板状を呈し、木取りは目の詰んだ柾目である。



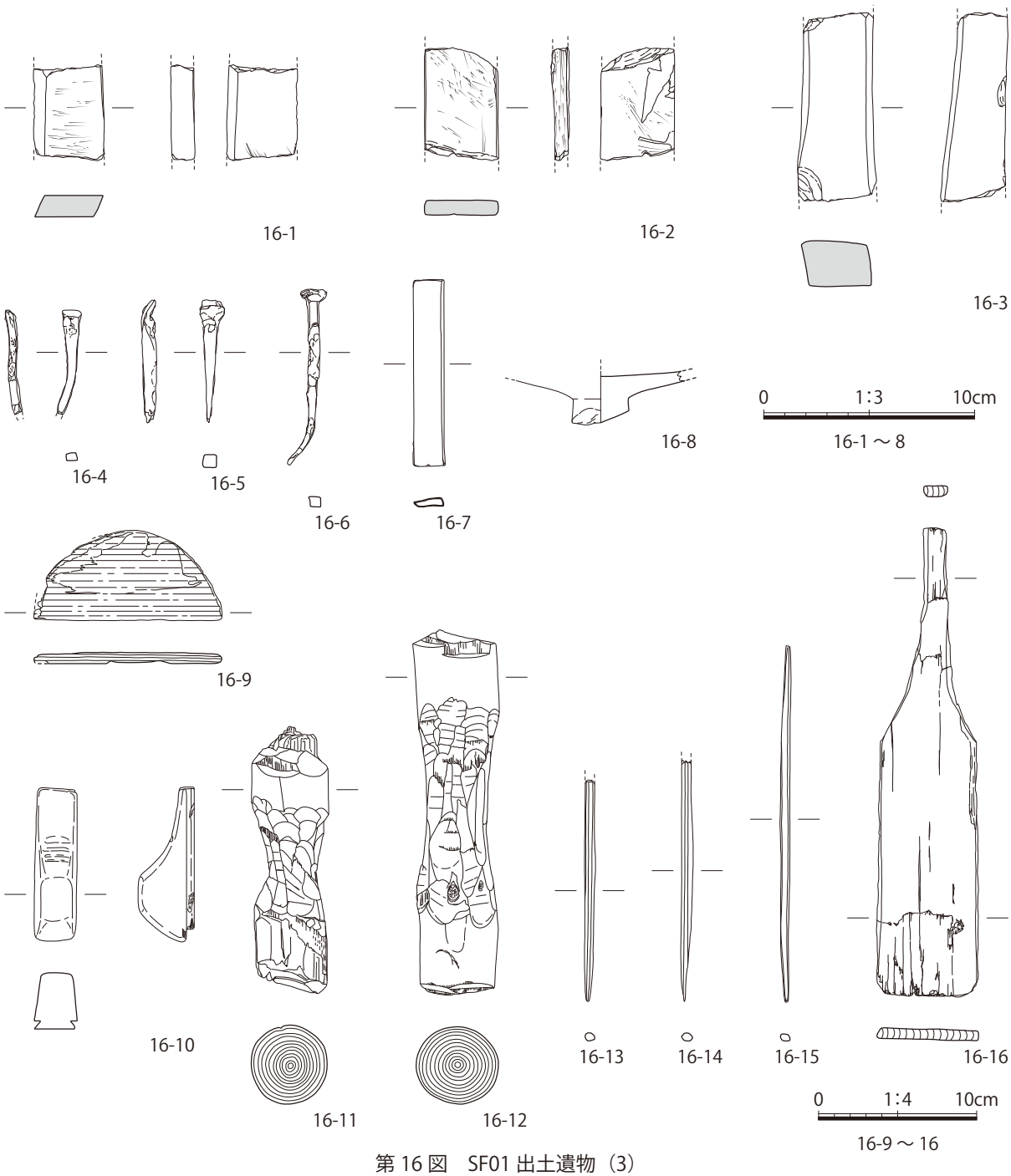
第 13 図　SF01 出土遺物分布図（遺物 S=1：4）



第 14 図　SF01 出土遺物（1）



第 15 図　SF01 出土遺物（2）



第 16 図　SF01 出土遺物（3）

③遺構の性格と時期

SF01 の検出箇所から調査区外となる北東方向の延長線上には、現在も清水が湧き出る泉とその北側隣接地に「水神」の祠が祀られている。ただし、この祠には紀年銘がなく、いつから祀られていたのかを明確に遡ることができる史料は確認できていない[(3)]。SF01 の性格は遺構の検出位置から「水神」へ向かう道路（里道）として利用されていた可能性が考えられる。時期は出土遺物から 15 世紀前半～後半を想定している。また、SF01 の出土遺物には、土師器の内外面に梵字または記号が書かれている墨書土師器（第 15 図 15-9・10）が含まれている。これらは祭祀（水辺の祭祀か）に関連した遺物である可能性が考えられ[(4)]、「水神」も当該期には存在していたものと想定される。

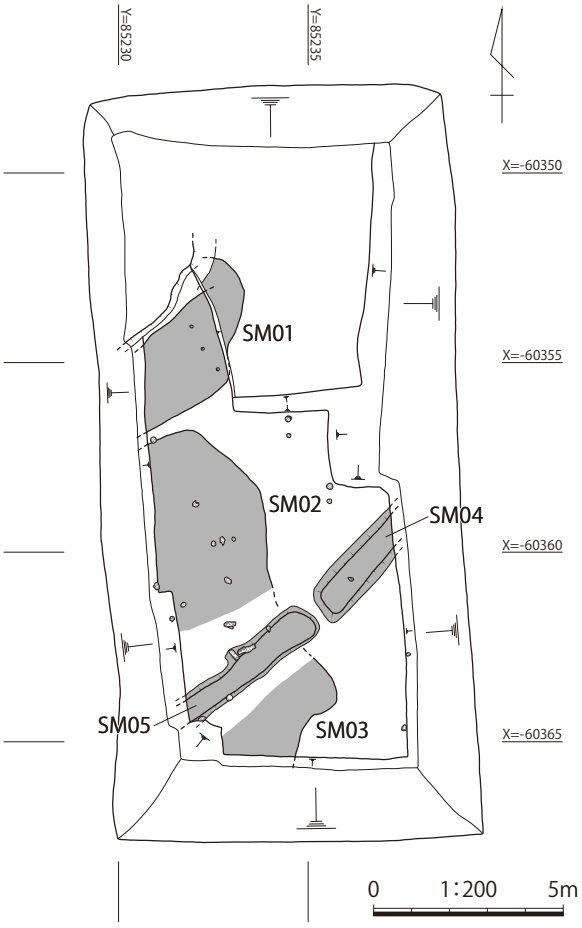
第３項　第２遺構面

第２遺構面の概要（第 17 図）

第２遺構面は、標高 4.30 ～ 4.80m で検出した遺構面である。遺構は、貝塚 SM01 ～ 05 を検出した。遺構面は、第１遺構面の基盤層である淡灰色粘土を掘り下げた段階で遺構を検出したことから、これを第２遺構面とした。なお、SM04・05 は第１遺構面の SF01 と重複する位置で検出した貝塚で、SF01 に伴う側溝の掘り込みによって SM02 の南側と SM03 の北側の貝塚の一部は消失している。

第２遺構面の基盤層となる黒色有機質粘土を主体とする混貝土層は層厚 15 ～ 35㎝を測る。遺構面の検出標高は、調査区北端で標高 4.80m、中央部で標高 4.60m、南端で標高 4.30m を測り、第１遺構面と同様に北から南に向かって緩やかに傾斜している。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 14 世紀後半～ 15 世紀前半を想定している。また、第２遺構面で出土した混貝土層の資料採取は、発掘調査時に全量回収を行っている。

採取した資料の整理作業は、令和２年度に出土遺物整理業務として令和２年 10 月～令和３年１月に実施した。この整理作業では、混貝土層に含まれる貝類や魚類などの動物遺存体の種別および個体数の把握を主な目的として、まず採取した貝層の洗浄作業から取り掛かった。その後の段階で、貝類・骨類・その他の３つのグループに仕分ける分類作業を行った。若宮谷遺跡から出土した動物遺存体の分析結果の詳細については、第５章を参照されたい。



第 17 図　C1 区第２遺構面平面図

貝塚 SM01 ～ 05

①遺構の概要（第 18 図）

SM01 ～ 05 は、第 1 遺構面の検出面から 30㎝前後掘り下げた段階に、調査区内の 5 箇所でヤマトシジミとサルボウを中心とした貝塚の広がりを確認したものである。貝塚の平面プランは標高 4.50 ～ 4.80m で検出し、遺構を検出した順に SM01 ～ 05 と呼称した。調査時に SM01 ～ 05 の 5 つに分けているが、これらは一連の遺構である。以下では各貝塚について詳細を述べる。

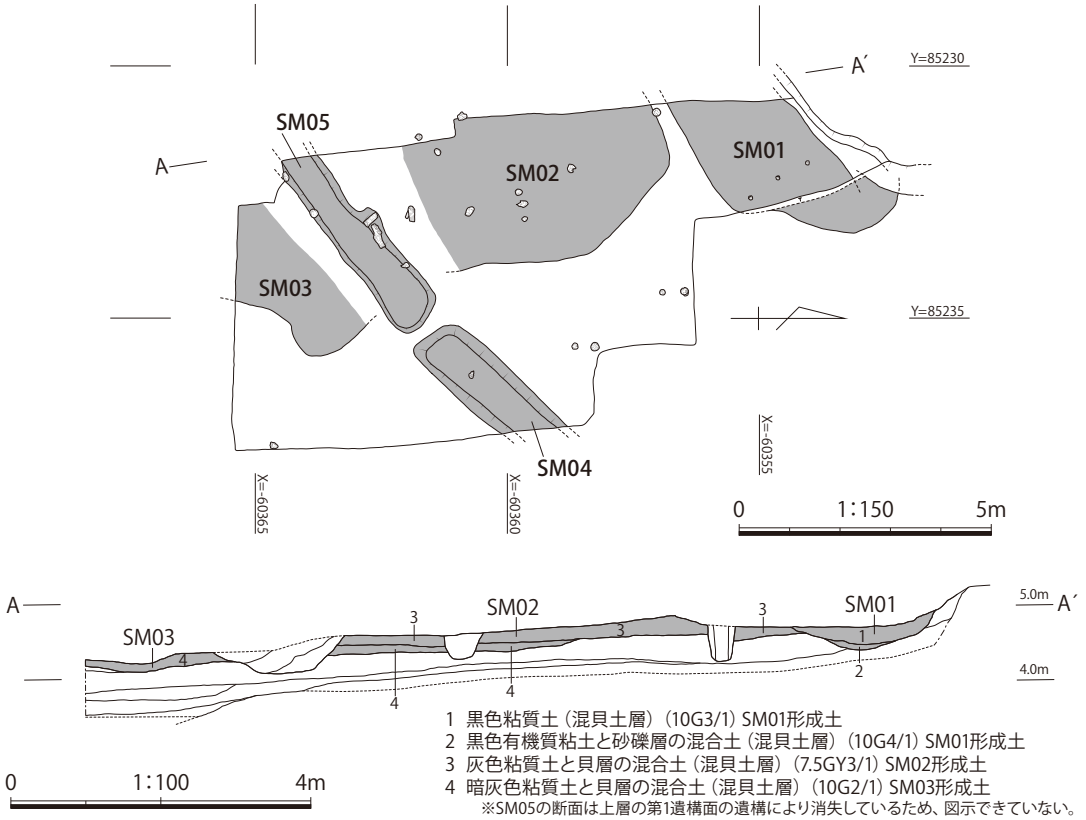
SM01　調査区北西側に位置する標高 4.80m で検出した貝塚である。検出した範囲での規模は、東西 2.5m ×南北 2.7m、層厚 35㎝を測る。混貝土層が堆積し、断面では土坑状の堆積を確認した。

SM02　調査区中央の西寄りに位置する標高 4.80m で検出した貝塚である。検出した範囲での規模は、東西 3.0m ×南北 5.2m、層厚 25㎝を測る。混貝土層が堆積し、遺構内西側は貝層の密度が高い。

SM03　調査区南西側に位置する標高 4.70m で検出した貝塚である。検出した範囲での規模は、長さ 3.2m、幅 1.2m、層厚 30㎝を測る。平面形は北東－南西方向の長楕円形を呈し、蒲鉾状に盛り上がった状態で混貝土層が堆積する。

SM04　調査区南東側に位置する標高 4.70m で検出した貝塚である。検出した範囲での規模は、長さ 4.3m、幅 70 ～ 90㎝、層厚 30㎝を測る。SM03 と同様に平面形は北東－南西方向の長楕円形を呈し、蒲鉾状に盛り上がった状態で混貝土層が堆積する。

SM05　調査区南側に位置する標高 4.50m で検出した貝塚である。検出した範囲での規模は、東西 3.0 m×南北 2.7 m、層厚 15 ～ 20㎝を測る。混貝土層が堆積し、遺構内西側は貝層の密度が高い。



第 18 図　SM01 ～ 05 平面図・断面図

②混貝土層の資料採取（第 19 図）

検出した貝塚を形成している貝層は、基本的にすべて混貝土層である。資料採取は、調査時にSM01 ～ 05 検出範囲の全面にかかる 50㎝四方を 1 単位とする任意のグリッドを設定して、厚手のビニール袋と土嚢袋を用いて混貝土層のみの取り上げを行った。グリッドは SM01 の北西角に任意の基点を設け、行番号は基点から東に向けてアルファベット順、列番号は基点から南に向けてアラビア数字順に付し、各区画は行・列の順に番号を繋いで呼称した。1 箇所のグリッドからの採取土量が多くなる場合には、土嚢袋にグリッド名と枝番号を付記して取り上げを行った。資料採取の結果、土嚢袋 185 袋分におよぶ混貝土層を全量回収した。

③採取資料の整理

採取資料の整理作業は、初めにウォーターセパレーションを使用して混貝土層の水洗選別から行った。ウォーターセパレーションは直径 52㎝を測る円筒状の樽で、樽の内側に 5㎜メッシュ（カゴ大）・2.5㎜メッシュ（カゴ中）・1㎜メッシュ（カゴ小）の金属製のカゴを 3 層構造にして、土壌を水洗いしながら篩にかけることで細かい遺物を拾い上げる装置である。洗浄作業後には拾い上げた動物遺存体の乾燥を行い、グリッドごとにカゴ大・中・小に仕分けてビニール袋での一時保管を行った。

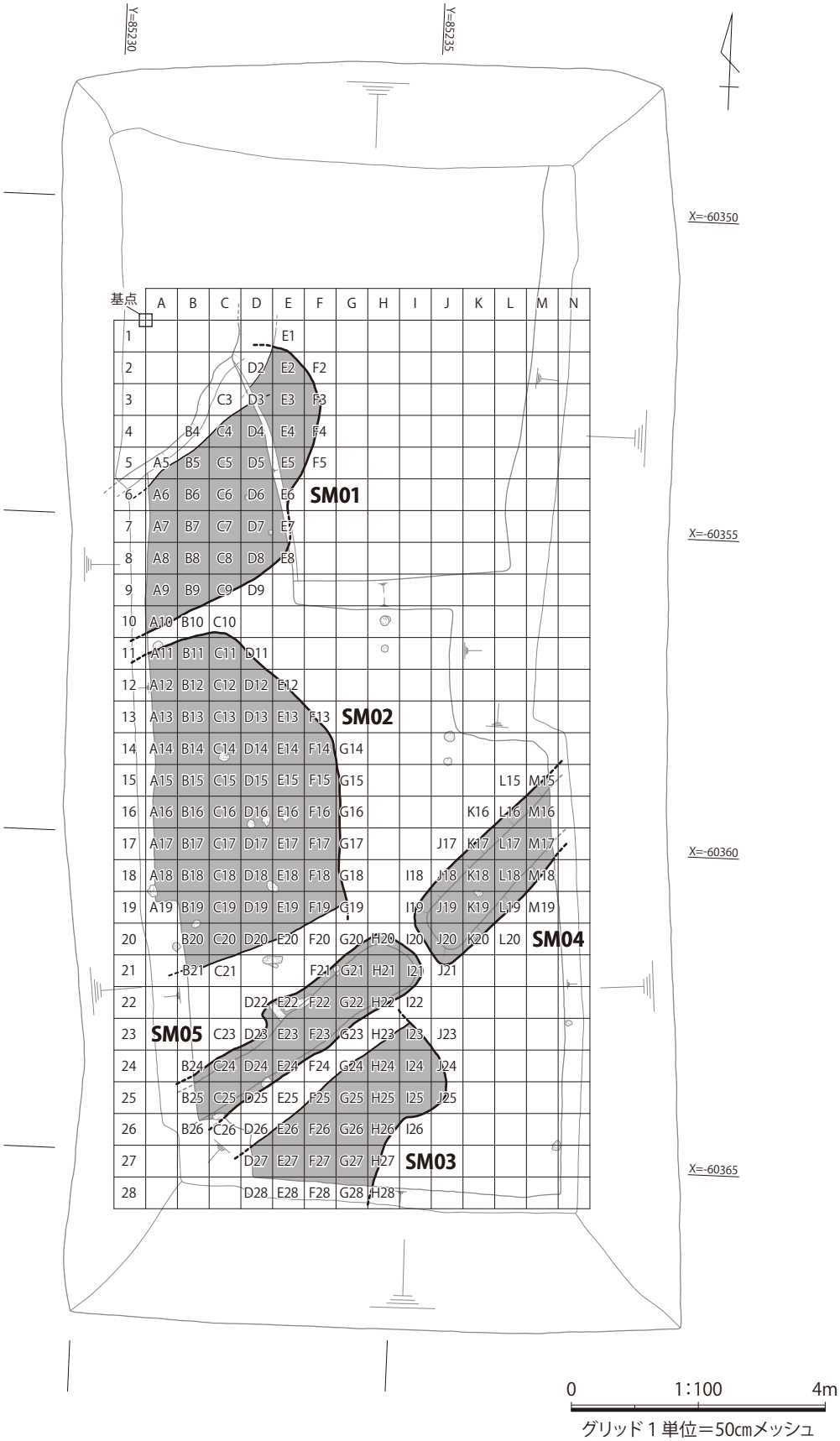
④採取資料の分類

洗浄作業が完了した後に、動物遺存体の分類作業を行った。全グリッドの共通事項として、カゴ大・中・小で拾い上げた動物遺存体以外の遺物と不要な木片や小石等は分類前の段階に取り除いている。

まず第 1 段階として、カゴ大で拾い上げた貝類・骨類の採取を行った。貝類は基本的に殻頂部が残存していて個体数のカウントが可能なものを抽出し、ヤマトシジミ・サルボウ・その他の貝類に分類した。次に第 2 段階として、カゴ中で拾い上げた魚骨と微小貝、カゴ小で拾い上げた微細遺物の採取をそれぞれ行った。最後に第 3 段階として、グリッドごとに貝類・骨類（獣骨および魚骨）・その他の 3 つのグループに分類を行い、その後、グリッドごとの出土量を把握するためにカゴ大・中・小の各重量および合計重量を計測した。

動物遺存体の重量計測結果は、カゴ大が総重量 141,656g、カゴ中が総重量 58,858g、カゴ小が総重量 63,633g で、合計重量は 264,147g（貝類のみの総重量 85,652g）である。この結果を踏まえて、貝種の割合などから当遺跡における中世の環境の考察を目的とする分析を行うために、全グリッドのうち、貝類のみの最大重量を示す A6（4,654g）・C6（3,240g）・F22（6,405g）・G22（5,037g）のグリッド上位 4 地点を抽出した。そして、この 4 地点から出土した貝塚の主体となるヤマトシジミとサルボウについては、左右（L・R）の仕分けと法量（殻長・殻高）の計測を行った。

動物遺存体の分析結果の詳細は第 5 章に譲るが、採取した資料の一部を紹介すると、貝類は二枚貝ではヤマトシジミ・サルボウ、巻貝ではサザエ・アカニシ・カワニナ、微小貝ではイシマキガイ・カワザンショウガイ科・ナタネガイ科・ヒメタニシ・マイマイ類などが出土している。魚類はクロダイが一番多く、マダイ・ボラ・スズキ・コイ科・ハゼ科・アジ科・ウナギ・アオザメ・イタチザメなどが出土している。獣骨はイヌ・二ホンジカ・モグラ・ネズミ・タヌキ・カエル・ヘビなどが出土している。これらは当遺跡周辺の中世の環境を推定する上での重要な資料となり得るものである。



第 19 図　SM01 ～ 05 調査グリッドおよび資料採取地点平面図

⑤ SM01・02・03・05 出土遺物（第 20 図）

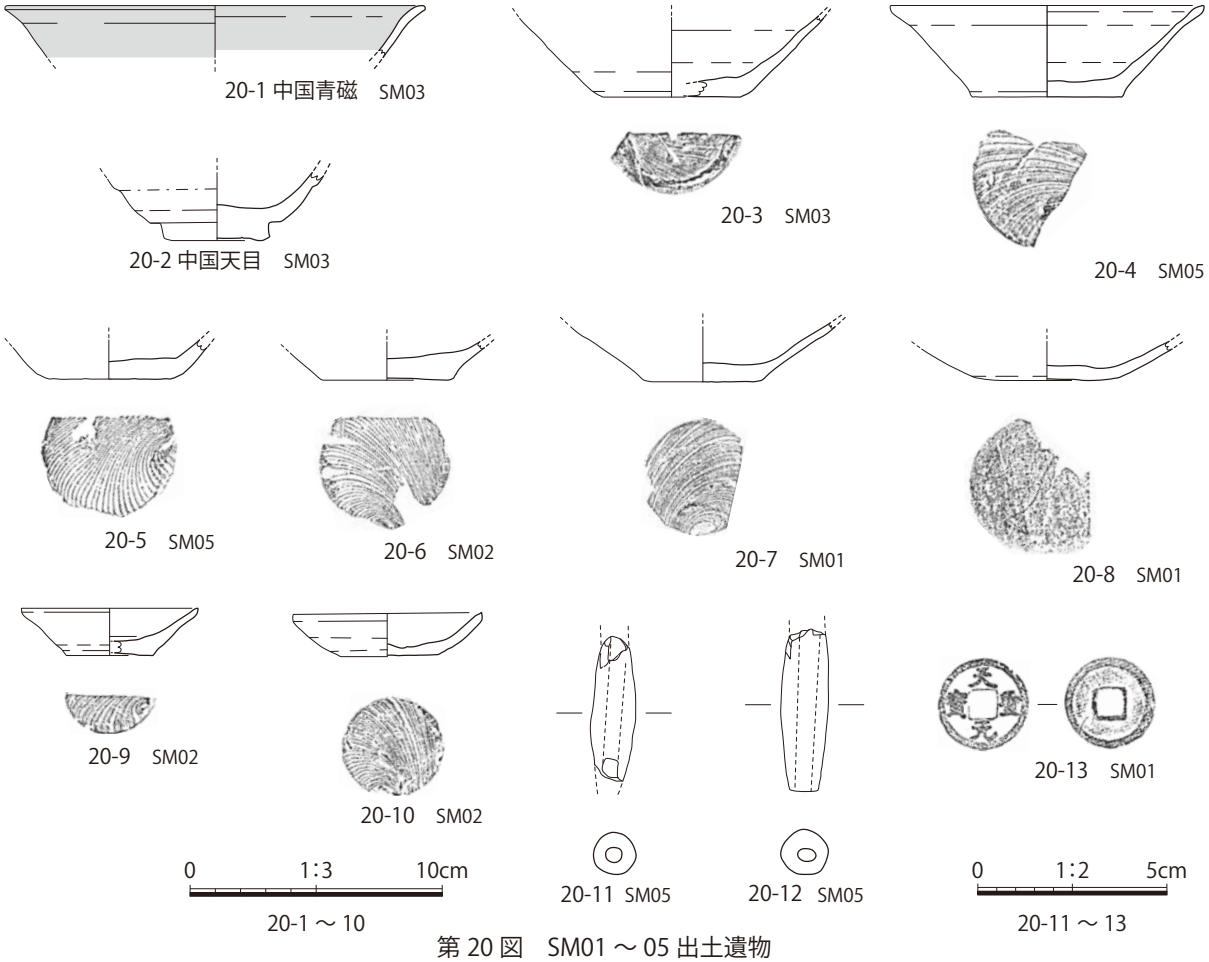
遺物は SM01・02・03・05 を形成する混貝土層中から、動物遺存体のほかに中世陶磁器・中世土師器・土製品・銭貨が出土した。SM04 では、動物遺存体以外の出土遺物は確認できなかった。

中世陶磁器　20-1・2 は SM03 から出土した中世陶磁器である。20-1 は青磁の端反碗で、口縁部のみ残存する。上田分類龍泉窯系碗 D 類に相当する。20-2 は天目碗で、高台のみ残存する。内外面に黒色～茶色を呈する厚い鉄釉を施し、高台は露胎。いずれも 15 世紀前半のものである。

中世土師器　20-3 ～ 8 は SM01・02・03・05 から出土した土師器坏である。20-3・4 は底部と口縁部径の差が少なく、底部から体部への立ち上がりの傾斜がきつく、器高が高い。20-5・6 は橙褐色を呈する坏で、体部が開き気味に立ち上がり、体部下半に丸みを残している。20-7・8 は灰白色を呈する坏で、体部の器壁が薄く、底部から体部への立ち上がりが開き気味に外傾して直線的である。20-9・10 は SM02 から出土した橙色を呈する土師器皿である。土師器の時期は 20-3・4 が 14 世紀後半、20-5 ～ 10 が 15 世紀前半と考えられる。

土製品　20-11・12 は SM05 から出土した管状で中央部が膨らむ紡錘形の土錘である。20-11 は灰褐色を呈し、残存長 3.8㎝、幅 1.2㎝、重量 3.4g を測る。20-12 は橙褐色を呈し、残存長 4.3㎝、幅 1.2㎝、重量 5.9g を測る。

銭貨　20-13 は SM01 から出土した北宋銭で、1023 年初鋳の天聖元寶である。



第 20 図　SM01 ～ 05 出土遺物

⑥遺構の性格と時期

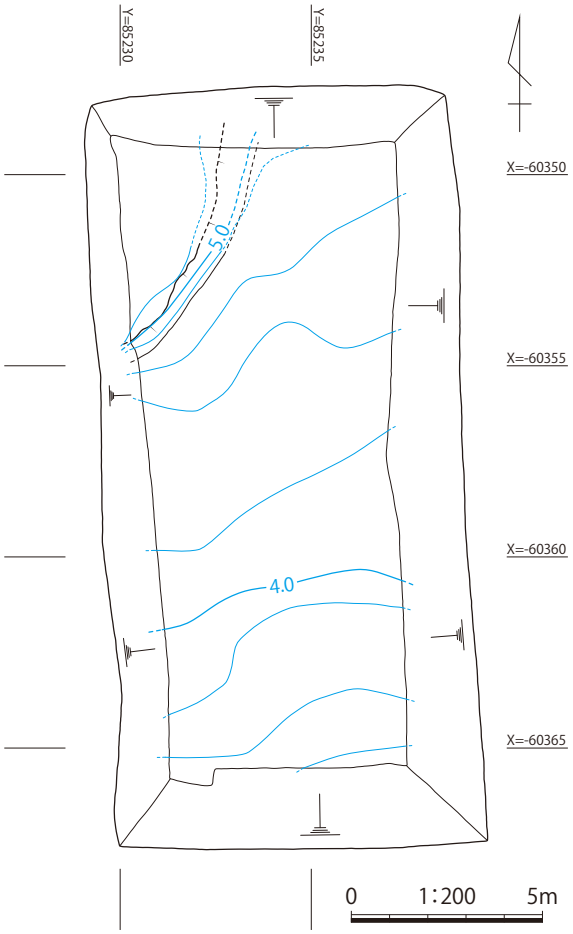
調査区内の北から南に向かって緩やかな傾斜をもつ形で堆積する混貝土層は層厚 15 ～ 30㎝を測り、場所によっては貝層（貝殻）の疎密が確認できる。このことは、特定の場所における貝類や魚類に代表される食物残滓の廃棄量・廃棄回数・廃棄期間などを示しているものと考えられる。

県調査 B4 区では、掘立柱建物や杭列を検出した平坦面があり、この周辺を中世の居住域と想定されている。今回検出した貝塚から出土した動物遺存体などの遺物は、この居住域から持ち込まれたものと考えられ、時期は出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半を想定している。

第 4 項　旧地形について

C1 区の旧地形（第 21 図）

C1 区では、淡黄灰色粘土の検出面を旧地形の基盤層として捉えており、ここでは谷の西側縁辺部～底部の一部を検出した。検出標高は、調査区北端で標高 4.80m、中央部で標高 4.20m、南端で標高 3.40m を測り、北から南に向かって傾斜している。調査区内北西角付近では地山の落ち込みを確認し、この落ち込みの上端は標高 5.20m、下端は標高 4.75m を測り、ここでは南東方向に向かって下る谷の落ち込み縁辺部を検出したものと考えられる。



第 21 図　C1 区旧地形平面図

礫層・砂礫層出土遺物

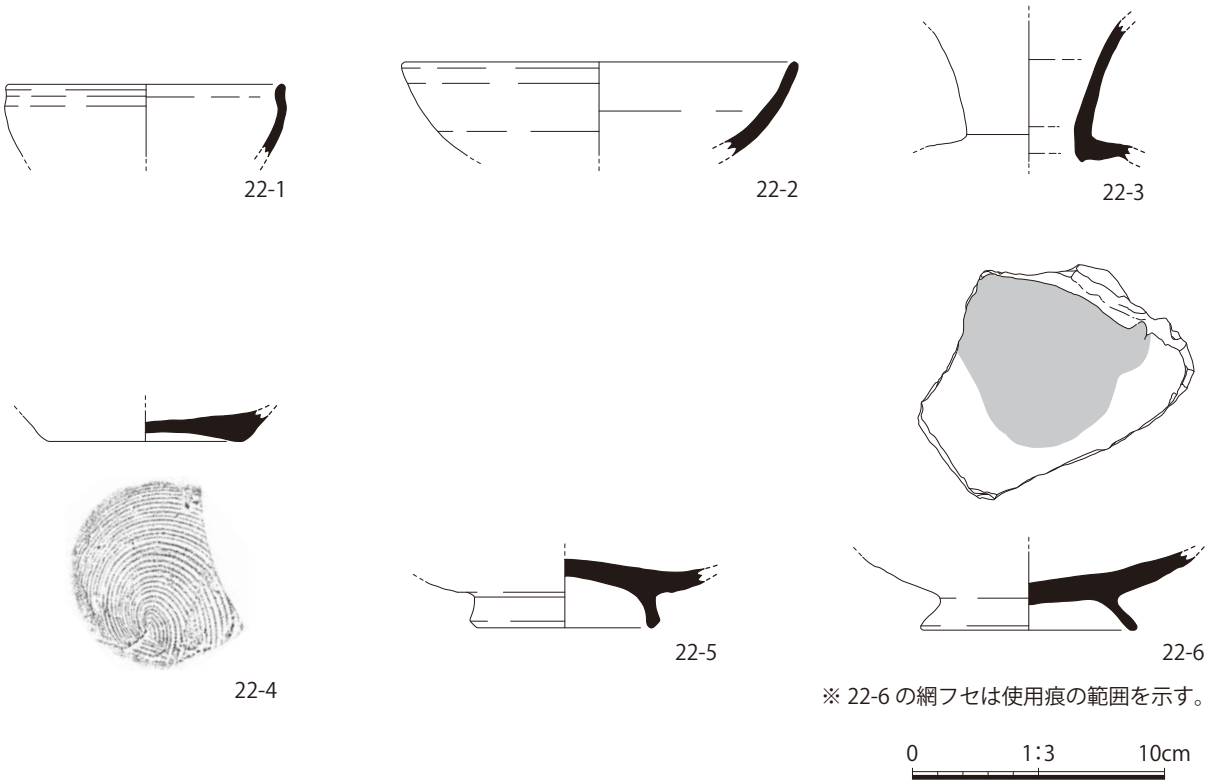
ここでは、地山面直上に堆積する礫層（基本層序第 6 層）および砂礫層（基本層序第 7 層）から出土した遺物を扱う。礫層は、調査区南側で確認した土層で層厚 10 ～ 20㎝を測り、直径 5 ～ 10㎝の大海崎石や河原石を主体とする円礫が密に堆積していた。遺物は礫層検出面または礫層中から須恵器が出土したが、いずれも内外面が摩滅していたり破断面が削られて丸みを帯びているものが多い。

砂礫層は、礫層直下に堆積する調査区南端の一部で確認した土層で層厚 30㎝前後を測り、砂層と直径 1㎝以下の細礫の混合土である。遺物は砂礫層中から縄文土器・弥生土器・土師器・石器が出土した。今回の調査で縄文土器の出土は C1 区の砂礫層のみであったが、C1 区の西側隣接地に所在する県調査区では縄文後期～晩期の土器や石器が一定量出土している。

礫層および砂礫層の出土遺物は、いずれも谷部底面に堆積した円礫や細礫とともにローリングの影響を受けている可能性があり、礫層は谷筋上方から礫を巻き込みながら堆積したものと考えている。以下では、礫層出土遺物と砂礫層出土遺物に分けて報告し、各土層のなかで古い時期を示す遺物から新しい時期を示す遺物の順に詳述する。

①礫層出土遺物（第 22 図）

須恵器　22-1 は無高台坏で、口縁部のみ残存する。22-2 は高坏の口縁部～坏部である。22-3 は長頸壺の頸部である。22-4 は無高台坏の底部で、底部外面に糸切痕をもつ。22-5 は高台付坏の底部で、蓋坏の坏と考えられる。22-6 は高台付碗（大型品）の底部である。高台は大きくハの字状に開き、底部内面に滑らかな使用痕をもつ。22-1 ～ 6 はいずれも 8 世紀第 2 ～ 4 四半期、出雲国府編年第 3 ～ 4 型式に相当する。



第 22 図　礫層（第 6 層）出土遺物

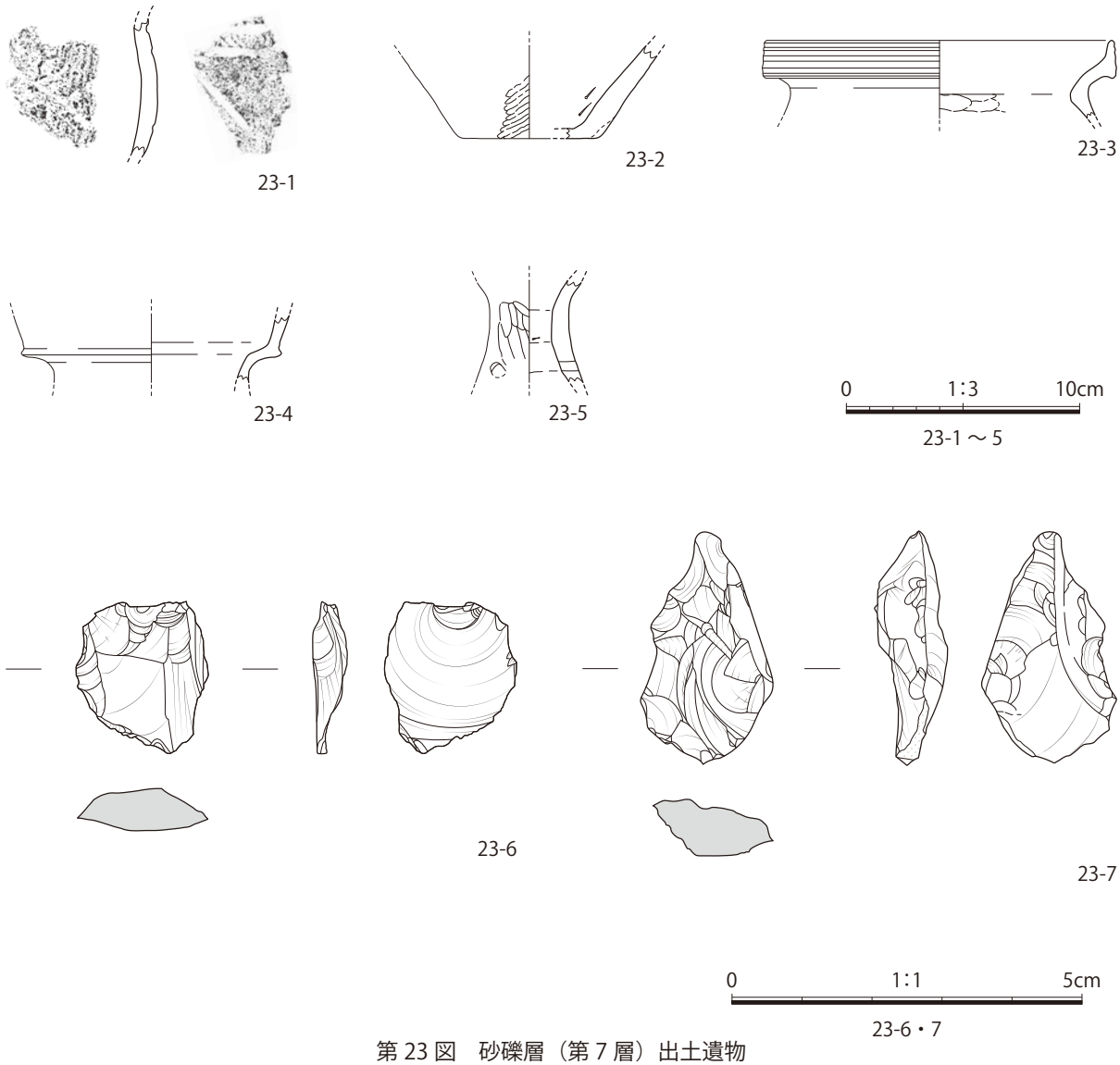
②砂礫層出土遺物（第 23 図）

縄文土器　23-1 は縄文土器鉢の胴部である。外面に擦り消し縄文を施す。縄文時代後期に相当する。

弥生土器　23-2 は弥生土器甕の底部である。外面にミガキ、内面にケズリが施される。弥生時代中期、松本編年Ⅲ様式に相当する。23-3 は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部に 4 条の凹線文を施す。弥生時代後期初頭、松本編年Ⅴ -1 様式に相当する。

土師器　23-4 は土師器壺の口縁部である。複合口縁の壺だが、口縁上端部は欠損している。古墳時代前期初頭、草田編年 6 期に相当する。23-5 は土師器高坏の脚部である。脚部屈曲部付近の三方に円孔のスカシを設け、外面を縦方向のミガキで仕上げた後、赤彩が施される。古墳時代前期、草田編年 6 ～ 7 期に相当する。

石器　23-6・7 は砂礫層中から出土した石器である。23-6 は黒曜石製の剥片である。裏面の主要剥離面はリングが密集しており、両極剥離で分割された剥片である。23-7 は黒曜石製の二次加工がある剥片である。表面上端部にノッチ状の加工がみられる。



第 23 図　砂礫層（第 7 層）出土遺物

第３節　C2 区の調査

C2 区は、遺跡範囲の北西側にあたる標高 6.70 ～ 8.90mを測る丘陵裾の緩斜面に位置し、既存道路の西側に東西 3.2m×南北 17.5mの範囲で設定した長方形の調査区である。発掘調査は、重機により表土を剥ぎ取り、以下は重機を併用しながら人力掘削によって遺構面および遺構の検出を行った。土層観察は、調査区内に面する北壁と東壁の壁面を記録した。

調査の結果、埋没谷に堆積する遺物包含層と調査区内の西から東方向に向かって下る谷の西側縁辺部～底部付近を検出した。C2 区では谷の落ち込み以外に明確な遺構は検出していないため、ここでは埋没谷に堆積する土層と遺物包含層から出土した遺物の報告が主体となっている。また、C2 区では C1 区の第 2 遺構面で検出している貝塚の平面プランや混貝土層の堆積がみられないことから、貝塚の範囲は C2 区までは広がっていないということが明らかとなった。

第１項　基本層序（第 24・25 図）

ここでは C2 区の基本土層模式図を第 24 図、調査区平面図と北壁・東壁土層図を第 25 図に示し、土層の詳細について述べる。調査区東壁土層を標準とした基本的な層序は、上層から表土（第 1 層）、茶色粘質土（第 2 層）、黒色～黒褐色粘質土（第 3 層）、茶褐色粘質土（第 4 層）、暗茶褐色礫層（第 5 層）、淡黄褐色軟砂岩（第 6 層）からなる土層堆積を確認した。

第 1 層は標高 6.70 ～ 8.90mに堆積する層厚 20㎝の茶褐色土（表土）である。第 2 層は標高 6.50 ～ 8.70mに堆積する層厚 20 ～ 40㎝の茶色粘質土である。第 3 層は標高 7.50 ～ 8.50mに堆積する層厚 10 ～ 20㎝の黒色～黒褐色粘質土で、須恵器を含む遺物包含層である。第 4 層は標高 6.90 ～ 8.30mに堆積する層厚 40 ～ 80㎝の茶褐色粘質土で、弥生土器・土師器・石器を含む遺物包含層である。第 5 層は標高 7.40mに堆積する層厚 30㎝の暗茶褐色礫層である。この礫層は調査区内全域ではみられず、北側の一部で確認した土層である。第６層は淡黄褐色軟砂岩の地山である。地山面の検出標高は、調査区北端で標高 7.20m、中央部で標高 7.00m、南端で標高 5.90m を測り、北から南に向かって傾斜している。

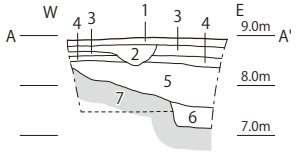
C2 区基本土層

第 1 層（表土）
第 2 層
第 3 層（遺物包含層上層）
第 4 層（遺物包含層下層）
第 5 層（礫層）
第 6 層（地山）

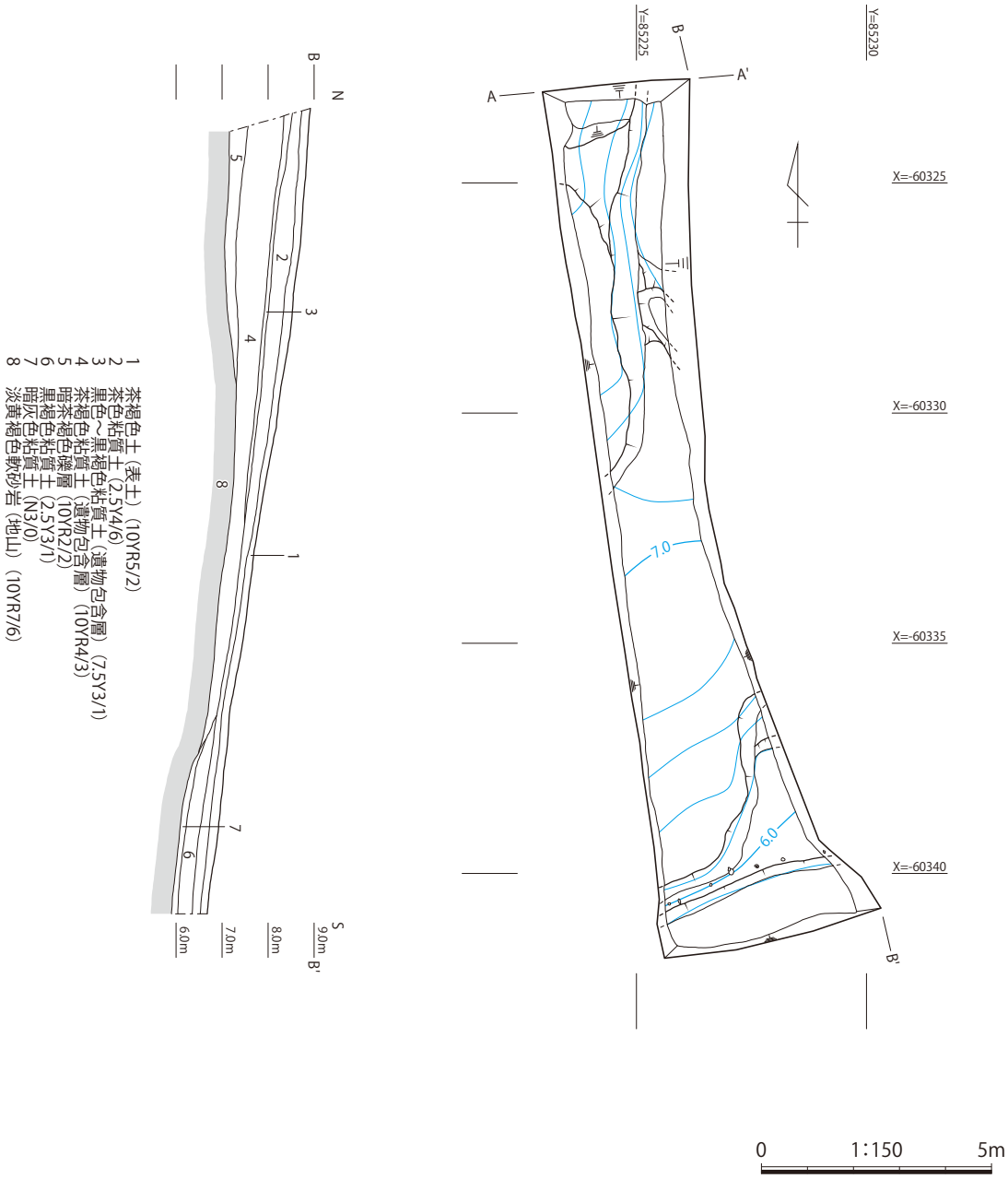
C2 区基本土層と東壁土層の対応関係

第 1 層 ＝ 東壁第 1 層　茶褐色土
第 2 層 ＝ 東壁第 2 層　茶色粘質土
第 3 層 ＝ 東壁第 3 層　黒色～黒褐色粘質土
第 4 層 ＝ 東壁第 4 層　茶褐色粘質土
第 5 層 ＝ 東壁第 5 層　暗茶褐色礫層
第 6 層 ＝ 東壁第 8 層　淡黄褐色軟砂岩

第 24 図　C2 区基本土層模式図



1　茶褐色土（表土）（10YR5/2）
2　黄褐色粘質土（撹乱）（10YR6/6）
3　茶色粘質土（2.5Y4/6）
4　黒色～黒褐色粘質土（遺物包含層）（7.5YR3/1）
5　茶褐色粘質土（遺物包含層）（10YR4/3）
6　暗茶褐色礫層（10YR2/2）
7　淡黄褐色軟砂岩（地山）（10YR7/6）



第 25 図　C2 区平面図・北壁・東壁土層図

第 2 項　遺物包含層

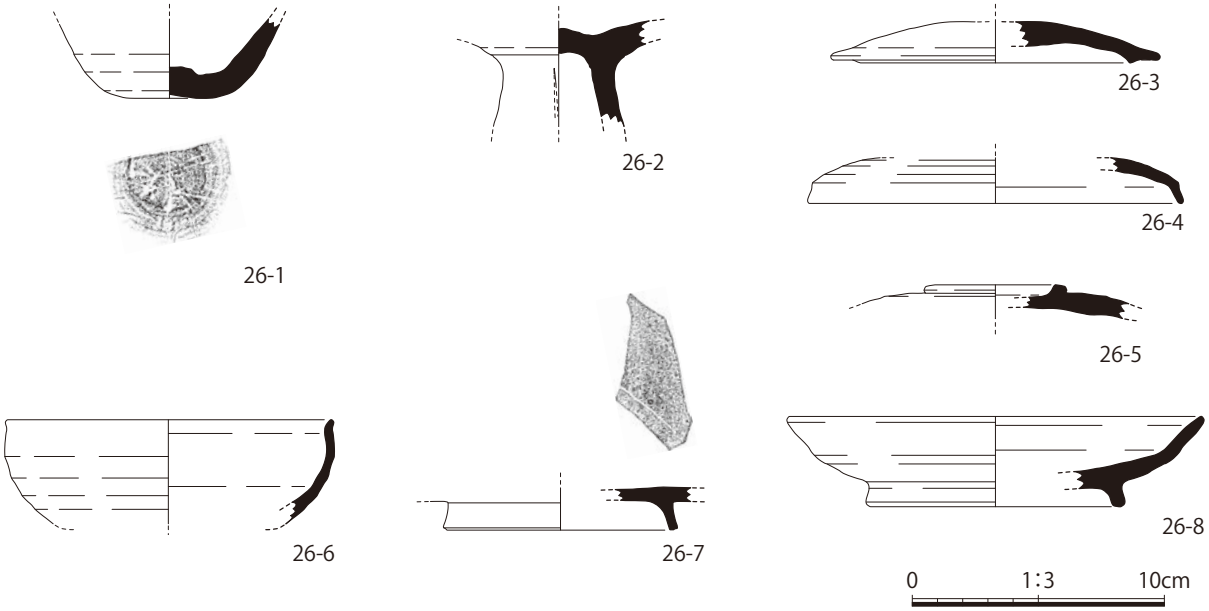
C2 区の遺物包含層の概要

C2 区は松江市埋蔵文化財調査室が試掘調査を実施した T3 トレンチの西側隣接地に位置する。T3 トレンチの試掘結果では、土層堆積状況から「かつての谷地形が埋没しているものと考えられる」と報告されており、C2 区の調査ではこの谷の西側縁辺部と埋没谷に堆積した土壌から遺物が出土する遺物包含層を確認した。

C2 区の遺物包含層は、第 25 図に示した調査区東壁の標高 7.50 ～ 8.50mに堆積する黒色～黒褐色粘質土（基本土層第 3 層）と、その直下の標高 6.90 ～ 8.30mに堆積する茶褐色粘質土（基本土層第 4 層）の 2 つの土層が該当する。遺物は、第 3 層中から須恵器、第 4 層中から弥生土器・土師器・石器が出土した。遺物組成は、上層の第 3 層が古代、下層の第 4 層が弥生時代後期～古墳時代中期に分離可能な状況であった。以下では、第 3 層の遺物を遺物包含層上層出土遺物、第 4 層の遺物を遺物包含層下層出土遺物として 2 つに分けて報告し、各土層のなかで古い時期を示す遺物から新しい時期を示す遺物の順に詳述する。

①遺物包含層上層出土遺物（第 26 図）

須恵器　26-1 は甕の底部で、外面にヘラ記号をもつ。26-2 は高坏の脚部で、線状の切れ目のみのスカシが認められる。いずれも 7 世紀後半、大谷編年出雲 6 期に相当する。26-3 ～ 5 は蓋坏の蓋である。26-3 はつまみが欠損しているが、かえりの形態から宝珠つまみの蓋と考えられる。7 世紀後葉、出雲国府編年第 1 型式に相当する。26-4・5 は輪状つまみの蓋である。26-4 は外面に重ね焼きの痕跡がみられ、26-5 は内面が滑らかで転用硯の可能性がある。いずれも 7 世紀末葉～ 8 世紀第 1 四半期、出雲国府編年第 2 型式に相当する。26-6 は無高台坏で、口縁部のみ残存する。8 世紀第 2 ～ 4 四半期、出雲国府編年第 3 ～ 4 型式に相当する。26-7・8 は高台付皿で、26-7 は内面にヘラ記号をもつ。いずれも 8 世紀第 3 ～ 4 四半期、出雲国府編年第 4 型式に相当する。

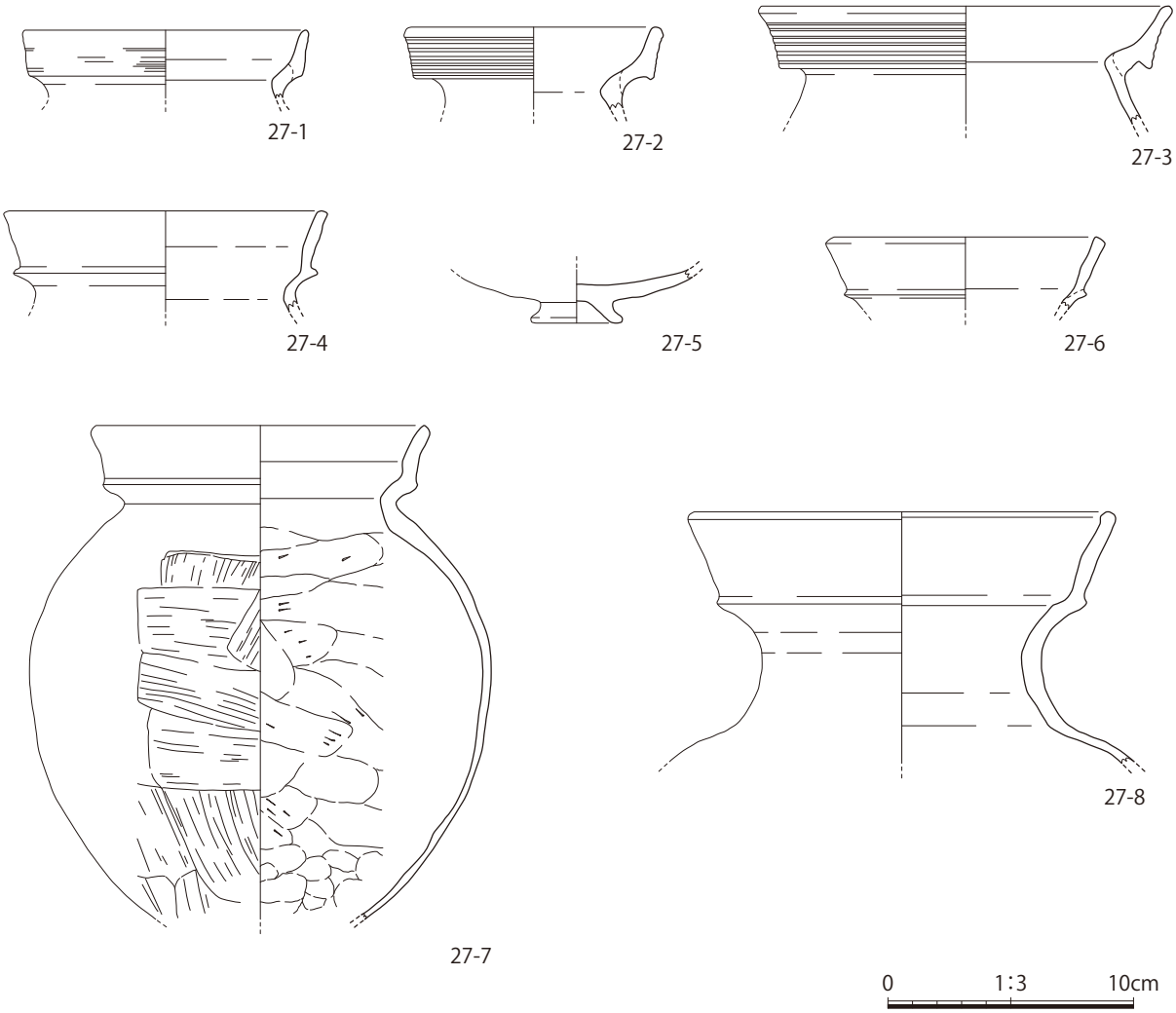


第 26 図　遺物包含層上層（第 3 層）出土遺物

②遺物包含層下層出土遺物（第 27・28 図）

弥生土器　27-1 ～ 4 は弥生土器甕の口縁部である。27-1 の口縁部は摩滅しているが、口縁端部に貝殻施文による擬凹線文を施す。27-2 は口縁端部に貝殻施文による 6 条の擬凹線文を施す。27-3 の口縁部は幅広で、口縁端部に貝殻施文による 6 条の擬凹線文を施す。27-1 ～ 3 はいずれも弥生時代後期中葉、松本編年Ⅴ -2 様式に相当する。27-4 は複合口縁で器壁がやや薄く、内外面にヨコナデが施される。弥生時代後期後葉、松本編年Ⅴ -4 様式に相当する。

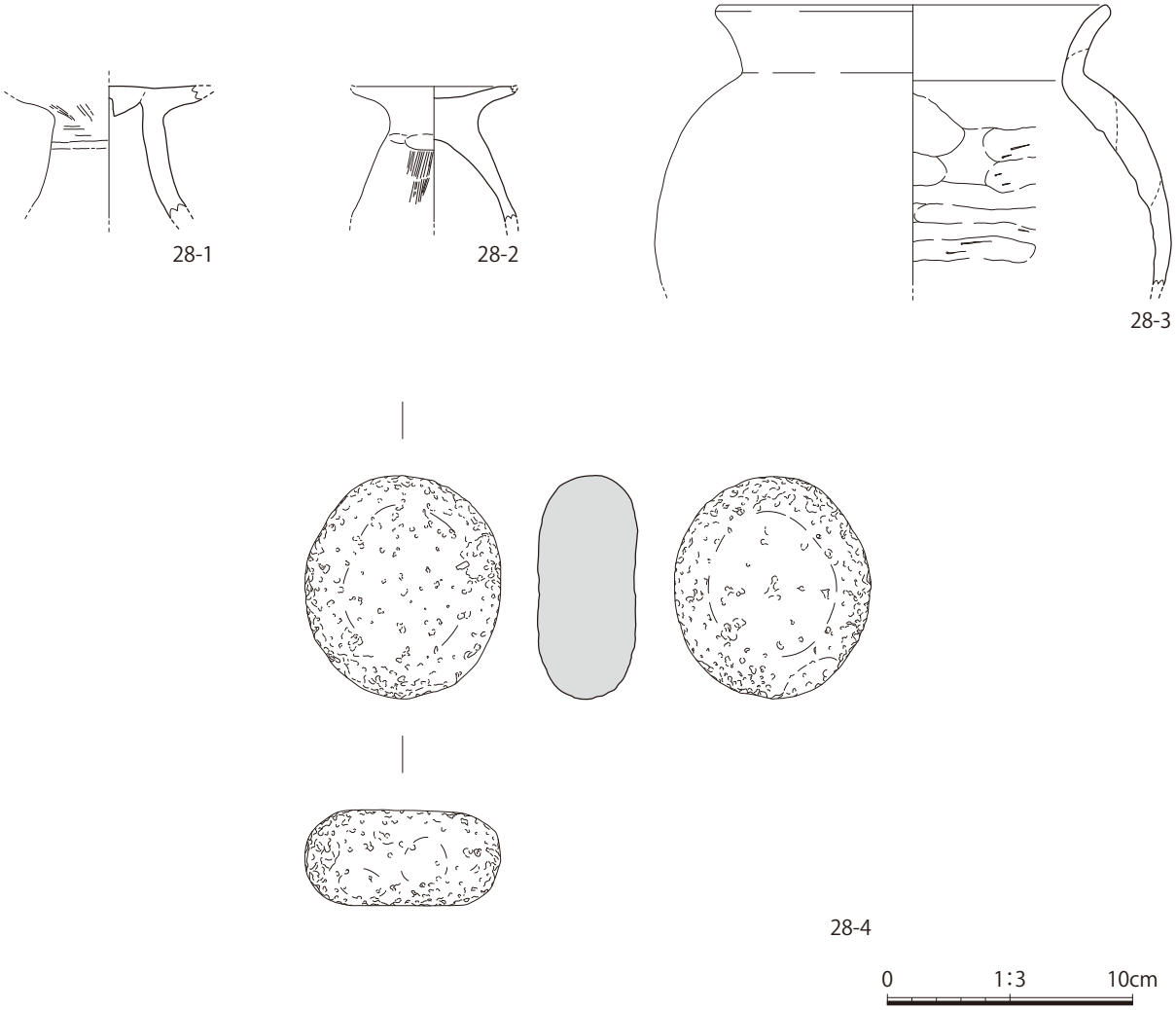
土師器　27-5 は土師器低脚坏である。古墳時代前期前葉、草田編年 5 ～ 6 期に相当する。27-6 は土師器壺の口縁部である。口縁部を外傾させて立ち上がりは低く、口縁端部に平坦面をもたせる。27-7 は土師器壺である。複合口縁の丸底の壺で、口縁部を肥厚させて立ち上がりは低く、口縁端部に平坦面をもたせる。27-8 は土師器壺の口縁部～頸部である。複合口縁の壺で、口縁部を外傾させて立ち上がりは高く、口縁端部を僅かに内傾させる。27-6 ～ 8 はいずれも古墳時代前期中葉、草田 7 期（布留 1 式併行）に相当する。28-1・2 は土師器高坏の脚部である。28-1 は坏部と脚部の接合部外面を縦方向のハケメ、脚部外面を横方向のハケメで仕上げた後、赤彩が施される。28-2 は脚部外面上方に横方向のミガキと下方に縦方向のハケメ、内面にケズリが施される。28-3 は土師器甕である。単



第 27 図　遺物包含層下層（第 4 層）出土遺物（1）

純口縁の甕で、器壁が厚く口縁部はやや外反気味に立ち上がる。外面は摩滅しているが、僅かにハケメが観察でき、内面にケズリが施される。28-1 ～ 3 はいずれも古墳時代前期後葉、松山編年Ⅱ期（布留 3 式併行）に相当する。

石器　28-4 は敲石である。長辺 9.1㎝、短辺 8.0㎝、厚さ 3.9㎝を測る淡黄色の流紋岩製の敲石で、平面形はほぼ円形、断面形は楕円形を呈する。石の表裏中央が僅かに窪み、側面には敲打痕が顕著にみられる。



第 28 図　遺物包含層下層（第 4 層）出土遺物（2）

第 3 項　旧地形について

C2 区の旧地形（第 25 図）

C2 区では、淡黄褐色軟砂岩の検出面を旧地形の基盤層として捉えた。検出標高は、調査区北端で標高 7.20m、中央部で標高 7.00m、南端で標高 5.90m を測り、北から南に向かって傾斜している。また、調査区内北側では断面形が 2 段掘りのような形状で地山の落ち込みを確認している場所があり、この落ち込みの上端は調査区外となるが想定で標高 8.60m 前後、下端は標高 7.15m を測り、ここでは西から東方向に向かって下る谷の西側縁辺部～底部付近を検出したものと考えられる。

第 4 節　C3 区の調査

C3 区は、遺跡範囲の北東側にあたる標高 7.50 ～ 9.00mを測る丘陵裾の緩斜面に位置し、既存道路の東側に東西 7.0m×南北 15.0mの範囲で設定した長方形の調査区である。発掘調査は、重機により表土を剥ぎ取り、以下は重機を併用しながら人力掘削によって遺構面および遺構の検出を行った。土層観察は、調査区内に面する北壁と西壁の壁面を記録した。

調査の結果、C3 区では埋没谷に堆積する遺物包含層と調査区内の東から西方向に向かって下る谷の落ち込みを検出した。なお、C2 区と同様に、ここでは埋没谷に堆積する土層と遺物包含層から出土した遺物の報告が主体となっている。また、C3 区でも C1 区の第 2 遺構面で検出している貝塚の平面プランや混貝土層の堆積がみられないことから、貝塚の範囲は C2 ～ 3 区までは広がっていないということが明らかとなった。

第 1 項　基本層序（第 29・30 図）

ここでは C3 区の基本土層模式図を第 29 図、調査区平面図と北壁・西壁土層図を第 30 図に示し、土層の詳細について述べる。調査区北壁・西壁土層を標準とした基本的な層序は、上層から表土（第 1 層）、明褐色土（第 2 層）、褐色粘質土（第 3 層）、暗茶褐色～黒褐色粘質土（第 4 層）、淡茶褐色礫層（第 5 層）、茶褐色砂礫層（第 6 層）、黄褐色軟砂岩（第 7 層）からなる土層堆積を確認した。

第 1 層は標高 7.50 ～ 9.00mに堆積する層厚 30㎝の茶褐色土（表土）である。第 2 層は標高 7.20 ～ 8.70mに堆積する層厚 30㎝の明褐色土で、土層中から中世陶磁器が 3 点出土している。第 3 層は標高 6.90 ～ 8.40mに堆積する層厚 30㎝の褐色粘質土で、須恵器を含む遺物包含層である。第 4 層は標高 6.70 ～ 8.10mに堆積する層厚 30 ～ 60㎝の暗茶褐色～黒褐色粘質土で、土師器・須恵器・土製品を含む遺物包含層である。第 5 層は標高 6.80 ～ 7.50mに堆積する層厚 30 ～ 40㎝の淡茶褐色礫層で、弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石器を含む遺物包含層である。第 6 層は標高 6.30 ～ 7.00m に堆積する層厚 1.2m 以上を測る茶褐色砂礫層である。第 7 層は淡黄褐色軟砂岩の地山である。地山面の検出標高は、調査区北端で標高 6.90m、中央部で標高 6.00m、南端で標高 5.70m を測り、北から南に向かって傾斜している。

C3 区基本土層

第 1 層（表土）
第 2 層
第 3 層（遺物包含層上層）
第 4 層（遺物包含層上層）
第 5 層（遺物包含層下層）
第 6 層（砂礫層）
第 7 層（地山）

第 29 図　C3 区基本土層模式図

C3 区基本土層と北壁・西壁土層の対応関係

第 1 層 ＝ 西壁第 1 層　茶褐色土
第 2 層 ＝ 西壁第 2 層　明褐色土
第 3 層 ＝ 西壁第 3 層　褐色粘質土
第 4 層 ＝ 西壁第 4・6 層　暗茶褐色～黒褐色粘質土
第 5 層 ＝ 西壁第 5 層　淡茶褐色礫層
第 6 層 ＝ 西壁第 7 層　茶褐色砂礫層
第 7 層 ＝ 北壁第 10 層　淡黄褐色軟砂岩

第 30 図　C3 区平面図・北壁・西壁土層図

第２項　遺物包含層

C3 区の遺物包含層の概要

C3 区は C2 区の東側隣接地に位置する調査区で、ここでは C2 区で検出した谷の西側縁辺部の対となる東側縁辺部の落ち込みを検出している。C3 区の調査では、この谷の東側縁辺部と埋没谷に堆積した土壌から遺物が出土する遺物包含層を確認した。

C3 区の遺物包含層は、第 30 図に示した調査区西壁の上層から標高 6.90 ～ 8.40ｍに堆積する層厚 30㎝の褐色粘質土（基本土層第３層）、標高 6.70 ～ 8.10ｍに堆積する層厚 30 ～ 60㎝の暗茶褐色～黒褐色粘質土（基本土層第４層）、標高 6.80 ～ 7.50ｍに堆積する層厚 30 ～ 40㎝の淡茶褐色礫層（基本土層第５層）の３つの土層が該当する。遺物は、第３・４層中から土師器・須恵器・土製品、第５層中から弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石器が出土した。遺物組成は、上層の第３・４層が古墳時代～古代、下層の第５層が弥生時代後期～古代を示しており、ここでは下層に弥生土器や石器が含まれること以外に上層と下層で主体となる時期を分けることは困難な状況であった。以下では、第３・４層の遺物を遺物包含層上層出土遺物、第５層の遺物を遺物包含層下層出土遺物として２つに分けて報告し、各土層のなかで古い時期を示す遺物から新しい時期を示す遺物の順に詳述する。

①遺物包含層上層出土遺物（第 31・32 図）

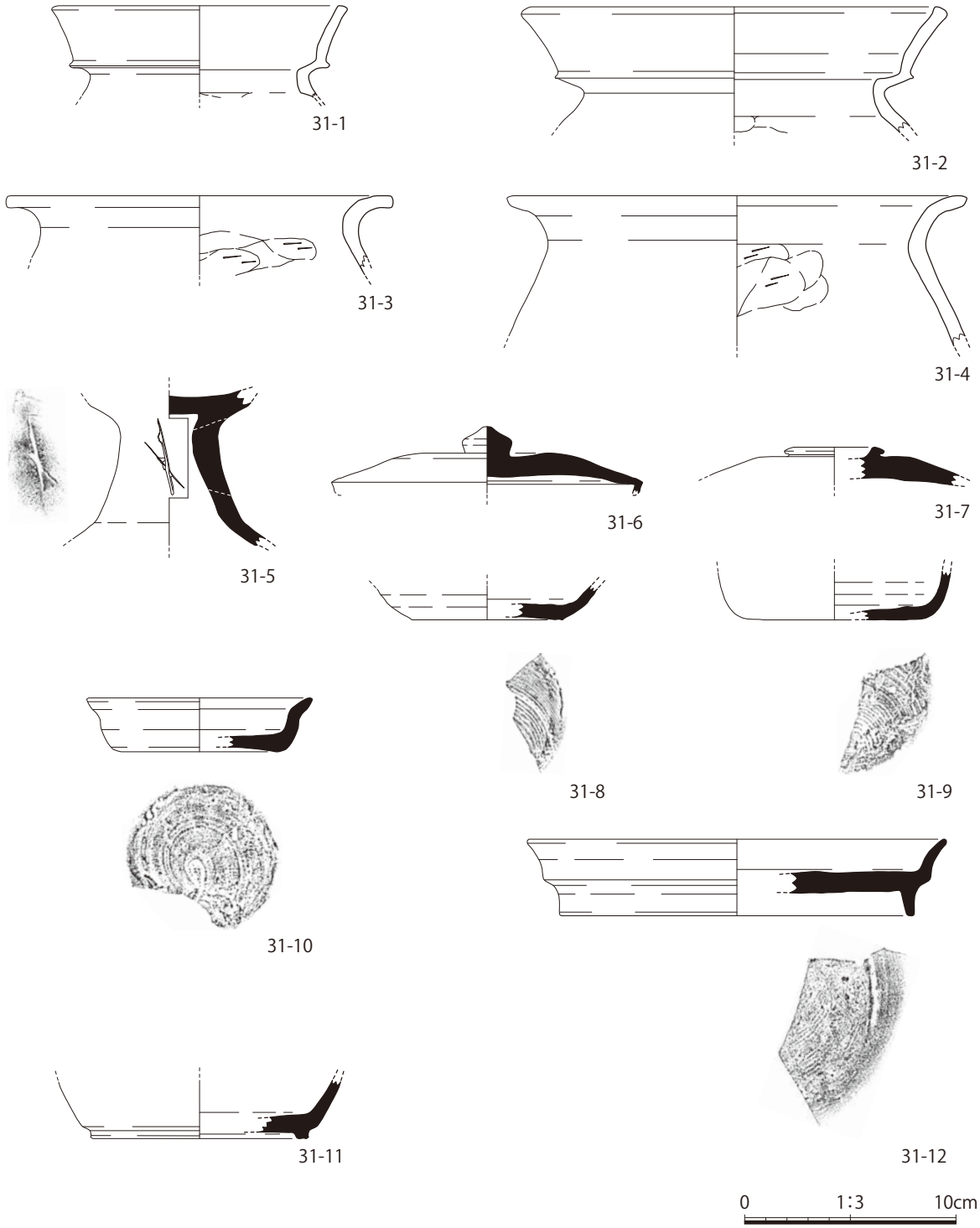
ここでは調査区西壁第３・４層の遺物包含層から出土した遺物について述べるが、上層の第２層から出土した中世陶磁器も併せて掲載する。

土師器　31-1 ～ 4 は土師器甕の口縁部である。31-1・2 は複合口縁の甕で、口縁部は肥厚させて立ち上がりは低く、口縁端部に平坦面をもたせる。いずれも古墳時代前期中葉、草田７期（布留１式併行）に相当する。31-3・4 は単純口縁の甕で、口縁部は器壁が厚く、やや外反気味に立ち上がる。外面にハケメ、内面にケズリが施される。いずれも古墳時代中期前葉、松山編年Ⅱ期に相当する。

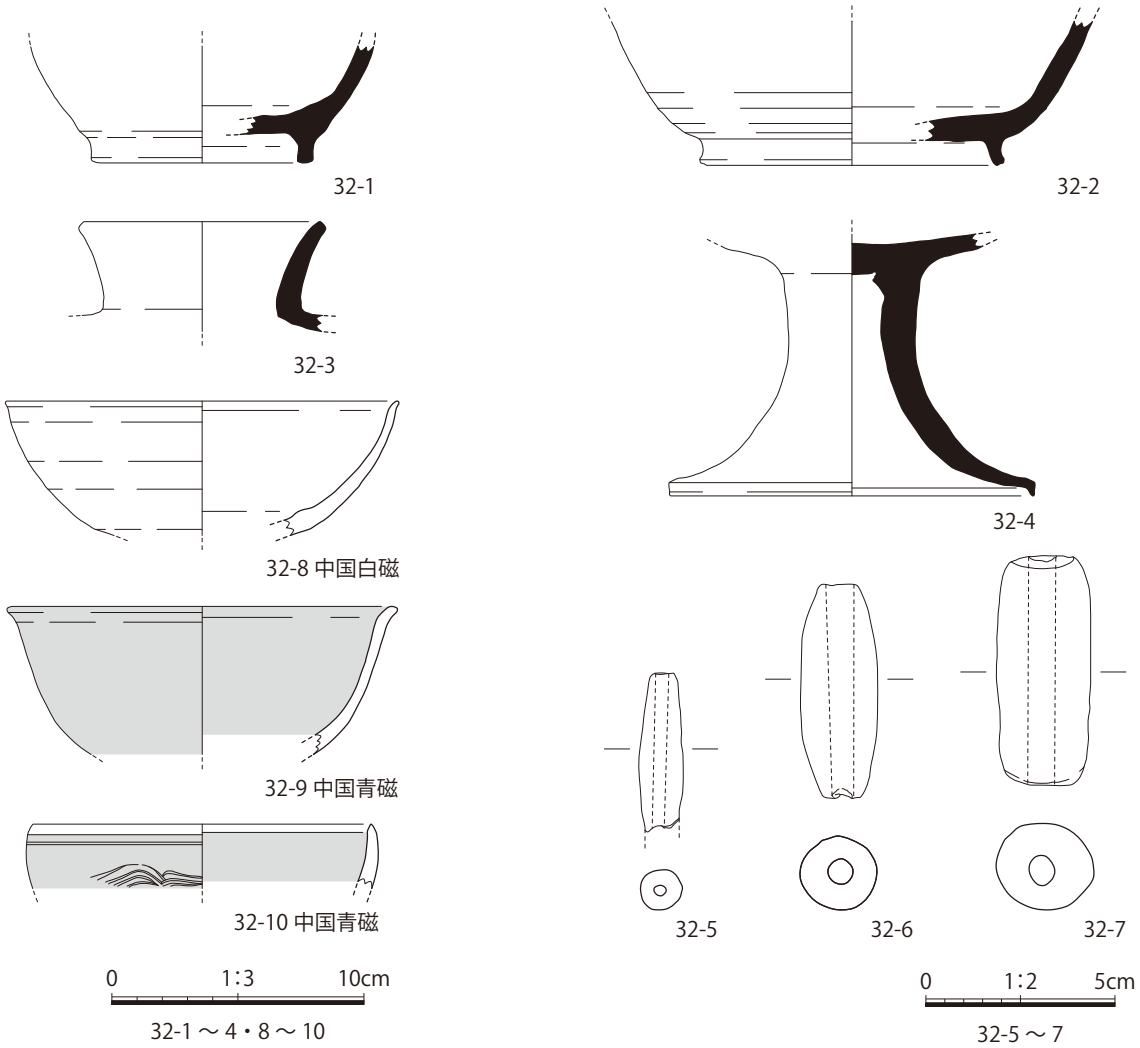
須恵器　31-5 は高坏の脚部で、線状の切れ目のみの二方スカシが認められる。スカシ部分の外面には、スカシに斜交するヘラ記号をもつ。7 世紀後半、大谷編年出雲６期に相当する。31-6・7 は蓋坏の蓋である。31-6 は宝珠つまみの蓋、31-7 は輪状つまみの蓋である。いずれも 7 世紀末葉～ 8 世紀第１四半期、出雲国府編年第２型式に相当する。31-8・9 は無高台坏で、底部のみ残存する。8 世紀第２～４四半期、出雲国府編年第３～４型式に相当する。31-10 は灯明皿形の無高台皿である。31-11・12 は高台付皿で、31-12 は内面が滑らかで転用硯の可能性がある。31-10 ～ 12 はいずれも 8 世紀第３～４四半期、出雲国府編年第４型式に相当する。32-1・2 は高台付坏か鉢（大型品）で、底部のみ残存する。32-3 は短頸壺の口縁部で、やや直立気味に外反する。32-4 は高坏の脚部で、坏部は欠損しているが、坏底部が丸底で皿形態を呈するものか。32-1 ～ 4 はいずれも 8 世紀第３四半期～ 9 世紀前葉、出雲国府編年第４～５型式に相当する。

土製品　32-5 ～ 7 は土錘である。32-5・6 は管状で中央部が膨らむ紡錘形の土錘、32-7 は管状で膨らみがない筒形の土錘である。32-5 は橙褐色を呈し、残存長 4.6㎝、幅 1.1㎝、重量 4.5g を測る。32-6 は褐色を呈し、長さ 5.6㎝、幅 2.0㎝、重量 25.1g を測る。32-7 は赤褐色を呈し、長さ 6.0㎝、幅 2.5㎝、重量 41.9g を測る。

中世陶磁器　32-8 ～ 10 は貿易陶磁器である。32-8 は白磁の端反碗で、口縁部～胴部のみ残存する。15 世紀前半、森田編年白磁碗 B 群に相当する。32-9 は青磁の端反碗で、口縁部～胴部のみ残存し、内外面は無文である。15 世紀中頃～後半、上田分類龍泉窯系碗 D 類に相当する。32-10 は青磁の鉢で、口縁部のみ残存する。蓋付鉢で、口縁端部の釉を削り取り、やや丸みをもった三角形を呈するシャープな口縁部をもつ。外面の沈線文の下方に 4 条の波状文を施す。16 世紀前半のもので、富田川河床遺跡（藤原氏採集資料）に出土例がある[5]。



第 31 図　遺物包含層上層（第 3・4 層）出土遺物（1）



第 32 図　遺物包含層上層（第 3・4 層）出土遺物（2）

②遺物包含層下層出土遺物（第 33 ～ 36 図）

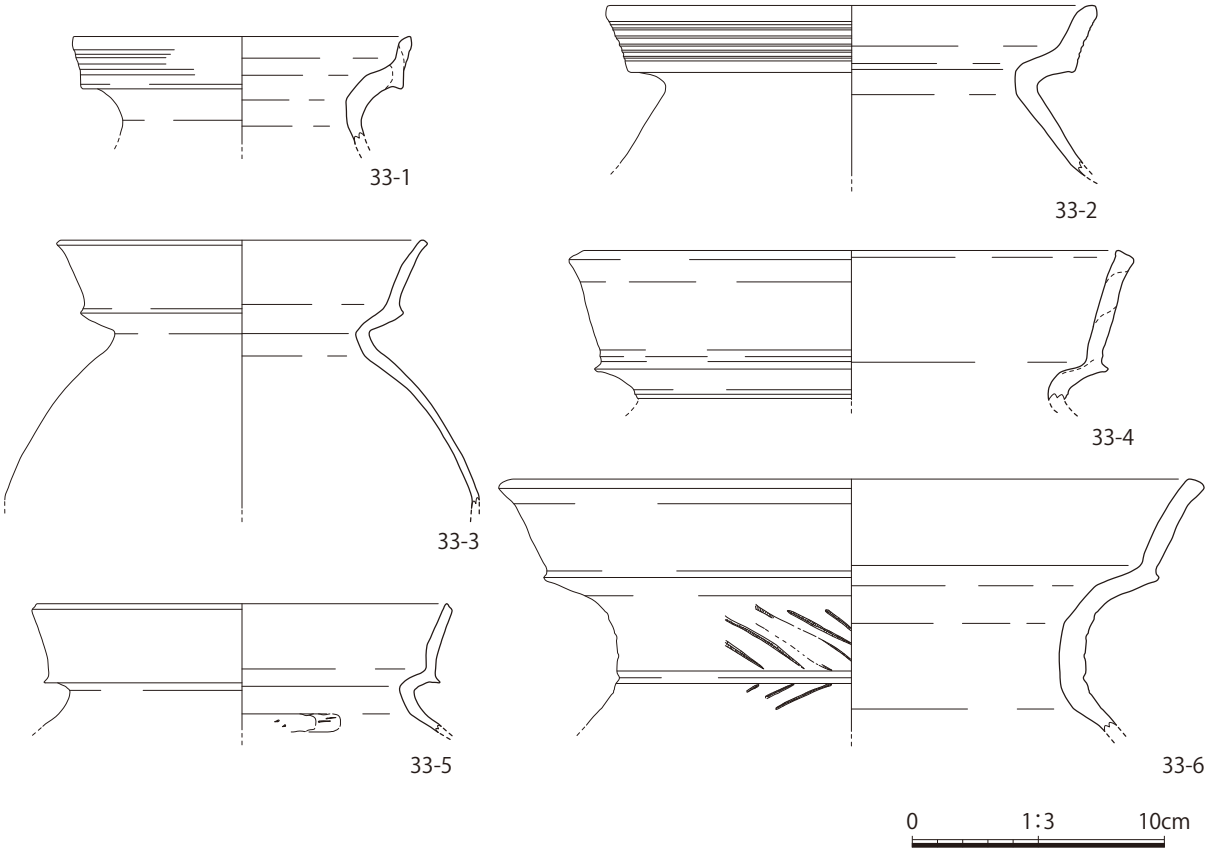
弥生土器　33-1・2 は弥生土器甕の口縁部である。33-1 は口縁端部に貝殻施文による 6 条の擬凹線文を施す。頸部内面に横方向のヘラミガキが施される。33-2 は口縁端部に二段の貝殻施文による 7 条の擬凹線文を施す。頸部内面に横方向のヘラミガキが施される。いずれも弥生時代後期中葉、松本編年Ⅴ -2 様式に相当する。

土師器　33-3 ～ 6 は土師器壺の口縁部～胴部である。33-3 は複合口縁の壺の口縁部～胴部である。全体的に器壁が薄く、口縁部外面にヨコナデ、胴部内面にケズリが施される。古墳時代前期前葉、草田 6 期に相当する。33-4・5 は複合口縁の壺の口縁部である。口縁部を外傾させて立ち上がりは低く、口縁端部に平坦面をもたせる。33-4 は口縁部外面に回転ナデが施される。いずれも古墳時代前期前葉～中葉、草田 6 ～ 7 期に相当する。33-6 は複合口縁の壺の口縁部～頸部である。一次口縁は大きく外反し、口縁端部に平坦面をもたせる。頸部外面に有軸羽状文を施す。古墳時代前期中葉、草田 7 期(布留 1 式併行)に相当する。34-1・2 は土師器低脚坏である。34-1 は坏部内面にヘラミガキを施し、脚部内面にヘラ記号をもつ。34-2 は全体的に摩滅しているが、坏部内面にヘラミガキが施されたものか。いずれも古墳時代前期前葉、草田編年 6 期に相当する。

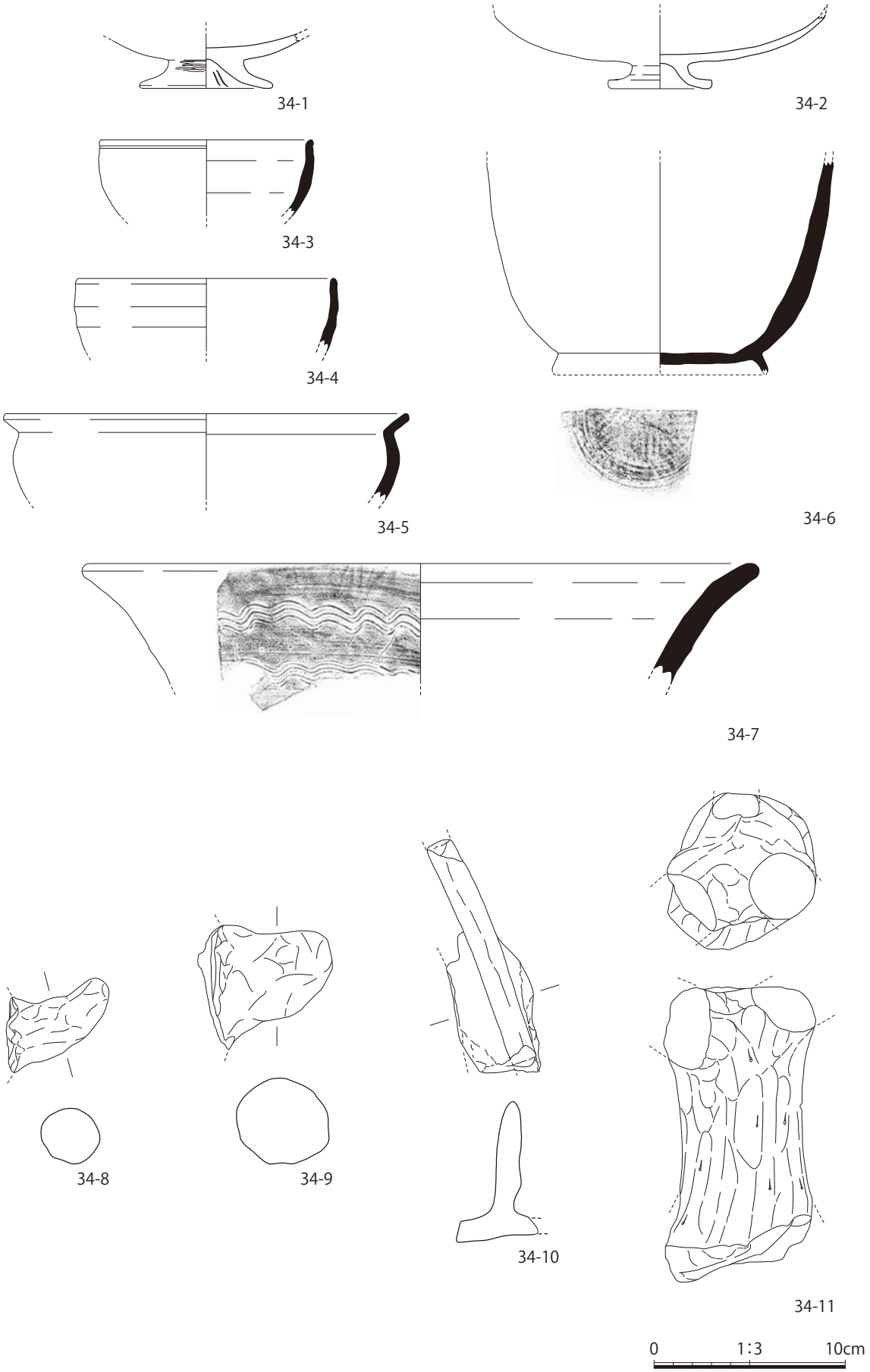
須恵器　34-3・4 は無高台坏で、口縁部のみ残存する。8 世紀第 2 ～ 4 四半期、出雲国府編年第 3 ～ 4 型式に相当する。34-5 は短頸壺で、口縁部のみ残存する。8 世紀末葉～ 9 世紀前葉、出雲国府編年第 5 型式に相当する。34-6 は高台付瓶である。特殊な瓶の可能性があり、底部外面にタタキ目をナデ消した痕跡がみられる。34-7 は大甕の口縁部である。口縁部は大きく外反し、内面にヨコナデ、外面に波状文が施される。34-6・7 はいずれも 8 世紀代に相当するものか。

土製品　34-8・9 は甑の把手である。砂粒を多く含む胎土の外面にナデ調整の痕跡がみられる。34-10 は竈の焚口側面の直立部で、庇を体部に後付している。庇内外面にヘラミガキ、体部内面にヘラケズリを施す。34-11 は土製支脚である。土製支脚上方の突起（角）は欠損しているが、残存形態から前方 2 方向・後方 1 方向の突起が付くものと考えられる。外面に一部風化がみられるが、ヘラケズリ調整を施して成形している。いずれも古代に相当するものか。

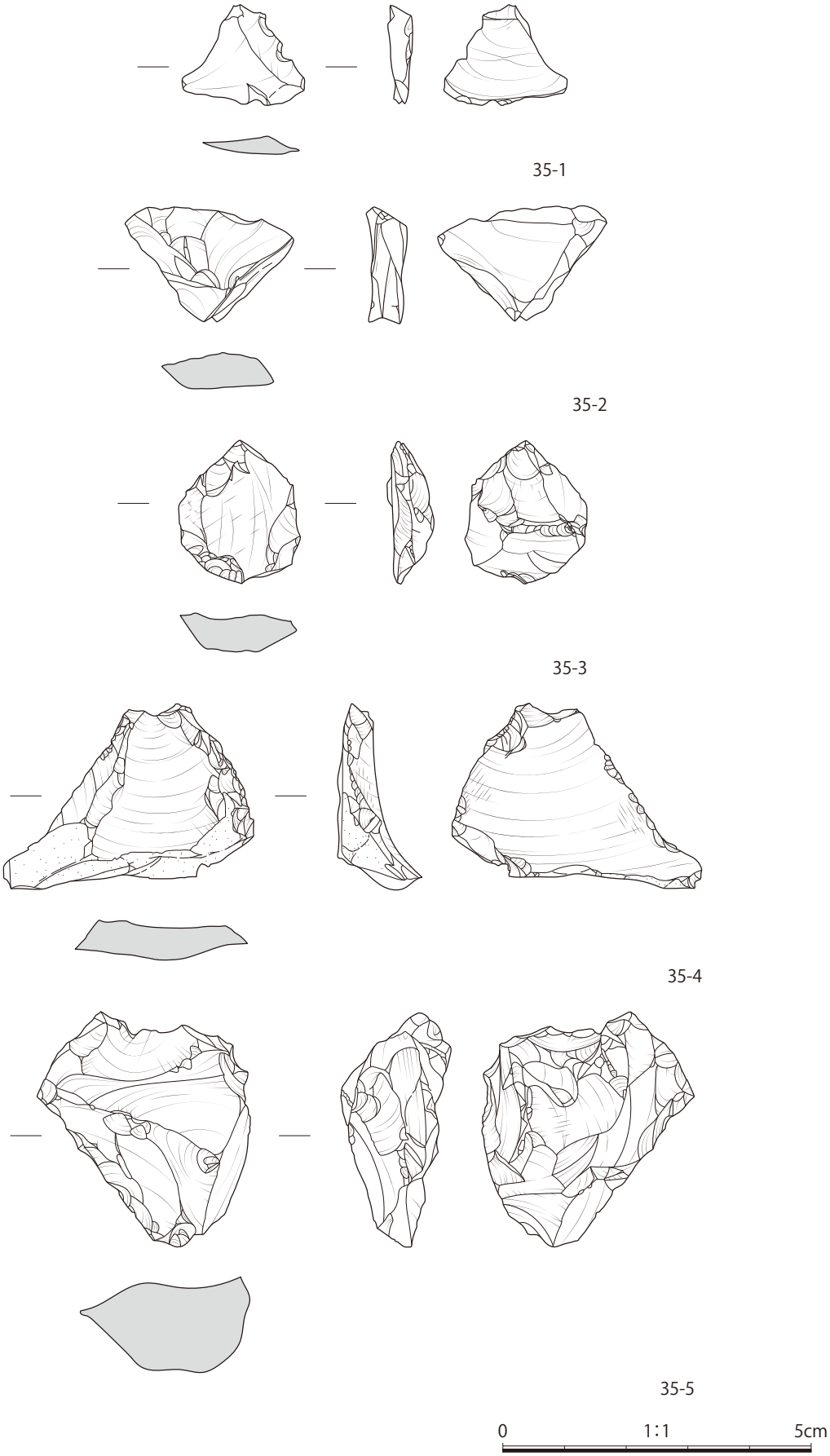
石器　35-1・2 は玉髄製の剥片である。35-2 は上面および左右側面が折損している。35-3 は黒曜石製の二次加工がある剥片である。35-4 は黒曜石製の剥片で、表面の右側面に二次加工が施される。裏面の右側面には微細な剥離痕がみられる。35-5 は黒曜石の残核である。不規則な剥離面が多いので、両極打撃で剥片を剥ぎ取った残核の可能性がある。36-1 は緑泥片岩製の乳棒状石斧である。磨製の加工で、表裏および左右側面に面をもたせている。36-2・3 は流紋岩製の打製石斧である。36-2 は石斧の頭部～基部が残存する。刃部は欠損しているが、幅広の刃部をもつバチ形の石斧と考えられる。36-3 は石斧の基部が残存し、頭部と刃部は欠損している。基部の左右側縁部には大まかな剥離が加えられている。刃部に向かって緩やかに開いており、バチ形に近い石斧になるものと思われる。



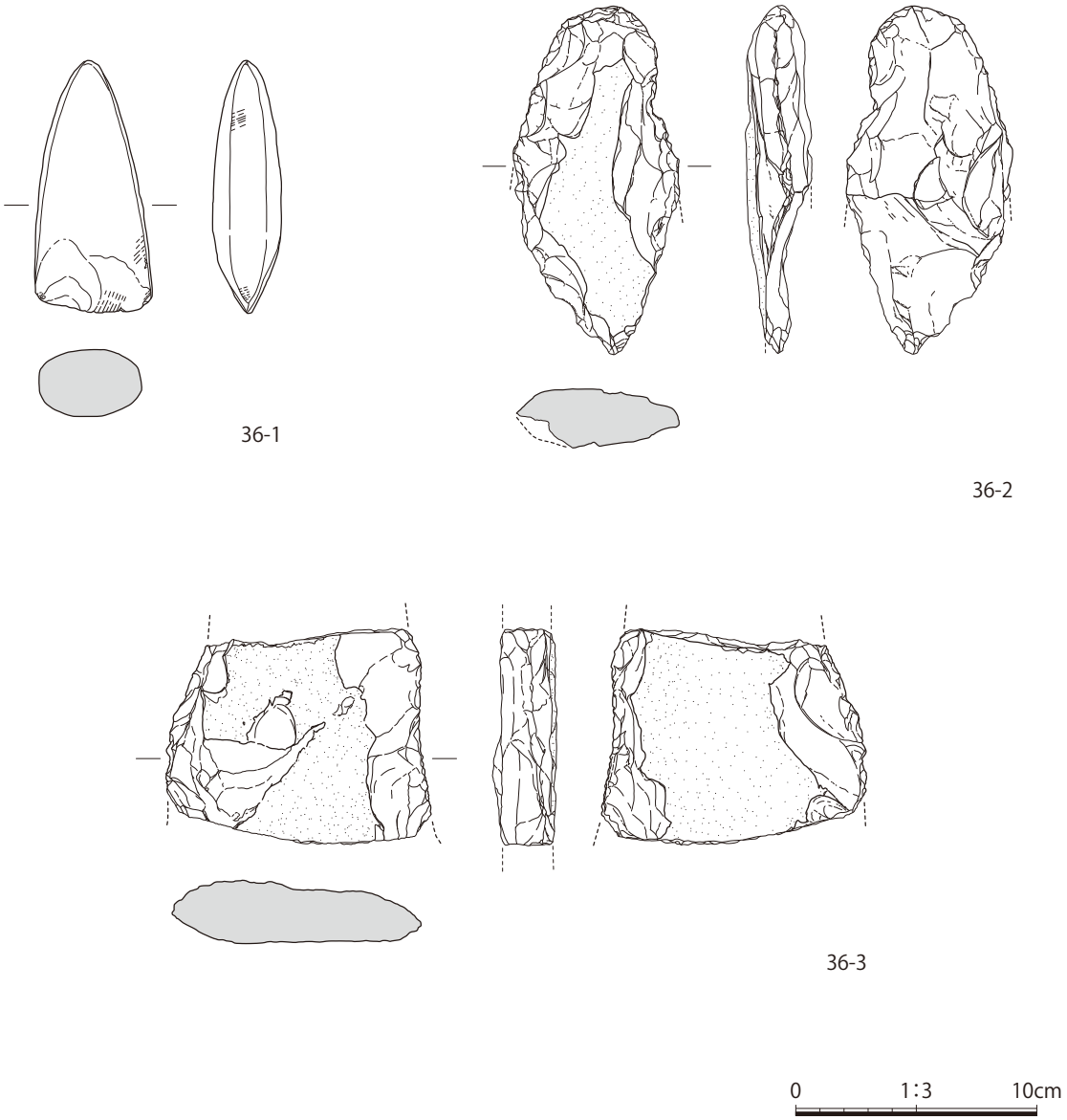
第 33 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（1）



第 34 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（2）



第 35 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（3）



第 36 図　遺物包含層下層（第 5 層）出土遺物（4）

第 3 項　旧地形について

C3 区の旧地形（第 30 図）

C3 区では、淡黄褐色軟砂岩の検出面を旧地形の基盤層として捉えた。検出標高は、調査区北端で標高 6.90m、中央部で標高 6.00m、南端で標高 5.70m を測り、北から南に向かって傾斜している。また、調査区内北側では断面形が 2 段掘りのような形状で地山の落ち込みを確認している場所があり、この落ち込みの上端は標高 8.80m、下端は標高 5.50m 前後を測り、ここでは東から西方向に向かって下る谷の東側縁辺部～底部付近を検出したものと考えられる。

C3 区では、C2 区で検出した谷の西側縁辺部の落ち込みと対となる東側縁辺部の落ち込みを検出したものと考えられ、C2 区から C3 区にかけては谷の両端の落ち込みと北から南方向へ向かって下る谷の一部を検出したものと捉えられる。この結果、C2 区から C3 区にかかる谷の規模は、西側縁辺部から東側縁辺部までの距離が幅 15.5m、深さが最深部で 3.3m を測ることが明らかとなった。

第５節　C4 区の調査

C4 区は、遺跡範囲の南東側にあたる標高 6.60 ～ 10.10ｍを測る丘陵斜面に位置し、既存道路の東側に一辺 11.0 ～ 17.0m の範囲で設定した三角形の調査区である。発掘調査は、重機を併用しながら人力により表土を剥ぎ取り、以下は人力掘削によって遺構面および遺構の検出を行った。土層観察は、調査区内に面する南壁の壁面を記録した。

調査の結果、C4 区では調査区内西端で東から西方向に向かって下る谷の落ち込みを検出した。なお、C4 区では橙褐色～黄褐色軟砂岩を地山面として捉えたが、調査区内全域にわたって地滑りを受けた可能性が指摘されている。地滑りの範囲は第７図に示したように、C4 区の調査区外にあたる東側丘陵上の南北 18.5m の範囲で、西側へ向かって断層状に地盤がずれている地滑り（円弧滑り）の痕跡を確認した。そのため、調査時に溝状遺構や性格不明遺構として検出している遺構については、地滑りの痕跡を平面的に検出したものか、あるいは地滑りの影響を受けた後の痕跡を遺構として検出している可能性が極めて高いことから、これらは遺構として扱わないこととした。

第１項　基本層序（第 37・38 図）

ここでは C4 区の基本土層模式図を第 37 図、調査区平面図と南壁土層図を第 38 図に示し、土層の詳細について述べる。調査区南壁土層を標準とした基本的な層序は、上層から表土（第１層）、茶褐色粘質土（第２層）、暗茶褐色粘質土（第３層）、橙褐色～黄褐色軟砂岩（第４層）からなる土層堆積を確認した。

第１層は標高 6.60 ～ 10.10ｍに堆積する層厚 20㎝の茶褐色土（表土）である。第２層は標高 6.40 ～ 9.90ｍに堆積する層厚 30 ～ 50㎝の茶褐色粘質土である。第３層は標高 5.90 ～ 8.70ｍに堆積する層厚 20 ～ 40㎝の暗茶褐色粘質土である。第４層は橙褐色～黄褐色軟砂岩の地山である。地山面の検出標高は、調査区東端で標高 9.60m、中央部で標高 6.90m、西端で標高 5.20m を測り、東から西に向かって傾斜している。

また、先述したように C4 区は調査区全域にわたって地滑りを受けている可能性が指摘されている。調査区西半の壁面の一部では土層堆積に乱れがみられ、表土直下で地山の基盤層が天地返しのように撹拌されて堆積している状況を確認しているため、ここでは地滑り土層を撹乱層として扱っている。

C4 区基本土層

第１層（表土）
第２層
第３層
第４層（地山）

C4 区基本土層と南壁土層の対応関係

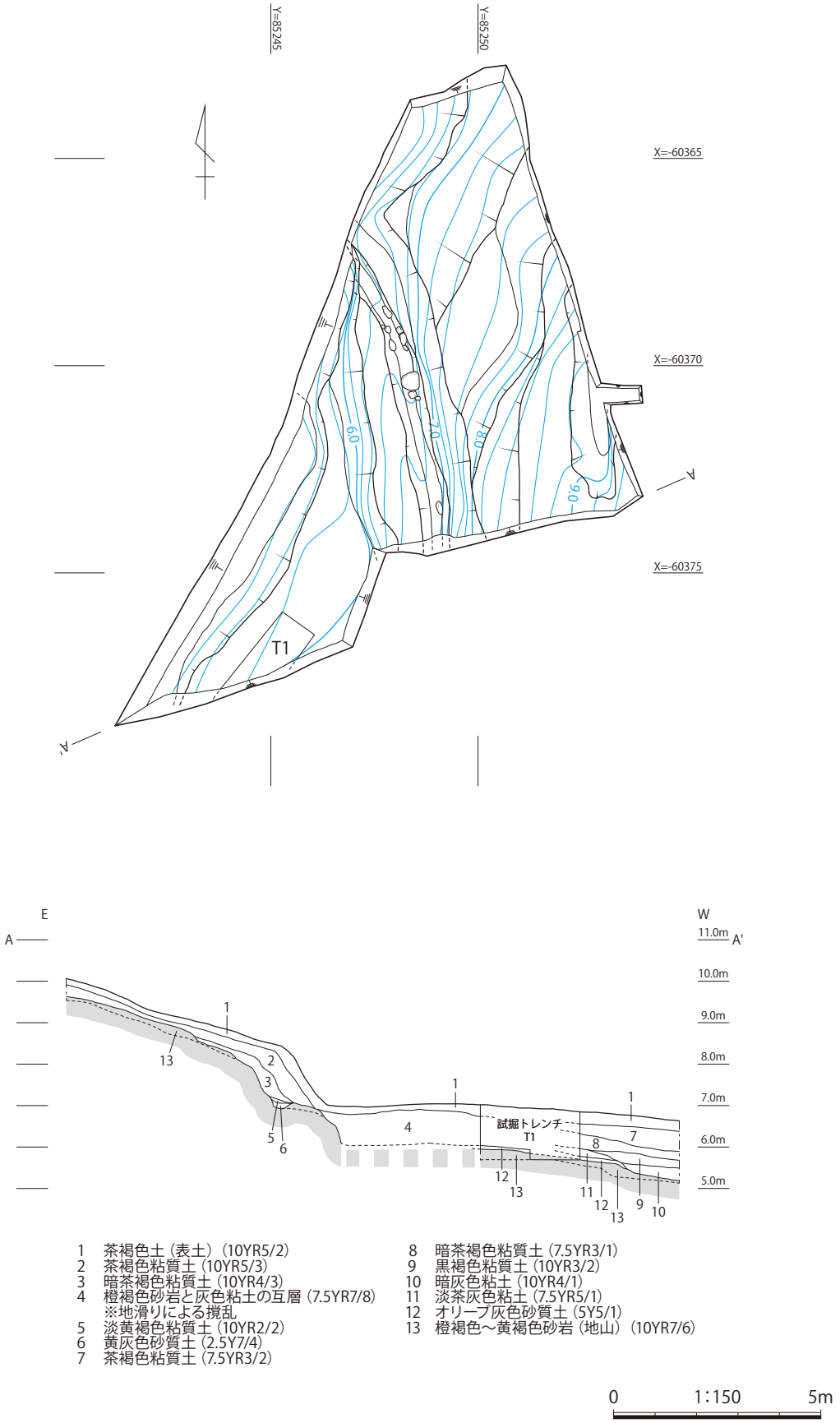
第１層 ＝ 南壁第１層　茶褐色土

第２層 ＝ 南壁第２層　茶褐色粘質土

第３層 ＝ 南壁第３・８層　暗茶褐色粘質土

第４層 ＝ 南壁第 13 層　橙褐色～黄褐色軟砂岩

第 37 図　C4 区基本土層模式図



1　茶褐色土（表土）（10YR5/2）
2　茶褐色粘質土（10YR5/3）
3　暗茶褐色粘質土（10YR4/3）
4　橙褐色砂岩と灰色粘土の互層（7.5YR7/8）
　※地滑りによる撹乱
5　淡黄褐色粘質土（10YR2/2）
6　黄灰色砂質土（2.5Y7/4）
7　茶褐色粘質土（7.5YR3/2）
8　暗茶褐色粘質土（7.5YR3/1）
9　黒褐色粘質土（10YR3/2）
10　暗灰色粘土（10YR4/1）
11　淡茶灰色粘土（7.5YR5/1）
12　オリーブ灰色砂質土（5Y5/1）
13　橙褐色～黄褐色砂岩（地山）（10YR7/6）

0　1:150　5m

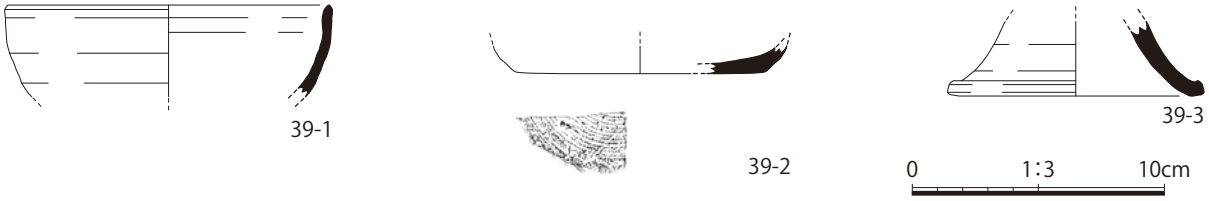
第 38 図　C4 区平面図・南壁土層図

第２項　出土遺物

C4 区の遺物は地山検出面から出土し、それ以外の土層からは出土していない。出土量は C1 ～ 3 区と比較しても極僅かで、出土したのは土師器片と須恵器片である。出土遺物は 8 点あり、いずれも小片や細片だが、その中で実測可能な遺物 3 点を抽出して掲載した。

地山面出土遺物（第 39 図）

須恵器　39-1・2 は無高台坏で、39-1 は口縁部のみ残存する。39-2 は底部のみ残存し、底部外面に糸切痕をもつ。39-3 は高坏の脚部で、内外面に回転ナデ調整が施される。39-1 ～ 3 はいずれも 8 世紀第 2 ～ 4 四半期、出雲国府編年第 3 ～ 4 型式に相当するものか。



第 39 図　地山面出土遺物

第３項　旧地形について

C4 区の旧地形（第 38 図）

C4 区では、橙褐色～淡黄褐色軟砂岩の検出面を旧地形の基盤層として捉えた。検出標高は、調査区東端で標高 9.60m、中央部で標高 6.90m、西端で標高 5.20m を測る。調査区内中央部の東端から西端までの約 7.0m 間の比高差は 4.40m を測り、地山面は東から西に向かってきつい勾配で傾斜している。また、調査区内西端では地山の落ち込みを確認している場所があり、この落ち込みの上端は標高 5.60m、下端は標高 5.20m を測り、ここでは東から西方向に向かって下る谷の東側縁辺部を検出したものと考えられる。

註

(2)　大海崎石は、松江市大海崎町周辺や和久羅山で産出される角閃石粗面安山岩である。

(3)　江戸時代の享保 2（1717）年に成立した、松江藩による官選地誌である「雲陽誌」の「島根郡・朝酌」の項目のなかには、「若宮　国狭槌尊なり、境内五間に三間、社なし」…「水神　三ヶ所」…の記載がみられる。

(4)　松江市域では、現段階で中世の水辺の祭祀に伴う遺構と遺物は確認されていない。古墳時代の遺跡の事例では、松江市南郊に位置する意宇平野とその周辺部の水辺の祭祀遺跡として、松江市東出雲町に所在する夫敷遺跡では意宇川旧河道から古墳時代前期～中期の土師器・高坏・小型壺などが大量に出土し、何らかの祭祀行為が行われていたものと考えられている。また、松江市八雲町に所在する前田遺跡では意宇川の支流である岩坂川旧河道付近で古墳時代後期の手捏土器・子持甕・玉類・大型の琴や頭椎式の木製刀把装具などの大量の木製品が出土し、これらは井堰祭祀を行う際に貼石遺構の周辺に供えられたものと考えられている。今回の調査で SF01 から出土した墨書土師器 2 点のみで祭祀（水辺の祭祀）に用いられたものかどうかは断言できないため、ここでは可能性の指摘に留めておきたい。

(5)　藤原久良採集陶磁資料調査研究会　2008 「島根・富田川河床遺跡の研究－藤原久良氏採集資料（Ⅰ）－」『古代文化研究　第 16 号』P107　第 4 図　富田川河床遺跡採集遺物（青磁）実測図　№ 30 ～ 33 に類例がある。

第５章　自然科学分析

若宮谷遺跡出土の動物遺存体

広島大学総合博物館　埋蔵文化財調査部門　石丸恵利子

1. はじめに

若宮谷遺跡は、松江市朝酌町に所在する縄文時代後期から中世後期にいたる複合遺跡である。令和元（2019）年度の朝酌矢田地区共同墓地整備事業に伴う発掘調査において、C1 区の第２遺構面で中世後期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）の貝塚 SM01 ～ 05 が検出された。

貝塚を形成する貝層（混貝土層）は、全量で土嚢袋 185 袋分を回収し、5㎜・2.5㎜・1㎜メッシュの篩を用いて水洗選別を行った。5㎜と 2.5㎜の篩上に残った資料からヤマトシジミとサルボウ・その他の貝類・骨類を選別し、全重量で多くの資料が確認された C6 と F22 グリッドの上位２地点においては、1㎜メッシュで回収された資料からも微小貝などの微細資料のピックアップ作業を行った。

整理作業の結果、貝類約 86㎏と骨類約 80g が確認された。本稿では、これらの種類・部位・大きさなどの特徴を報告し、当時の動物資源利用について考察する。確認した動物種の種名と部位等の個別情報は表２～４に記した。

2. 出土動物遺存体の種類

（1）腹足綱

サザエ　SM01 の B6・C4・C5 グリッドで殻軸や殻体破片など３個体分、SM02・04・05 で各１点の突起部あるいは殻体破片を確認した。蓋は確認されなかった。全体的には少量であり、SM01 で最も多く認められた。突起部が確認されていることから、有棘のサザエの存在が窺える。サザエは、潮間帯下部から水深 20m の岩礁域に生息し、遺跡東方の中海よりも外の海域から運ばれたものと考えられる。

ヘソアキクボガイ　SM02 の A14 グリッドで１点のみ確認した。潮間帯から水深 20m の岩礁域に生息する。

ミミガイ科（アワビ類）　破片となっているため種は明確にできなかったが、SM01・04・05 で確認した。個体数に差を示すまでではないが、SM04 で最も多くの量を確認した。種類としてはクロアワビ（潮間帯～水深約 20m の岩礁）、メガイアワビ（水深５～ 30m の褐藻の多い岩礁）、マダカアワビ（潮間帯下～水深約 50m の岩礁）のいずれかが想定される。

イシマキガイ　SM01 ～ 05 からいずれも出土を確認し、SM01 で８点、SM02 で４点、SM03 で１点、SM04 で３点、SM05 で３点の計 19 点を数える。イシマキガイは汽水域の中・上部から純淡水域の下流域の岩礫上に生息し、岩石等に付着した微細藻類を食べる。食用となった可能性は低く、ヤマトシジミなどの他種に交じって持ち込まれたのではないかと考えられる。

ヒメタニシ　SM01 で３点、SM02 で６点、SM04 で１点、SM05 で 24 点の計 35 点で、殻長 23㎜～ 40㎜のものを確認した。ヒメタニシは、池・沼・湖・水路や水田などの止水や半止水環境を好ん

でおり、水草や杭などの垂直面も活動基盤とする。

アカニシ　SM01 で 2 点、SM02 で 1 点、SM05 で 2 点の計 5 点を確認した。SM01 で確認された殻軸はともに火を受けて灰色を呈するものであった。SM02 の 1 点は殻長 30㎜程度の小型のもので、このような大きさのものは潮干狩りの際に干潟でも見つけることができるが、食用として意図的に持ち込まれたものではなく、他種に混じって運ばれたものである可能性が高い。

カワザンショウガイ科　SM01 で 8 点、SM05 で 8 点の計 16 点を確認した。殻長は 2 ～ 4㎜程度の小型であることや色帯が認められることから、ツブカワザンショウの可能性もあるが、臍孔が開かないことや殻頂部は浸食したものが多いことからカワザンショウガイの可能性もある。両種ともに河口周辺の汽水域やその直上の淡水域、内湾奥部の淡水の影響する川岸やヨシ帯に生息し、ツブカワザンショウは礫や漂着物の裏やヨシ帯の床の枯葉下に、また、カワザンショウガイは潮の引いた底床にまき散らしたように、他種と比べて物陰に隠れないことが多いとされる。

オカチョウジガイ属　SM01 で 175 点、SM05 で 27 点の計 202 点を確認した。殻長 5.5㎜～ 7㎜、殻径 2㎜～ 2.5㎜の細長い円錐形のものと、殻長 3.5㎜前後、殻径 1.5㎜前後のものに大別され、前者はホソオカチョウジガイ、後者はサツマオカチョウジガイもしくはホソオカチョウジガイやオカチョウジガイの若貝と考えられる。そのほか、欠損のためどちらかに分類するか判断が難しいものはオカチョウジガイ属とした。いずれの種も森林の林床の落葉下に生息する。

ナタネガイ科　SM01 で 253 点､SM05 で 39 点の計 292 点を確認した。殻径 2.0㎜～ 2.3㎜で 3.5 層、殻表面に斜めの薄板状の成長肋が目立ち、広い臍孔が認められることから、ヒメナタネガイと考えられる。やや乾燥した林床や草地に生息する。

カワニナ　SM01 で 4 点、SM02 で 2 点の計 6 点を確認した。殻長 24㎜～ 28㎜のものを計測した。川や水路、丘陵地や谷戸地形の水路や小河川など、やや有機質のある場所に生息する淡水貝類である。

オナジマイマイ科　SM01 でマイマイ類の破片約 20 点を確認した。殻径 40㎜～ 50㎜に復元でき、螺塔はやや低く殻口が広いことや、臍孔壁が急で孔内深くまで見えること、色帯の特徴などから、イズモマイマイの可能性が高いものである。

その他　その他の巻貝として、SM03 でテングニシと考えられる殻軸の破片 1 点を確認した。

（2）二枚貝綱

ヤマトシジミ　貝層の主体を占めるもので、点数にして最も多くの量を確認した。現在、宍道湖や中海の特産品となっているヤマトシジミは、本遺跡周辺の松江市域では佐太講武貝塚や西川津遺跡などからも分かるように、縄文時代からすでに最も多く利用された貝のひとつであり、近世の松江城下町遺跡においても利用が窺える（竹広ほか 1994、高安･角館 1989、石丸 2018）。全点数の集計は行っていないが、貝類全体の約 86㎏の多くを占めている。貝類の集中地点である SM01 の C6 グリッドと SM05 の G22 グリッドにおける個体数と大きさの特徴については後述する。

サルボウ　ヤマトシジミに次いで多く確認した。サルボウについても全点数の集計は行っていないが、SM01 の A6 と C6 グリッド、また SM05 の F22 と G22 グリッドにおける個体数と大きさの特徴に

ついては後述する。

その他　その他の二枚貝として、アサリと考えられる殻体破片をSM04で1点のみ確認した。

（3）軟骨魚綱

メジロザメ科　SM02でメジロザメ科と考えられる歯1点を確認した。本遺跡に近接する縄文時代のシコノ谷遺跡から同じくメジロザメ科のドタブカの歯と推定される資料が報告されており、これらの資料と同形態であることから同種の可能性がある。ただし、1点のみの出土であることや山陰沿岸域に生息する可能性があるヨシキリザメやオオメジロザメなどの標本との比較による確認も必要であるため、ここではメジロザメ科の一種にとどめておきたい。また、SM01でイタチザメと同形態の大型の椎骨も1点確認されており、これも歯と同種のものである可能性が高い。

エイ類　SM01でトビエイ科の歯板と考えられる破片1点を確認した。また、径2.5㎜程度の小型の椎骨も1点確認しており、エイ類のものと考えられる。

（4）硬骨魚綱

ウナギ目　SM01でウナギもしくはアナゴの可能性がある歯骨あるいは前上顎骨の破片1点を確認した。ウナギであれば宍道湖や中海、アナゴであれば外洋である日本海で漁獲したものが運ばれたと考えられる。

ニシン科　SM01で腹椎と尾椎を計7点とSM05でニシン科の一種と考えられる椎骨8点を確認した。中には、サッパやウルメイワシに似る尾椎も確認することができた。

コイ科　SM01でコイ科の咽頭歯3点と背鰭もしくは臀鰭棘1点を確認した。咽頭歯の2点はフナ属のものと考えられ、残りの1点はオイカワやカワムツなどの小型のコイ科のものと考えられる。

ボラ科　SM03で終尾骨1点とSM04で主鰓蓋骨1点を確認した。終尾骨は尾部棒状骨と下尾骨でボラの標本と比較してボラ科の一種と判断した。主鰓蓋骨は関節部と上方に切断痕が認められ、解体調理の痕跡と考えられる。

スズキ属　SM02で肩甲骨1点を確認した。スズキとヒラスズキの可能性があるが、両者の肩甲骨に顕著な差は認められないためスズキ属とした。

アジ科　SM04で椎骨1点を確認した。マアジに似るものである。

クロダイ属　SM01で前上顎骨・前鰓蓋骨・舌顎骨など5点、SM02で前上顎骨1点、SM05で角骨1点の計7点を確認した。舌顎骨には、端部2箇所に刃物で切断されたような痕跡が認められ、調理解体の際についたものと考えられる。各部位の計測値から体長を復元すると、350㎜前後のものを主体に210㎜の小型のものから410㎜程度のものを確認することができた。

マダイ亜科　SM01でマダイ亜科の前上顎骨1点を確認した。計測値から体長を復元すると430㎜～450㎜に復元された。体長が400㎜を超えることからマダイの可能性が高い。

ハゼ科　SM01でハゼ科の前上顎骨1点と椎骨3点を確認した。前上顎骨の形態からマハゼの可能性が高い。椎骨1点は、やや押し潰されたように変形しているが第1椎骨と思われるものである。

（5）哺乳綱

モグラ科　SM01 で尺骨 1 点を確認した。頭胴長 90㎜で尺骨長が 15㎜のミズラモグラ標本と比較して形態は類似しているが、資料は最大長が 22㎜であることから、より大型のコウベモグラあるいはアズマモグラの可能性がある。

イヌ　SM01 で下顎骨 1 点を確認した。尺骨や橈骨長で体高 43 ～ 45㎝の中型犬の下顎骨よりも小さいことから体高 40㎝以下の小型犬であったと推測される。内側面に切創のような痕跡を確認しているが、解体痕かどうかは判断できなかった。

ニホンジカ　SM01 で胸椎（第 8 椎骨）1 点と筋突起破片 1 点を確認した。胸椎の椎骨板は化骨済であることから成獣個体と判断される。解体痕は確認されなかった。

ネズミ科　SM01 で遊離歯 5 点と尺骨 1 点を確認した。臼歯はネズミ亜科のもので、クマネズミ属などの頭胴長 110㎜以上の個体のものと考えられ、尺骨の大きさはハツカネズミなどの頭胴長 65㎜前後のものと同大であった。

その他　その他の哺乳類として、イタチ大の中手骨・基節骨・寛骨や、タヌキやアナグマ大の遊離歯など 7 点を確認しているが、種の特定には至っていない。

（6）その他

カエル類　SM01 で椎骨 1 点と両端部が欠損しているため正確な判断は難しいが、大腿骨の骨幹部と思われる資料が確認された。ウシガエルの標本よりも小さな個体のものであるが、種は不明である。

ヘビ類　SM01 で椎骨 1 点、SM02 で椎骨 2 点、SM04 で椎骨 2 点を確認した。種は不明である。

カメ類　SM01 で椎骨板ではないかと考えられる小破片 1 点を確認した。小型のものであり、種の同定には至っていない。

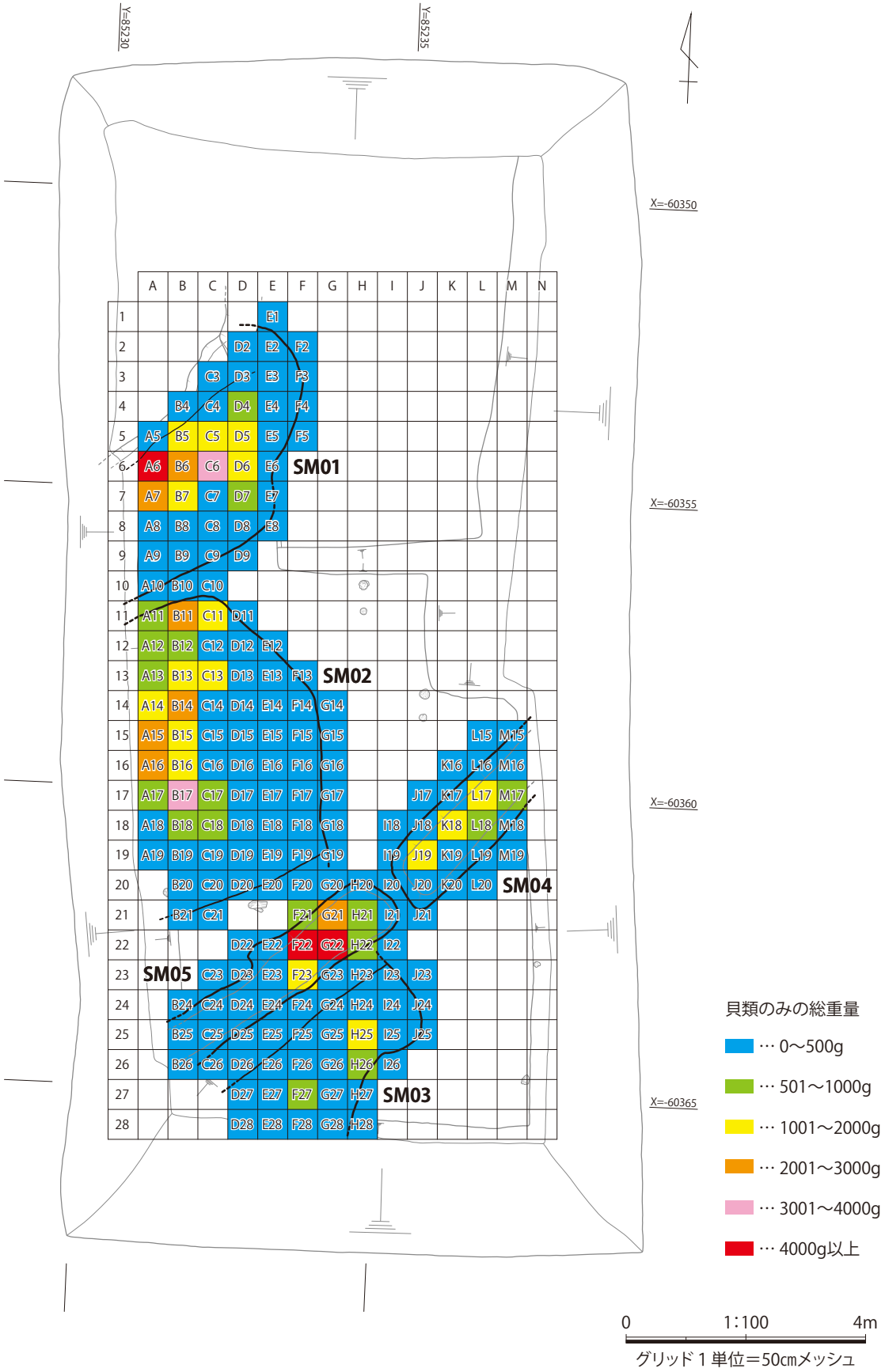
3. 動物資源利用の特徴

（1）貝類（表 3）

貝類は、巻貝 12 分類群・二枚貝 3 分類群を確認した。最も多く確認されたのはヤマトシジミで、サルボウがそれに続き、2 種でその大半を占めるのが特徴である。全貝量をグリッド単位で計量した結果、SM01 と SM05 に特に多く堆積し、SM02 の西半部にも集中して堆積している状況を確認することができた（第 40 図）。貝集中部は調査区西端にあることから、貝塚はさらに県調査 B4 区の南東端まで続くものと想定される。

主要種であるヤマトシジミとサルボウの大きさを調査するため、貝集中部 C6 と F22 グリッド資料について個体数のカウントと殻長・殻高の計測を行った。サルボウについては、C6 と F22 グリッドに加えて A6 と G22 グリッドも対象とした。

分析の結果、ヤマトシジミは C6 で最小個体数 2,089 個体・F22 で 3,062 個体、サルボウは C6 で 46 個体・A6 で 29 個体・F22 で 45 個体・G22 で 36 個体であった。ヤマトシジミが大半を占めていることが分かる。また、個体数のカウントの際、いずれのグリッドにおいても同一グリッド内で左



第 40 図　貝塚 SM01 ～ 05 貝類出土量分布図（グリッド単位での総重量）

右数には大きな差が認められなかった。この結果からは、同時に投棄された貝廃棄の状態をよく残しており、堆積が大きく改変されていない貝層だと理解することができる。

ヤマトシジミの大きさは、C6 と F22 グリッドのいずれも殻高で 18㎜以上 22㎜未満のものが主体を占め、14㎜以上 18㎜未満のやや小ぶりなものや 22㎜以上 26㎜未満の大ぶりのものも多く利用されていたことが明らかとなった（第 41 図上段）。

松江市鹿島町に所在する佐太講武貝塚において、ヤマトシジミの殻長で層位ごとの大きさが比較されており（竹広ほか 1994）、これを殻高に換算すると 17㎜～ 21㎜と 23㎜～ 27㎜にピークがあることが示されている。これらのことから縄文時代には本貝塚での 22㎜以上 26㎜未満の個体にピークがあった時期もあり、中世段階ではそれらの大きなサイズはやや多く利用されながらも主体を占めるような利用形態とはならなかったことが窺える。また、佐太講武貝塚では 30㎜を超える個体も多く認められるが、本貝塚では 30㎜を超えるものはほとんど確認されなかったことからも、中世段階では 18㎜以上 22㎜未満のものが利用の中心であったといえる。

サルボウの大きさは、SM01 にある A6 と C6 グリッドにおいては殻高 25㎜以上 30㎜未満の大きさをピークとして、30㎜以上 35㎜未満の大きさがそれに次いで利用されており、SM05 にある F22 と G22 グリッドでは 25㎜以上 30㎜未満のものと 30㎜以上 35㎜未満のものが同程度利用されていたことが示された（第 41 図中段・下段）。14 世紀後半～ 15 世紀前半の貝塚形成期の中でも、好まれた大きさが異なっていた時期がある、あるいは食された季節がやや異なるものであったことを示している可能性が指摘できる。だたし、現在の市場で流通しているサルボウ（赤貝）の殻高は 25㎜～ 32㎜程度であることから、中世と現在で利用される大きさには差がない状況が窺える。

次に、本遺跡の整理作業において 1㎜メッシュの篩を用いて微細な資料を回収したことによって、多くの微小貝を確認することができた。カワザンショウガイ科・ナタネガイ科・オカチョウジガイ属の存在がその成果である。これらの種は食用として利用されたものではないが、貝塚の環境について教えてくれるものである。カワザンショウガイ科は、河口周辺の汽水域やその直上の淡水域、内湾奥部の淡水の影響する川岸やヨシ帯に生息し、ツブカワザンショウは礫・漂着物の裏やヨシ帯の床の枯葉下に、カワザンショウガイは潮の引いた底床に多く認められることから、これらの環境が貝塚周辺に存在した、あるいはこれらの環境で貝類の採取や漁撈などの活動が行われていたことを読み取ることができる。また、オカチョウジガイ属は森林の林床や落葉下に、ナタネガイ科はやや乾燥した林床や草地に棲むとされ、貝塚あるいはその周辺にこのような環境が存在したことが窺える。これらの微小貝は C6 と F22 グリッドのみから採取されたものであるが、他のグリッドにも同様に含まれている可能性が高い。

（2）骨類（表 4）

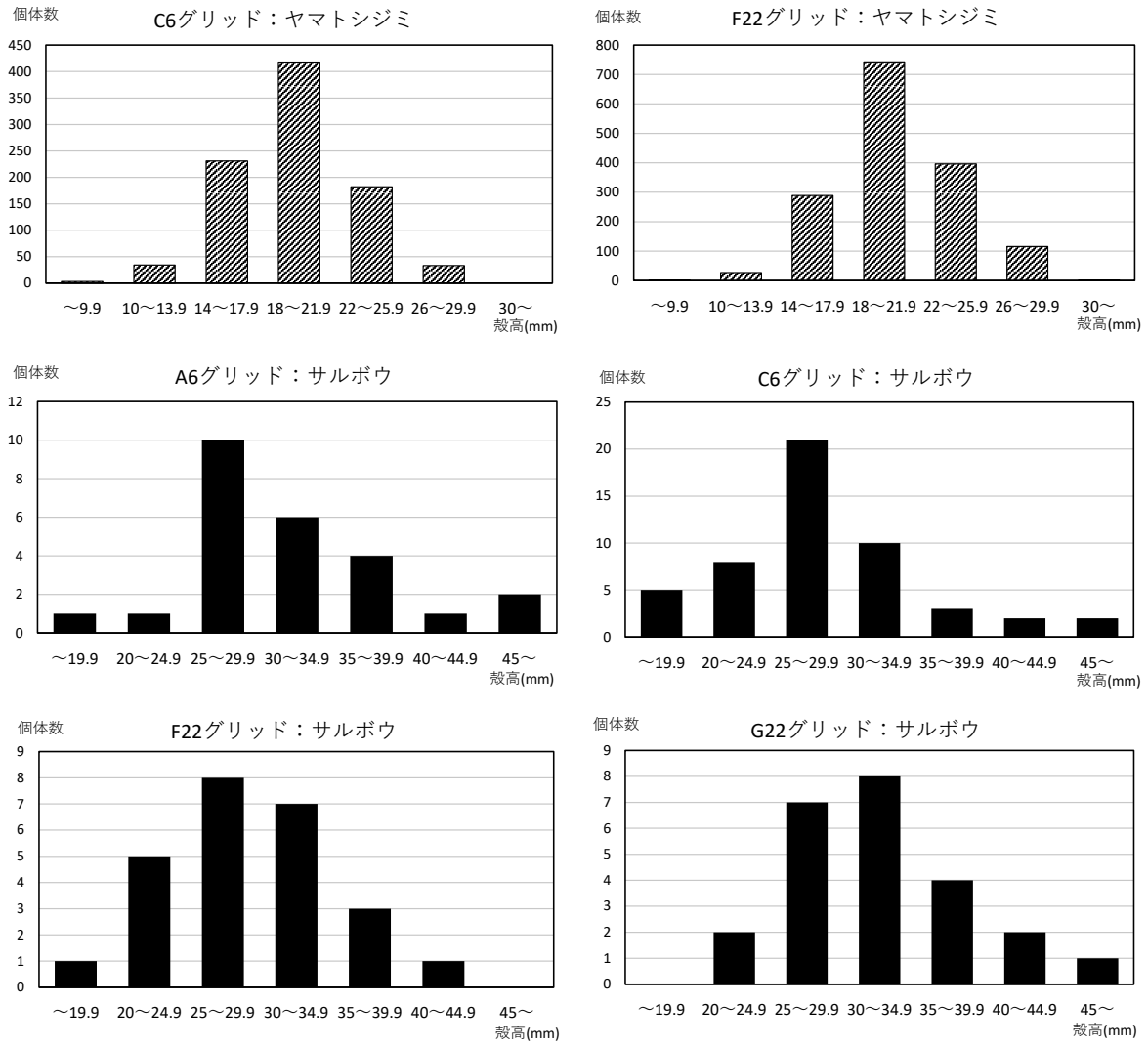
骨類は、魚類 11 分類群・哺乳類 4 分類群・両生類 1 分類群・爬虫類 2 分類群を確認した。貝類と比較して骨類は少量であったが、メジロザメ科・アジ科・マダイ亜科・ニシン科の存在により外洋での活動、またウナギ目・ボラ科・スズキ属・クロダイ属・ハゼ科からは汽水域にも近い内湾、コイ科

は淡水域での漁撈活動を示しており、多様な水域環境での活動を読み取ることができる。

哺乳類はさらに点数が少ないが、ニホンジカの椎骨（第 8 椎骨）が確認されたことから、胴体部分あるいは 1 頭すべてが遺跡に持ち込まれて廃棄された可能性が読み取れる。また、イヌについても下顎骨 1 点のみであるため、貝塚に含まれた経緯の評価は難しいが、貝塚形成期に小型犬が存在した点についてのみ指摘をしておきたい。

なお、令和元（2019）年度に行われた若宮谷遺跡（県調査 B 区）では、ニホンジカの出土量が 13 点とやや多く、イノシシも 2 点確認されている。また、漁撈活動で使われた釣針や土錘も出土している（廣江ほか 2021）。貝塚の分布からは、県調査区と今回調査区の間の未調査区が貝塚の中心であった可能性が高く、その地点にはまだ多くの哺乳類および魚類が残されていることが期待される。

以上のように、骨類は少量ではあったが、海産魚類を中心とした多様な魚種が利用されていたことを明らかにすることができた。ニシン科やハゼ科などの微細な資料は、1㎜メッシュで回収されたものから採取できたものであり、SM01 の C6 グリッドと SM05 の F22 グリッドのみでピックアップ作業を行っていることから、他のグリッドにおいても新たに資料が得られる可能性が高い。



第 41 図　ヤマトシジミ・サルボウの殻高組成

４．まとめ

以上のことから、貝類は汽水域で獲得することができるヤマトシジミとサルボウを中心に、サザエ・アカニシ・アワビ類などの海産貝類も利用されていたことが明らかとなった。汽水域の環境はイシマキガイ・カワザンショウガイ科の存在から、また淡水域はカワニナ・ヒメタニシ、陸域についてはオカチョウジガイ属・ナタネガイ科・オナジマイマイ科から知ることができた。

調査時に貝層（混貝土層）の全量回収を行い、目の細かい篩を用いた水洗選別による微小貝の採取によって、若宮谷遺跡における生業活動の様相だけでなく、遺跡周辺の環境に言及できたことは今回の分析の大きな成果である。また、骨類の採取においても 1㎜メッシュの篩を用いたことによって、ニシン科やハゼ科などの小型魚類の存在を明らかにすることができたことも重要な成果といえる。

今後、居住域と貝塚の存在が推定される地点での発掘調査が進み、水洗選別による微細な資料の回収が行われれば、若宮谷遺跡で生活した人々の生業活動の実態や当時の環境がより明確なものとなることが期待される。

本報告の成果は、発掘調査現場において貝層を全量回収した調査担当者と現場作業員の方々、また整理作業において水洗選別や資料選別および計測・計量等の細かな作業に時間を割いていただいた整理作業員の方々の努力によるところが大きく、ここに記して心より感謝申し上げる次第である。

参考文献

東　正雄 1995『原色日本陸産貝類図鑑』増補改訂版、保育社

阿部　永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 2008『日本の哺乳類　改訂 2 版』東海大学出版会

石丸恵利子 2018「松江城下町遺跡における動物資源利用」『松江城下町遺跡 第 1 ブロック（殿町 198-7 外）第 13 ブロック（南田町 108-1 外）第 14 ブロック（南田町 101-21 外）第 16 ブロック（南田町 130-3 外・134-1 外）総括編』松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団、185-192 頁

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎 2005『決定版日本の両生爬虫類』平凡社

奥谷喬司編著 2017『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

高安克己・角館正勝 1989「西川津遺跡弥生層出土の貝類について」『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区 3）』島根県土木部河川課・島根県教育委員会、273-292 頁

竹広文明・赤沢秀則・内山純蔵 1994『佐太講武貝塚発掘調査報告書 2』島根県鹿島町教育委員会

中坊徹次編 2013『日本産魚類検索　全種の同定』第三版、東海大学出版会

廣江耕史・阿部賢治・酒井哲弥・丸山真史・渡辺正己 2021『若宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』島根県教育委員会

増田　修・内山りゅう 2004『日本産淡水貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類』ピーシーズ

Driesch, Angela Von Den 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1, Peabody Museum Press, Cambridge

表 2　若宮谷遺跡出土動物遺存体種名一覧

門	綱	目	科	属/種
軟体動物門 Mollusca	腹足綱 Gastropoda	古腹足目 Vetigastropoda	サザエ科 Turbinidae	サザエ *Turbo cornutus*
			バテイラ科 Tegulidae	ヘソアキクボガイ *Chlorostoma xanthostigma* A. Adams, 1853
			ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.	
		アマオブネガイ目 Neritimorpha	アマオブネガイ科 Neritidae	イシマキガイ *Clithon retropictum*
		原始紐舌目 Architaenioglossa	タニシ科 Vivipalidae	ヒメタニシ *Sinotaia quadrata histrica*
		新生腹足目 Caenogastropoda	アッキガイ科 Muricidae	アカニシ *Rapana venosa*
			カワザンショウガイ科の一種 Assimineidae gen. et sp. indet.	
			テングニシ科 Melongenidae	テングニシ？ *Hemifusus tuba*
			オカクチキレガイ科 Subulinidae	ホソオカチョウジガイ *Allopeas pyrgula*
				サツマオカチョウジガイ？ *Allopeas satsumense*
				オカチョウジガイ属の一種 *Allopeas* sp.
			ナタネガイ科の一種 Punctidae gen. et sp. indet.	
			カワニナ科 Pleuroceridae	カワニナ *Semisulcospira libertina*
		汎有肺目 Panpulmonata	オナジマイマイ科の一種 Bradybaenidae gen. et sp. indet.	
	二枚貝綱 Bivalvia	フネガイ目 Arcoida	フネガイ科 Arcidae	サルボウ *Scapharca kagoshimensis*
		マルスダレガイ目 Veneroida	マルスダレガイ科 Veneridae	アサリ？ *Ruditapes philippinarum*
			シジミ科 Corbiculidae	ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime, 1864
脊椎動物門 Vertebrata	軟骨魚綱 Chondrichtyes	メジロザメ目 Carcharhiniformes	メジロザメ科の一種 Carcharhinidae gen. et sp. indet.	
		板鰓亜綱の一種 Elasmobranchii ord., fam., gen. et sp. indet.		
	硬骨魚綱 Osteichthyes	ウナギ目の一種 Anguilliformes fam., gen. et sp. indet.		
		ニシン目 Clupeiformes	ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.	
		コイ目 Cypriniformes	コイ科 Cyprinidae	フナ属の一種？ *Carassius* sp.
			コイ科の一種 Cyprinidae gen. et sp. indet.	
		ボラ目 Mugiliformes	ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.	
		スズキ目 Perciformes	スズキ科 Percichthyidae	スズキ属の一種 *Lateolabrax* sp.
			アジ科の一種 Carangidae gen. et sp. indet.	
			タイ科 Sparidae	クロダイ属 *Acanthopagrus* sp. マダイ *Pagrus major*
			タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet.	
			ハゼ科の一種 Gobiidae gen. et sp. indet.	
	両生綱 Amphibia	無尾目の一種 Anura fam., gen. et sp. indet.		
	爬虫綱 Reptilia	有鱗目 Squamata	ヘビ亜目の一種 Serpentes gen. et sp. indet.	
	哺乳綱 Mammalia	食虫目 Insectivora	モグラ科の一種 Talpidae gen. et sp. indet.	
		食肉目 Carnivora	イヌ科 Canidae	イヌ *Canis familiaris*
		偶蹄目 Artiodactyla	シカ科 Cervidae	ニホンジカ *Cervus nippon*
		齧歯目 Rodentia	ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.	

＊種名表記については、奥谷(2017)、増田・内山(2004)、東(1995)、中坊(2013)、内山ほか(2005)、阿部ほか(2008)に従った。

表３　若宮谷遺跡出土動物遺存体一覧（貝類）

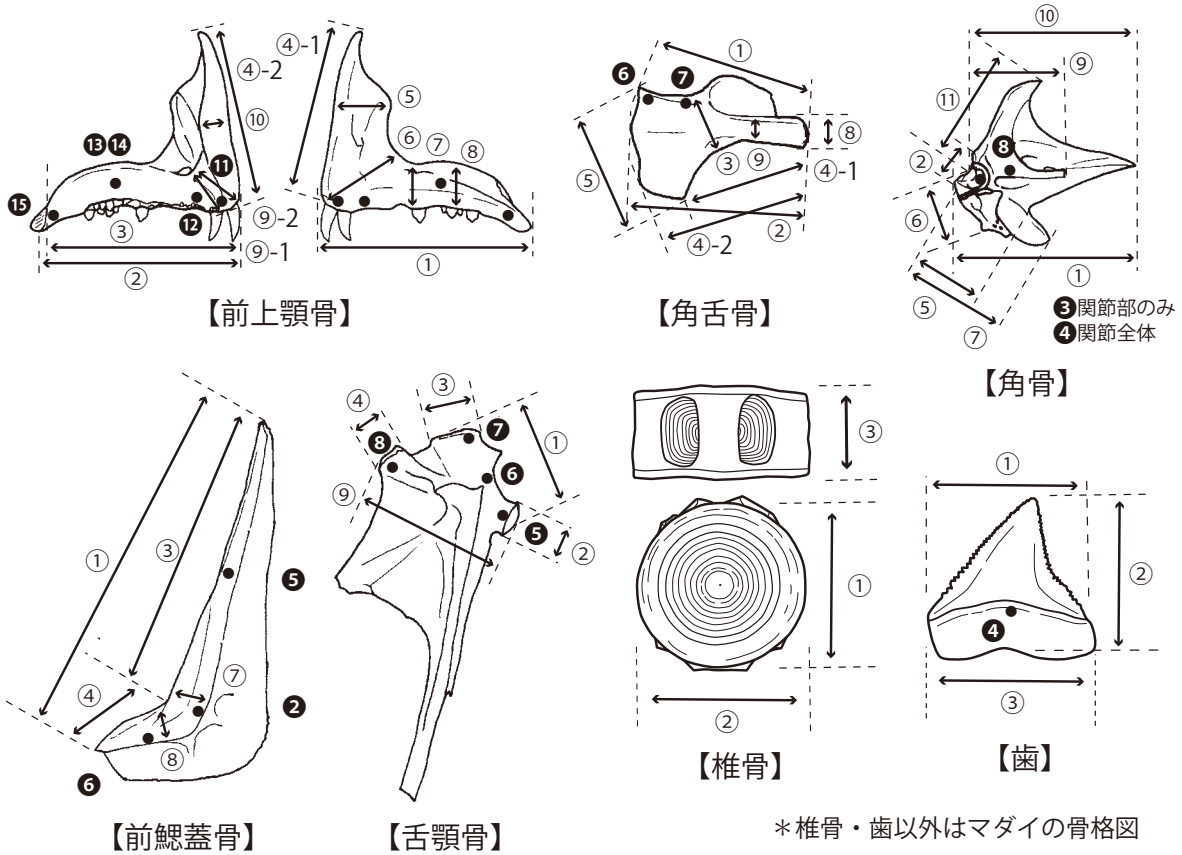
NO.	出土地点	重量(g)	破片数	分類群	種名	部分	計測値(mm)	備考	写真
54	C6	0.1	253	腹足綱	ナタネガイ科			ヒメナタネガイか	○
55	C6	0.1以下	36	腹足綱	ホソオカチョウジガイ				○
56	C6	0.1以下	130	腹足綱	サツマオカチョウジガイか			オカチョウジガイやホソオカチョウジガイの若貝か	○
57	C6	0.1以下	9	腹足綱	オカチョウジガイ属	破片			
58	C6	0.1以下	6	腹足綱	カワザンショウガイ科			カワザンショウガイか	
59	C6	0.1以下	1	腹足綱	不明巻貝	殻軸部			
90	C5	13.3	1	腹足綱	サザエ	殻軸		破片	○
91	C5	0.6	2	腹足綱	サザエ	殻体		破片	
92	C5	0.1	1	腹足綱	不明	殻頂部		破片	
93	C5	0.4	1	腹足綱	不明	殻体		破片	
94	F22	12.7	7	腹足綱	ヒメタニシ		殻長39.99,38.76,35.25,26.54,23.44	30mm越えるものはオオタニシの若貝の可能性もある	○
95	G22	14.3	7	腹足綱	ヒメタニシ		殻長38.03,37.65,38.48,32.42		
96	G22	0.5	1	腹足綱か	サザエか	殻体		破片	
97	G21	6.9	3	腹足綱	ヒメタニシ		殻長35.28		
98	G21	4	8	腹足綱	アワビ類			破片	
99	G21	0.4	2	腹足綱	不明			破片、1点は殻軸	
100	G21	0.2	1	腹足綱	イシマキガイ			殻頂部側欠損	
101	H22	3.5	2	腹足綱	ヒメタニシ		殻長38.29	1点は破片	
102	H22	0.9	2	腹足綱	アカニシか	殻体		1点は突起部破片	
103	A8	32.1	複数	腹足綱	サザエ	殻軸・殻体		破片	
104	A8	4	複数	腹足綱	アワビ類	殻体		破片	
105	A8	0.9	複数	腹足綱	サザエ/アワビ 類			破片	
106	A8	1	2	腹足綱	ヒメタニシ			2個体分	
107	A8	0.2	4	腹足綱・二枚貝綱	不明			1点はサルボウか	
108	A8	0.1	3	腹足綱	不明			マイマイ類1個体	
109	C6	1.6	1	腹足綱	ヒメタニシ		殻長33.0		
110	C6	0.7	1	腹足綱	カワニナ		殻長27.5		○
111	C6	0.3	2	腹足綱	イシマキガイ				○
112	C6	0.3	2	腹足綱	不明			1点はタニシ類、1点はサザエか	
113	B14	5.1	2	腹足綱	ヒメタニシ		殻長36.68,34.56		
114	B14	0.7	1	腹足綱	カワニナか				
115	B14	0.2	1	腹足綱	イシマキガイ				
118	J21	1.4	1	腹足綱	サザエ	突起部			
119	D25	3	1	腹足綱	アワビ類か	縁辺か		内面光沢なし	
120	C4	28	複数	腹足綱	サザエ	殻軸、殻体破片		殻頂部2点あり（2個体分）	
121	C4	2.3	2	腹足綱	アワビ類か	縁辺か			
123	C4	0.2	1	腹足綱	不明	殻軸		破片	
124	A6	4.2	複数	腹足綱	オナジマイマイ科			イズモマイマイか、2個体分	
125	D4	0.4	1	腹足綱	カワニナ				
126	D4	0.1	1	腹足綱	イシマキガイか				
127	F23	3.6	4	腹足綱	ヒメタニシ		殻長35.8	3個体分	
128	C25	0.9	1	腹足綱	ヒメタニシ				
129	K18	22.5	複数	腹足綱	アワビ類				○
130	D6	2.8	1	腹足綱	アカニシ	殻軸		焼け（灰色）	
131	D6	0.4	1	腹足綱	カワニナ		殻長24mm程度		
132	D6	0.2	1	腹足綱	イシマキガイ				
133	D6	0.1	1	腹足綱	カワザンショウガイか				
134	B6	10.3	複数	腹足綱	サザエ			1個体分、破片	
135	B6	0.6	3	腹足綱	オナジマイマイ科			イズモマイマイか	
136	B6	0.2	1	腹足綱	イシマキガイか				
137	E27	2.1	1	腹足綱	テングニシか	殻軸		破片	○
138	E22	0.2	1	腹足綱	イシマキガイ				
139	A14	0.3	1	腹足綱	ヘソアキクボガイ		殻径11.87	欠損あり	○
140	B17	0.4	2	腹足綱	イシマキガイ				
141	H23	0.1	1	腹足綱	イシマキガイ			破片	
142	K20	0.6	1	腹足綱	アワビ類			破片	
143	C6	0.1	1	腹足綱	カワニナか	殻頂部		破片	
144	K17	0.2	1	腹足綱	サザエ/アワビ 類			破片	
145	M17	0.4	2	腹足綱	イシマキガイ				
146	B13	1.4	1	腹足綱	アカニシ			若貝	○
147	C18	0.2	1	腹足綱	カワニナ				
148	H21	0.4	1	腹足綱	イシマキガイ				
149	A7	1.6	6	腹足綱	オナジマイマイ科			イズモマイマイか	
150	A7	1.6	1	腹足綱	アカニシ	殻軸		火を受けて灰色	
151	A7	0.1	1	腹足綱	イシマキガイか				
152	C24	0.2	1	腹足綱	ヒメタニシ			若貝	
153	C24	0.1以下	1	腹足綱	不明	殻頂部		サザエか	
154	F14	0.4	1	腹足綱	ヒメタニシか	殻周縁部		破片	
155	L18	0.1以下	1	腹足綱	ヒメタニシか	殻軸部		破片	
156	L16	0.2	1	二枚貝綱	アサリか			破片	○
157	A15	0.2	1	腹足綱	イシマキガイか				
158	B16	0.9	1	腹足綱	サザエ	突起部		焼け(灰色)	
159	A11	0.2	1	腹足綱	不明	殻頂部			
160	D15	0.8	3	腹足綱	ヒメタニシ			1個体分	
161	L17	0.1	1	腹足綱	イシマキガイ			他と少し表面が異なる	○
162	F22	0.1以下	1	腹足綱	カワザンショウガイ科か		殻長4mm程度	小型	
163	F22	0.1以下	2	腹足綱	不明				
164	B7	0.2	2	腹足綱	イシマキガイ				
165	B7	0.1	1	腹足綱	カワザンショウガイ科か			162と同一種	
166	F22	0.1以下	39	腹足綱	ナタネガイ科			ヒメナタネガイか	
167	F22	0.1以下	7	腹足綱	ホソオカチョウジガイ				
168	F22	0.1以下	20	腹足綱	サツマオカチョウジガイか			オカチョウジガイやホソオカチョウジガイの若貝か	
169	F22	0.1以下	7	腹足綱	カワザンショウガイ科			ツブカワザンショウガイか	○

表４　若宮谷遺跡出土動物遺存体一覧（骨類）

NO.	出土地点	重量(g)	破片数	分類群	種名	部位	左右	部分	計測値(mm)	備考	写真
1	A6	12.3	1	軟骨魚綱	サメ類	椎骨			①32.98②36.51③18.97	大型	○
2	A16	0.9	1	軟骨魚綱	サメ類	遊離歯	不明		①19.73②19.17④4.00	メジロザメ科 （ドタブカ/メジロザメか）	○
3	C6	29.1	1	哺乳綱	イヌ	下顎骨	右	下顎体	4：107.54、5：101.18、7：68.77、8：63.39、10 ：32.36、11：33.20、13：19.55、14：18.79、19：21.47、20：18.65	*C～M_2(P_2欠歯)、下顎体内側面に切創があるが、解体痕かは不明	○
4	B8	18.4	1	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨		胸椎 （第8椎骨）		椎骨板化骨済、成獣	○
5	B8	1.2	1	哺乳綱	ニホンジカか	椎骨		突起部破片			
6	J19	1.1	1	硬骨魚綱	ボラ科	主鰓蓋骨	左	後方破片		関節部および上方部切断	○
7	A8	1.1	1	硬骨魚綱	マダイ亜科	前上顎骨	左	前方部欠損	①36.60③34.70⑥14.84 ⑦8.50⑧8.74⑪6.05⑫4.68	復元体長430～450㎜	○
8	A8	1.6	1	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	右	完形	④33.18⑤8.04⑦10.64⑧12.35	復元体長360㎜前後	○
9	A8	0.1	6	硬骨魚綱	不明	鱗					
10	A8	0.1	1	硬骨魚綱	不明	不明					
11	D24	0.4	1	硬骨魚綱	クロダイ属	角骨	左		①26.60②5.13③3.93 ④5.20⑤9.19⑩23.63	復元体長310㎜前後	○
12	B6	0.7	1	硬骨魚綱	クロダイ属	前鰓蓋骨	左		②4.05④15.61⑥5.41 ⑦9.72⑧4.58	復元体長410㎜前後	○
13	B6	0.5	1	硬骨魚綱	タイ科	第2臀鰭棘			関節部幅：7.24		
14	B7	0.1以下	4	硬骨魚綱	不明	鱗					
15	B7	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	不明					
16	B7	0.4	1	硬骨魚綱	タイ科	椎骨		腹椎		クロダイ属に似る	
17	B7	0.1	1	哺乳綱	不明	寛骨	左			ニホンイタチ標本よりやや小、側面欠損のため形態が不明瞭、クマネズミ属より大か	
18	C5	0.1	1	哺乳綱	モグラ科	尺骨	右		GL:22.02		○
19	C5	0.1	1	硬骨魚綱	クロダイ属	角舌骨	右		③5.15④-1:13.8④-2:18.36 ⑦2.78⑨2.63	復元体長315㎜前後	○
20	C5	0.1以下	1	硬骨魚綱	タイ科か	神経間棘					
21	C5	0.2	3	硬骨魚綱	タイ科	椎骨		腹椎2、尾椎1		クロダイに似る	
22	C5	0.1	1	哺乳綱	不明	肋骨				イタチ大	
23	A9	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	鱗					
24	A9	0.1	1	爬虫綱	ヘビ類	椎骨					○
25	A12	0.1	1	爬虫綱	ヘビ類	椎骨					
26	E7	0.1	1	両生綱	カエル類か	大腿骨か					
27	A11	0.1	1	爬虫綱	ヘビ類	椎骨					
28	D5	0.6	1	硬骨魚綱	クロダイ属	舌顎骨	左		②4.11④5.43⑤3.30 ⑨19.88	上端2カ所切断か 復元体長330㎜前後	○
29	D5	0.1	2	不明	不明	不明					
30	L17	0.1	1	硬骨魚綱	アジ科	椎骨				マアジに似る （体長185㎜標本より大）	○
31	D27	0.1	1	硬骨魚綱	ボラ科か	終尾骨				尾部棒状骨＋下尾骨	
32	D6	0.1以下	3	硬骨魚綱	不明	鱗					
33	D6	0.2	1	硬骨魚綱	クロダイ属	間鰓蓋骨	右				
34	B11	0.1	1	硬骨魚綱	スズキ属	肩甲骨	右				
35	J19	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	不明		破片			
36	F22	0.1	1	硬骨魚綱	不明	椎骨		破片		前後で切断か	
37	F22	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	鱗					
38	F22	0.2	9	硬骨魚綱	不明	不明		破片			
39	C6	1.6	複数	硬骨魚綱	不明	不明		鱗・棘含む			
40	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯		臼歯			
41	C6	0.1	1	硬骨魚綱	不明	椎骨				ヒラメ腹椎に似る	
42	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	椎骨		尾椎		ハタ科尾椎に似る 小型（体長288㎜標本より小）	
43	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	椎骨				イワシ類か	
44	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	椎骨				焼け（白色）	
45	C6	0.1以下	1	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨					
46	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	椎骨				焼け（灰色）	
47	C6	0.2	1	硬骨魚綱	タイ科	神経間棘					
48	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	尾部棒状骨か					
49	C6	0.1	1	哺乳綱	イヌ/イタチ科	遊離歯				タヌキ/アアグマ大 下顎前臼歯P2～4のいずれか	
50	F22	0.3	複数	不明	不明	不明				多くは魚類破片か	
51	F22	0.1以下	2	爬虫綱	ヘビ類	椎骨					
52	F22	0.1以下	8	硬骨魚綱	イワシ類か	椎骨				体長168㎜マイワシ標本より小 （大きさは体長80㎜のムギツク大）	
53	F22	0.1以下	2	硬骨魚綱	不明	椎骨		腹椎2			
60	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	ハゼ科	前上顎骨	右			マハゼか	○
61	C6	0.1以下	2	哺乳綱	ネズミ科	遊離歯	左右	下顎第1後臼歯		L:3mm程度あり クマネズミ属か	

NO.	出土地点	重量(g)	破片数	分類群	種名	部位	左右	部分	計測値(mm)	備考	写真
62	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	ニシン科	椎骨		尾椎		サッパ、ウルメイワシに似る	○
63	C6	0.1以下	2	硬骨魚綱	ニシン科	椎骨		腹椎			
64	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	ハゼ科か	椎骨					
65	C6	0.1	16	硬骨魚綱	不明	椎骨					
66	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	コイ科	咽頭歯				フナ属か	○
67	C6	1.1	複数	不明	不明	不明				魚類破片多い、植物片含む	
68	C6	0.1以下	4	哺乳綱	小型哺乳類	中手骨・基節骨・中節骨				イタチ大	
69	C6	0.1	2	硬骨魚綱	タイ科	遊離歯		犬歯		一方焼け（黒灰色）	
70	C6	0.1	1	硬骨魚綱	コイ科	咽頭歯				オイカワ/カワムツ大	
71	C6	0.1以下	6	硬骨魚綱	不明	棘				小型魚類	
72	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	副蝶形骨					
73	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	基後頭骨					
74	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	コイ科	咽頭歯				フナ属	○
75	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	ハゼ科	椎骨		腹椎			
76	C6	0.1以下	4	硬骨魚綱	ニシン科	椎骨					○
77	C6	0.1以下	3	哺乳綱	ネズミ科	遊離歯		下顎切歯、上顎切歯2			
78	C6	0.1以下	1	哺乳綱	ネズミ科	尺骨	左			頭胴長66㎜ハツカネズミと同大	
79	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	ハゼ科	椎骨		第1椎骨か			○
80	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	コイ科	棘		背鰭/臀鰭			○
81	C6	0.1以下	1	軟骨魚綱か	トビエイ類	歯板か					
82	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	ウナギ/アナゴ科か	歯骨/前上顎骨か					
83	C6	0.1以下	2	硬骨魚綱	不明	椎骨					
84	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	尾部棒状骨					
85	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	椎骨		腹椎			
86	C6	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	烏口骨か				焼け（灰色、黒色）	
87	C6	0.1以下	2	硬骨魚綱	不明	棘					
88	C6	0.1以下	1	両生綱	カエル類	椎骨					○
89	C6	0.1以下	1	爬虫綱	カメ類	椎骨板か				カエル類の椎骨突起部の可能性も	
116	B14	0.2	1	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	左		⑦5.66⑧6.03⑬3.69	復元体長210㎜前後	
117	B14	0.1以下	1	硬骨魚綱	不明	鱗				タイ科か	
122	C4	0.1	1	硬骨魚綱	不明	不明				破片	

＊イヌの計測番号はDriesch(1976)、魚類の計測位置番号については第42図を参照。



第 42 図　魚類の計測位置説明図

第６章　総括

朝酌矢田地区共同墓地整備事業に先立ち、試掘調査および本発掘調査を実施した。調査の結果、若宮谷遺跡は大橋川が最も川幅を狭めるところの北側低丘陵上に所在する、縄文時代後期から中世後期に至る複合遺跡であることを確認した。本章ではこれらの調査成果に基づき、第１節では若宮谷遺跡における遺構と各期の出土遺物の様相について整理して中世後期の土師器･陶磁器の変遷を提示し、第２節では若宮谷遺跡周辺の旧地形について述べる。いずれも当遺跡の西側隣接地に所在する若宮谷遺跡（県調査Ａ・Ｂ区）の調査成果を含めながら、若干の考察を加えることでまとめとしたい。

第１節　若宮谷遺跡の遺構と出土遺物の様相

若宮谷遺跡の発掘調査では、C1 区の第１遺構面で杭列 SA01 と道路 SF01、第２遺構面で貝塚 SM01 ～ 05 を検出したが、今回の調査ではこれらの中世後期の遺構以外に明確な遺構は検出していない。C1 ～ 4 区の各調査区では埋没谷を検出しており、この埋没谷に堆積する土壌から縄文時代後期～古代の遺物が出土する遺物包含層を確認した。

以下では、当遺跡の遺構と出土遺物に主眼を置きながら時代ごとの様相について整理し、遺物出土量の多少からピークとなる時期を示すことで、断続的に展開する複合遺跡としての評価を試みる。

（１）若宮谷遺跡の検出遺構の時期と様相

C1 区の第１遺構面で検出した杭列 SA01 と道路 SF01 は、同一時期に併存していたものと考えている。SF01 から出土した土師器坏（第 15 図 15-1 ～ 3）は 15 世紀前半よりもやや古い時期を示しているが、SF01 は第２遺構面の貝塚 SM04・05 と重複する位置で検出しているため、厳密には SF01 よりも下層の遺物を SF01 出土遺物に含めている可能性がある。また、第２遺構面の貝塚を埋め立てて第１遺構面の平坦面が形成されていることから、古い時期の土師器坏は混入品の可能性も考えられる。一方、SF01 から出土した貿易陶磁器と国産陶磁器は 15 世紀前半～後半の時期に限定されるという点から、第１遺構面の主体となる時期は 15 世紀前半～後半に位置付けておきたい。

第２遺構面で検出した貝塚 SM01 ～ 05 の時期は、出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えている。そして、混貝土層断面の切り合い関係と出土遺物によって、貝塚の新旧関係を確認することが可能であった。当遺跡における貝塚の新旧関係は、SM03･04･05（旧）➡ SM02 ➡ SM01（新）を想定し、廃棄場所は C1 区内の南側から北側へ向かって移動していることが明らかとなった。

（２）若宮谷遺跡の出土遺物の概要（表 5）

若宮谷遺跡において、今回調査および県調査で出土した主な遺物を時期および器種別に分類して表 5 に示した。表 5 の網フセは遺物出土量の多少を示しており、濃い網フセ部分は遺物が多く出土した場合を、薄い網フセ部分は遺物が少量である場合をそれぞれ提示している。

一見して、古墳時代前期～中期前葉・古代・中世後期の３時期に遺物出土量のピークをもっていることが分かる。一方で、弥生時代前期・古墳時代中期後葉～後期・中世前期の遺物は認められず、この時期の集落は調査範囲外の周辺部で営まれていたことが想定される。

縄文時代後期～晩期の様相

若宮谷遺跡では、縄文時代後期～晩期の遺物が初現となる。C1 区の埋没谷の地山面直上に堆積する砂礫層から擦り消し縄文の鉢が出土したほか、県調査 B4 区では谷部最下層に堆積する礫層から縄文時代後期～晩期の鉢や石器が出土している。

当遺跡から約 300m東に所在するシコノ谷遺跡は、山塊からの支谷が大橋川に向かう谷地に位置する遺跡で、ここでは土石流により堆積した砂礫層から縄文時代後期～晩期を中心とする突帯文土器や石器が出土している。シコノ谷遺跡では気候変動により海水面の上昇が始まったことで礫層が厚く堆積したものと考えられている。また、当遺跡から約 950m 東に所在する福富松ノ前遺跡は、シコノ谷遺跡と同様な谷地に位置する遺跡で、ここでは流路に堆積した砂礫層から縄文時代晩期を中心とする突帯文土器や石器が出土している。縄文時代後期～晩期は、大橋川北岸の当地域周辺において小規模な谷底堆積低地が開発され、集落が形成されていた時期として捉えられる。

弥生時代中期～後期の様相

当遺跡における弥生時代の遺物は希薄である。弥生時代前期～中期前葉（松本編年Ⅰ～Ⅱ様式）に相当する遺物は出土しておらず、この時期は当地における人間活動の一時断絶が認められる。

弥生時代中期中葉以降になると C1 ～３区で弥生時代中期中葉～後期（松本編年Ⅲ～Ⅴ様式）に相当する甕・壺・低脚坏などが少量確認できるようになる。遺物は埋没谷の地山面直上に堆積する砂礫層から出土している。この中で出土比率の高い甕に注目すると､口径 15 ～ 18㎝前後の中型品が多く、文様は口縁端部の凹線文を基本としている。遺物の出土状況から、調査区北側の谷筋上方からの流れ込みによるものと想定されるが、当該期の一般的な集落立地の在り方から推定すれば、調査区外の丘陵縁辺部あるいは低位部に集落が営まれていた可能性が考えられる。

古墳時代前期～中期前葉の様相

遺物出土状況と県調査 B4 区の調査成果により、古墳時代前期～中期前葉に入っても当遺跡周辺では引き続き集落が営まれていたものと想定される。遺物は C1 ～３区で一定量の出土を確認しており、特に C2 区では古墳時代前期中葉（草田７期）の壺がほぼ完形で出土するなど、遺跡内での遺物出土量の増加が認められる。当遺跡では、埋没谷の遺物包含層から古墳時代前期～中期前葉（草田６～７期・松山編年Ⅰ～Ⅱ期）に相当する土師器壺・甕・高坏・低脚坏が出土している。

県調査 B4 区では、調査区内北側に位置する丘陵裾の中段から古墳時代前期の竪穴建物を検出しており、大橋川沿いの低丘陵を当該期の居住域として推定されている。竪穴建物の周溝から出土した遺物には土師器壺・甕・高坏・低脚坏があり、当遺跡の出土遺物と同様の遺物組成を示すという点から集落を拡大させていた可能性や隣接する遺跡間での関連性が窺える。

古墳時代終末期～奈良・平安時代（7 世紀後半～ 9 世紀前半）の様相

遺構と遺物が認められない古墳時代中期後葉～後期の空白期を挟み、古墳時代終末期（7 世紀後半）になると再び遺物の出土が確認できるようになる。遺物は県調査 B3・4 区で、古墳時代終末期（大谷編年出雲 4・5 期）に相当する須恵器高坏が出土している。当遺跡では、C1 ～３区で一定量の出土を確認しており、埋没谷の遺物包含層から奈良・平安時代（大谷編年出雲６～８期・出雲国府編

年第１～５型式）に相当する須恵器無高台坏・高台付坏・蓋坏・高台付皿・高坏・長頸壺・短頸壺・甕などが出土している。

中世後期（14 世紀後半～ 15 世紀後半）の様相

中世前期の空白期を挟み、中世後期（14 世紀後半～ 15 世紀後半）になると C1 区から県調査 B4 区にかけて集落が営まれるようになる。当該期の集落は、県調査 B4 区を中心として谷に接する丘陵裾の平坦地に展開していたものと考えられる。当遺跡の C1 区では谷部分が該当し、ここでは 14 世紀後半～ 15 世紀前半の貝塚 SM01 ～ 05、15 世紀前半～後半の杭列 SA01 と道路 SF01 を検出した。

遺物は 14 世紀後半～ 15 世紀後半の中世土師器と陶磁器のほか、石製品・金属製品・銭貨・木製品・動物遺存体などの遺物が出土している。中世土師器と陶磁器の変遷については後述するが、SF01 出土遺物には土師器の内外面に梵字または記号が書かれている墨書土師器が２点含まれており、これらは C1 区の調査区外に所在する「水神」に伴う祭祀に関連した遺物の可能性を考えている。

表５　若宮谷遺跡出土遺物一覧（県調査区の出土遺物を含む）

時代		松本編年	草田編年	松山編年	大谷編年	国府編年	若宮谷遺跡出土遺物
縄文時代	後期						縄文土器（鉢）
	晩期						縄文土器（鉢）【県調査区】
弥生時代	前期	Ⅰ－１					
		Ⅰ－２					
		Ⅰ－３					
		Ⅰ－４					
	中期	Ⅱ－１					
		Ⅲ－１					弥生土器（甕）
		Ⅲ－２					
		Ⅳ－１					弥生土器（壺・甕）【県調査区】
		Ⅳ－２					
	後期	Ⅴ－１	草田１期				弥生土器（甕）
		Ⅴ－２	草田２期				弥生土器（甕）
		Ⅴ－３	草田３期				弥生土器（甕）
		Ⅴ－４	草田４期				弥生土器（甕・低脚坏）
			草田５期				
古墳時代	前期		草田６期	Ⅰ期			土師器（壺・甕・高坏・低脚坏）
			草田７期				
	中期			Ⅱ期			土師器（壺・甕・高坏）
				Ⅲ期			
				Ⅳ期	出雲１期		
	後期				出雲２期		
					出雲３期		
	終末				出雲４期		須恵器（高坏）【県調査区】
					出雲５期		
古代					出雲６a 期		須恵器（高坏）
					出雲６b 期	第１型式	須恵器（蓋坏）
					出雲７・８期	第２型式	須恵器（蓋坏）
						第３型式	須恵器（無高台坏・長頸壺）
						第４型式	須恵器（無高台坏・高台付皿）
						第５型式	須恵器（高坏・短頸壺）
						第６型式	
中世	前期					第７型式	
						第８型式	
						第９型式	
						第 10 型式	
	後期						中世陶磁器（白磁・青磁） 中世土師器（坏・皿）

※網フセは遺物の多少を示す。（濃い網フセ部分＝遺物の出土量が多い・薄い網フセ部分＝遺物の出土量が少ない）

（３）若宮谷遺跡における中世後期の土師器と陶磁器の変遷

ここでは今回の調査で出土した中世後期（14 世紀後半～ 15 世紀後半）の土師器と陶磁器の変遷についてまとめておきたい。ここで扱う土師器坏・皿は、県調査の若宮谷遺跡発掘調査報告書に掲載されている土師器の変遷を年代の指標に用いている[6]。

第 43 図に掲載した遺物は、C1 区の第 1 遺構面および第 2 遺構面出土遺物のうち、形態の変化や時期の様相を捉える上で代表的な土師器と陶磁器を抽出した。以下では、14 世紀後半・15 世紀前半・15 世紀後半の 3 つの時期区分を設けて、各時期における土師器の形態的な変遷を中心に考察する。

14 世紀後半

土師器坏　14 世紀後半の土師器坏は、逆台形状で胎土は橙色～橙褐色を呈する。口径と底径の差が少なく、口縁部を開き気味におさめる。法量は口径 12.4 ～ 12.9㎝、器高 3.6 ～ 4.6㎝を測る。土師器坏 15-3 は体部の立ち上がりの傾斜が急で、底部から体部下半は直線的である。土師器坏 20-4 は体部の立ち上がりの傾斜が急だが、15-3 と比べて器高が 1.0㎝程度低くなる。出雲平野出土中世土師器分類[7] 5 期古段階に属し、当該期の土師器坏は全体的に器高が低くなり、椀形から皿形の形状へと移行する傾向がみられる時期に相当する。

15 世紀前半

土師器坏・皿　15 世紀前半の土師器坏は、14 世紀後半の坏と比べて器高が低くなり、胎土は褐色～橙褐色を呈する。法量は口径 11.8㎝、器高 2.9㎝を測る。土師器坏 15-6 は体部の立ち上がりが直線的で器高が低く、口縁部を外反させる。土師器皿 15-11・12 は、底部周縁をややしぼり、口縁部を僅かに内湾気味に直立させている。法量は口径 7.4㎝、器高 1.8 ～ 2.2㎝を測る。出雲平野出土中世土師器分類 5 期新段階に属し、当該期の土師器皿は扁平な皿が採用されなくなった時期に相当する。

陶磁器　15 世紀前半の貿易陶磁器は、中国天目・中国白磁・中国青磁が出土している。20-2 は天目碗で、内外面に黒色～茶色を呈する釉薬を施し、高台は露胎。14-1 は白磁の端反碗で、森田編年白磁碗 B 群に相当する。14-4 は青磁の雷文帯碗で、上田分類龍泉窯系碗 C2 類に相当する。国産陶磁器は、瀬戸・美濃陶器が出土している。14-12 は卸目付大皿で、古瀬戸編年後期様式Ⅲ期に相当する。

15 世紀後半

土師器坏・皿　15 世紀後半の土師器坏 15-7・8 は、口径が大きく広がり、体部の立ち上がりが直線的で器高が低い。器壁は全体的に極めて薄く、胎土は白色～灰白色を呈する[8]。法量は口径 12.6 ～ 15.7㎝、器高 3.0㎝を測る。土師器皿 15-13・14 は、体部の立ち上がりが直線的で低く、器壁が薄いという点で坏と同様な形態をもつ。出雲平野出土中世土師器分類 6 期古段階に属し、当該期の土師器坏は器高がさらに低くなり、皿形への指向が顕著になる時期に相当する。

陶磁器　15 世紀後半の貿易陶磁器は、中国青磁が出土している。14-3 は青磁の蓮弁文碗で、上田分類龍泉窯系碗 B2 類に相当する。14-6・8・9 は青磁の端反碗で、上田分類龍泉窯系碗 D 類に相当する。国産陶磁器は、備前擂鉢が出土している。14-10 は底部から口縁部への拡張が明確化し、下角の垂下を僅かに突出させる特徴をもつ。15 世紀中頃、乗岡編年中世 4b 期に相当する。14-11 は口縁部の立ち上がりが台形状で、真上に向かう特徴をもつ。15 世紀中頃～後半、乗岡編年中世 5a 期に相当する。

年代	土師器坏	土師器皿	貿易陶磁器	国産陶磁器
14 世紀 後半	15-3 20-4	出土無し	出土無し	出土無し
15 世紀 前半	15-6	15-11 15-12	20-2 天目碗 14-1 白磁端反碗 14-4 青磁雷文帯碗	14-12 瀬戸・美濃大皿
15 世紀 後半	15-7 15-8	15-13 15-14	14-3 青磁蓮弁文碗 14-6 青磁端反碗 14-8 青磁端反碗 14-9 青磁端反碗	14-10 備前擂鉢 14-11 備前擂鉢

第 43 図　若宮谷遺跡における中世後期の土師器・陶磁器変遷図（遺物 S=1：6）

第２節　若宮谷遺跡周辺の旧地形について

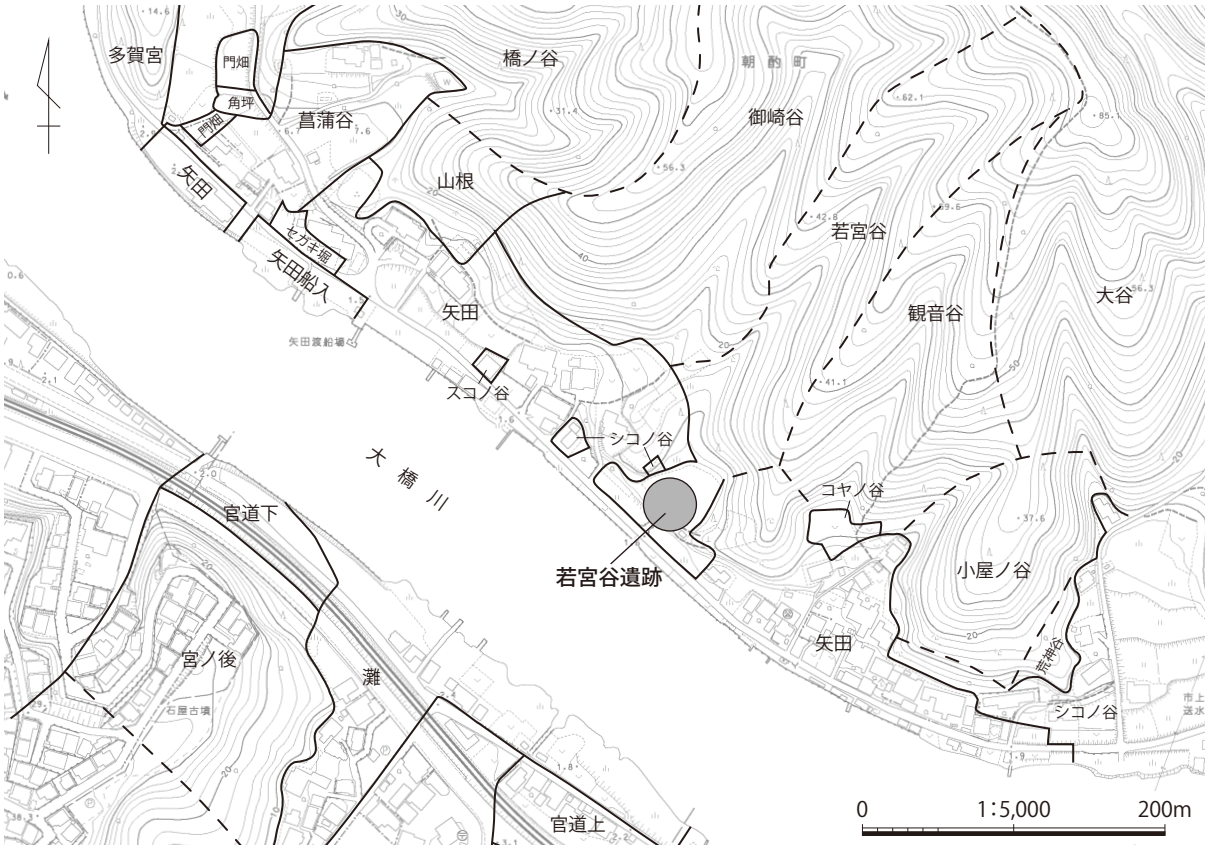
今回の調査で検出した谷地形の復元を主体として、若宮谷遺跡周辺の旧地形について検討を加えたい。以下では、（1）若宮谷遺跡周辺の小字名と景観・（2）谷地形の復元・（3）中世後期の貝塚と居住域の項目に分けて、各様相についてまとめておきたい。

（１）若宮谷遺跡周辺の小字名と景観（第 44 図）

若宮谷遺跡は、島根半島と本土とを分かつ宍道湖と中海を結ぶ大橋川が最も川幅を狭めるところの北岸にあたる、標高約 115mの独立丘陵の南側山麓部に立地している。第 44 図に若宮谷遺跡周辺の小字名を図示した[9]。若宮谷遺跡周辺の旧地形に関連する小字名を挙げると、当遺跡は「若宮谷」で、西隣に「御崎谷」、東隣に「観音谷」がみえる。若宮谷遺跡周辺の丘陵には、この他にも「○○谷」の小字名が 10 箇所以上みられることから、複数の谷地形が入り組む地形であったことが想定される。

一方で、丘陵南側の大橋川北岸には川岸に沿って「矢田」「矢田船入」「セガキ堀」の小字名がみられる。「矢田船入」の東側には、令和２（2020）年度に島根県教育委員会による発掘調査で船着き場や荷揚場と想定されている護岸状石敷き遺構を検出した朝酌矢田Ⅱ遺跡が所在しており、この場所は出雲国風土記に記載される「朝酌促戸（あさくみのせと）」（島根郡側）の有力な推定地となっている。

若宮谷遺跡は朝酌矢田Ⅱ遺跡から南東へ約 200m 離れた場所に位置し、ここでは古代の建物跡などの遺構は検出していないが、7 世紀末～ 9 世紀前半の須恵器坏・皿・高坏などの日用品、竈や土製支脚などの煮炊き具、土錘や釣針などの漁撈具が出土している点から付近に集落の存在を窺うことができ、当遺跡は「朝酌促戸」が所在していた範囲内または近接地にあたるものと想定している。



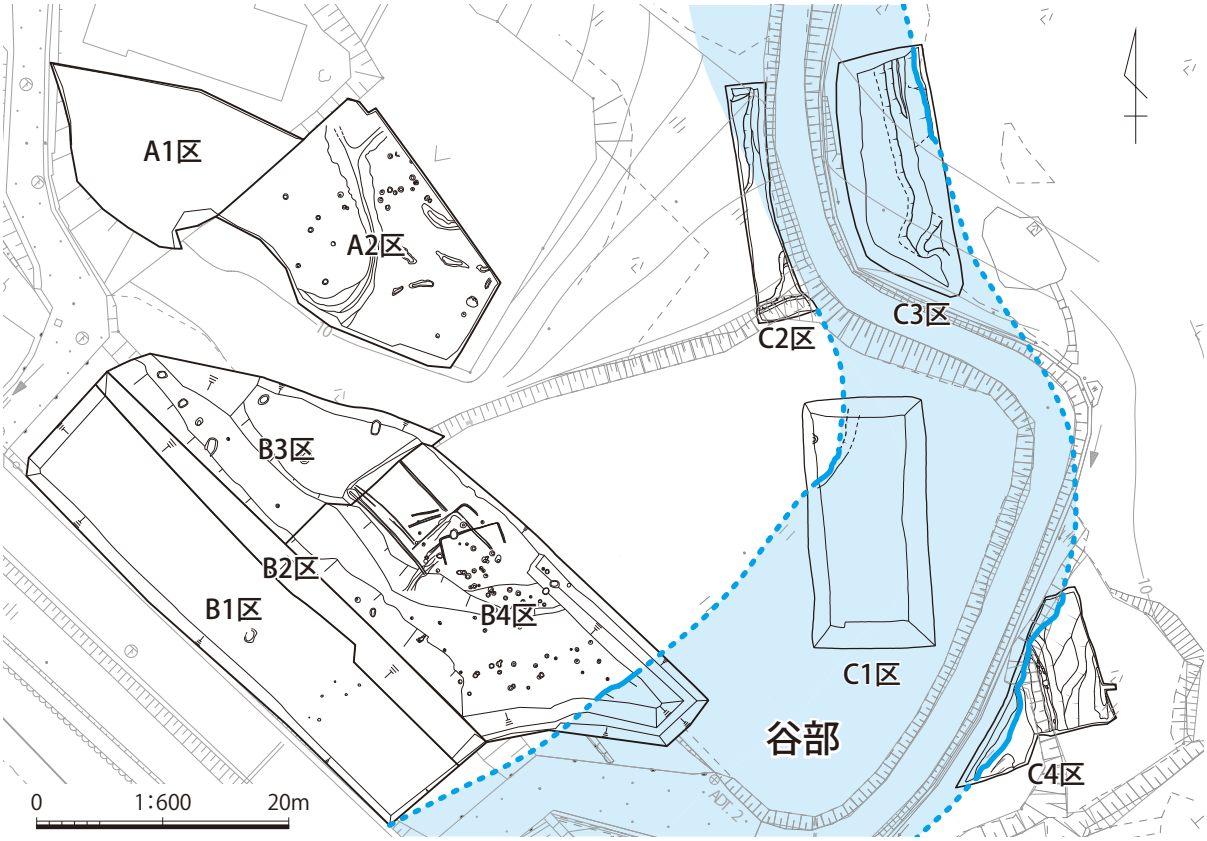
第 44 図　若宮谷遺跡周辺の小字名

（２）谷地形の復元（第 45 図）

ここでは今回調査区（C1 ～ 4 区）と西側隣接地に所在する県調査区（A1 ～ 2・B1 ～ 4 区）の調査成果を含めて、谷地形の復元を試みる。今回の発掘調査では、C1 ～ 4 区の地山検出面で谷の縁辺部や落ち込みを検出し、規模は幅 15 ～ 20m、総延長約 80m、深さ最大 3.3m を測る谷であることが判明した。第 45 図に図示したように、検出した谷の平面的な範囲は、発掘調査対象範囲の北側に位置する C2・3 区から南側へ向かい、C1 区と C4 区の間で南西側へ緩やかに湾曲しながら県調査 B4 区の南端を通り、さらに南西側にある大橋川へ向かって下る谷であることが明らかとなった。

次に土層断面から谷の埋没状況を捉えると、最下層に堆積する礫層・砂礫層から縄文時代後期～弥生時代後期の土器や石器が出土し、これらはローリングを受けて摩滅した遺物が多く、谷筋上方から礫を巻き込みながら堆積したものと考えられる。なお、県調査 B4 区では礫層から縄文時代後期～晩期の土器や石器が出土しており、大橋川に近接する谷部の最下層に当該期の遺物が多く分布することを示している。礫層直上に堆積する粘質土からは、古墳時代の土師器や古代の須恵器が出土し、この時期の谷は谷筋上方から徐々に埋没していたものと考えられる。

中世後期の 14 世紀後半になると C1 区周辺の谷は貝塚として利用されるようになり、廃棄場所の移動に伴うものと想定するが、15 世紀前半には貝塚の機能が断絶している。その後の段階で、貝塚を粘質土で覆うと同時に谷を埋め立てて平坦面を造り出し、この上面に杭列 SA01 と両側側溝を伴う道路 SF01 を構築している。このような変遷の中で、谷は縄文時代後期を始点として、その後徐々に埋まっていくが、最終的な埋没時期は中世後期頃と考えている。



第 45 図　谷地形の復元

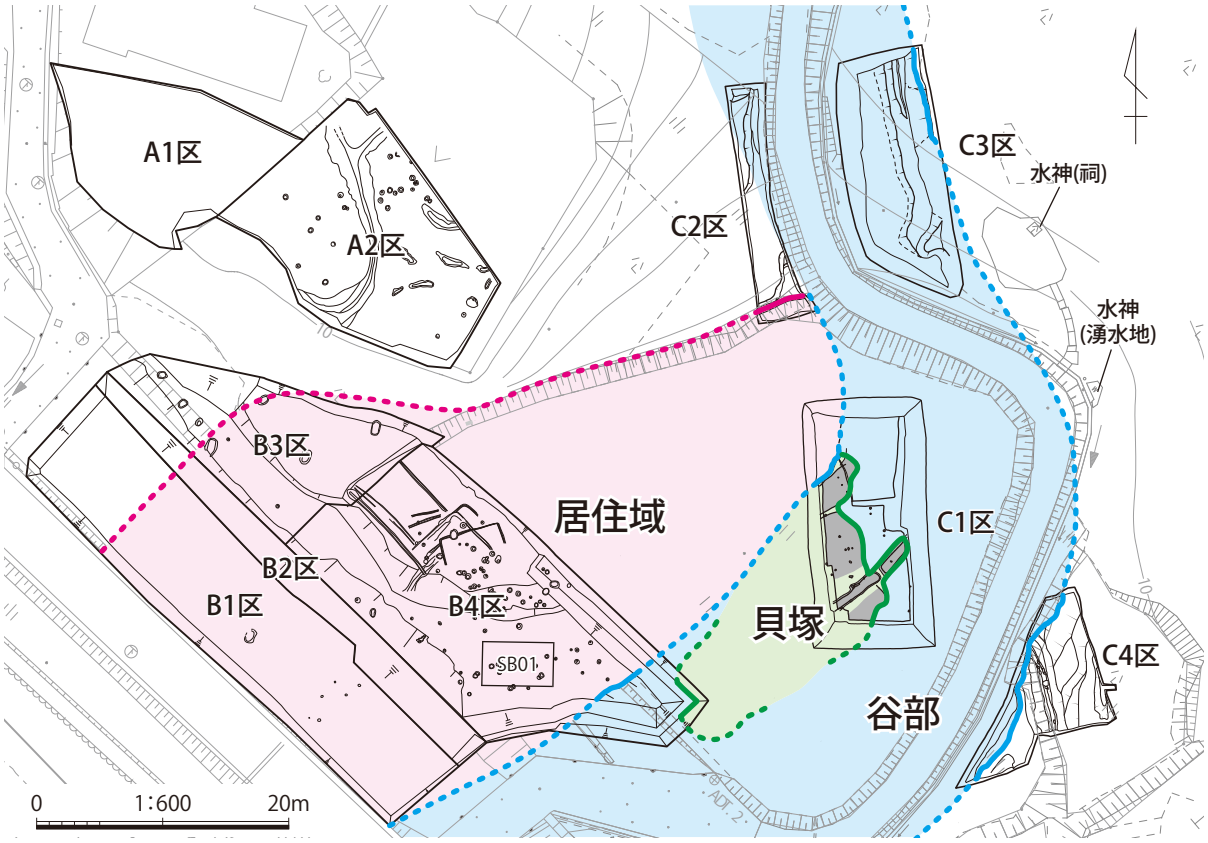
（3）中世後期の貝塚と居住域（第 46 図）

遺構と遺物が認められない中世前期を挟み、中世後期になると当遺跡において本格的に集落が営まれるようになる。第 46 図に中世後期の貝塚と居住域の推定範囲を図示した。県調査 B4 区の調査報告によると、「B4 区内南側の平坦面には桁行 3 間×梁行 2 間の規模をもつ掘立柱建物 SB01 が構築され、SB01 を覆う遺物包含層から 14 世紀後半～ 15 世紀後半の土師器と陶磁器が出土した」との報告がなされており、SB01 の時期も同様の時期と考えられている。この SB01 を構築している丘陵裾の平坦地周辺が、当該期の集落の居住域となっていたことが想定される。

B4 区から東側にあたる C1 区では、ヤマトシジミとサルボウを中心とした貝類などの食物残滓（ゴミ）が大量に廃棄された貝塚 SM01 ～ 05 を検出し、居住域に隣接する谷を廃棄場所として利用していたことが考えられる。検出した貝塚は、平坦地上の集落に居住した人々が集落で出た食物残滓を谷に投棄することによって形成されたもので、貝塚と居住域は区別されていたものと考えている。

また、C1 区で検出した貝塚 SM01 ～ 05 の貝層プランの検出範囲は、平面的な視点から谷の西寄りにまとまった貝層の分布がみられるため（第 5 章第 40 図）、谷よりも西側に展開していた居住域側から投棄されたものと理解ができる。B4 区南端付近では土層断面から混貝土層が検出されており、C1 区西側から B4 区南端にかけて貝塚が広がっていたものと推定する。

そして、B4 区の中世後期の遺物包含層から出土した遺物には土錘や釣針などがあり、これらの遺物から貝塚を形成した集団は、当該期の若宮谷遺跡周辺において水産資源の獲得に重点を置いていた集団であったことが想定される。



第 46 図　中世後期の貝塚と居住域の推定範囲

第３節　結語

以上のように、若宮谷遺跡の調査成果と出土遺物の様相について概観してきた。これらの成果を踏まえ、当遺跡が立地する大橋川北岸の狭隘な谷地と丘陵上には、縄文時代後期を遺跡形成の始点とし、その後の古墳時代前期～中期前葉・古代・中世後期の３時期にピークをもちながら断続的に展開する複合遺跡として評価を行った。

今回の調査では、C1 区で中世後期に位置付けた２時期の遺構面が遺存していることを確認し、第１遺構面では杭列 SA01・道路 SF01、第２遺構面では貝塚 SM01 ～ 05 を検出した。この２時期の遺構面で検出した遺構の前後関係は、谷を利用して形成された第２遺構面の貝塚 SM01 ～ 05 が一定期間機能した後、廃絶時には粘質土で埋め立てて新たに平坦面を造り出し、この上面に第１遺構面の杭列 SA01 と道路 SF01 を構築するという変遷を辿る。

一方、出土遺物は C1 区の第１～２遺構面を通して 15 世紀前半の遺物が混在している状況である。その理由として、本章第１節で先述したように、第１遺構面の SF01 は第２遺構面の SM04・05 と重複する位置で検出した遺構で、第２遺構面の貝塚を埋め立てる際に第１遺構面に遺物が混入した可能性を考えている。また、遺物の時期区分については、第１遺構面で出土した陶磁器が 15 世紀前半～後半の時期に限定されるという点、第２遺構面では 15 世紀後半の陶磁器が出土していないという点を年代比定の根拠としている。これらの状況から、遺構の前後関係と出土遺物から想定される遺構面の時期は、第１遺構面が 15 世紀前半～後半、第２遺構面が 14 世紀後半～ 15 世紀前半のやや幅をもつ時期を想定している。C2 区と C3 区では、埋没谷に堆積する縄文時代後期～古代（奈良・平安時代）の遺物包含層から多くの遺物が出土し、各時期の周辺環境を想定する上で貴重な資料を得ることができた。

各時期の集落に関わる建物跡や付属施設などの遺構については、今回の調査では検出できなかったが、遺物包含層から出土した遺物は当遺跡付近に集落が存在していたことを如実に物語っている。しかしながら、朝酌地域に存在していたことが想定される、集落域の中枢的位置にあった拠点集落の場所や集落形態などの解明については今後の課題である。

そして、C1 区で検出した中世後期の貝塚のまとまった資料が得られたことは、今回の大きな調査成果のひとつとなった。県調査 B4 区南端付近の壁面で検出した貝塚を含めて今回検出した貝塚を整合すると、貝塚の位置は居住域の南東側に近接する谷の東西約 10m ×南北約 25m の範囲に分布していることが明らかとなった。また、今回の調査では貝塚に新旧があることを確認し、C1 区内においては、南側から北側へ向かって廃棄場所を移動しながら形成された貝塚であることが分かった。なお、貝塚の時期についても県調査の報告では 14 世紀後半～ 15 世紀後半とされていたが、今回の調査成果から 14 世紀後半～ 15 世紀前半に限定することが可能となった。これらの調査成果から、当遺跡は大橋川沿岸に所在するという立地環境において、周辺には豊かな動植物資源や水産資源の獲得に適した陸域や水域があり、その恩恵を受けた人々が活動していた中世後期の生活の一端を示すことができた。今回の調査成果を含めて、今後は朝酌地域における調査・研究が進展することにより、その成果を蓄積することで、当地域の歴史がより具体的に解明されていくことを期待したい。

註

(6)　第 43 図に提示した若宮谷遺跡における中世後期の土師器・陶磁器変遷図は、島根県教育委員会　2021 『若宮谷遺跡・シコノ 谷遺跡』の第６章　総括　第１節若宮谷遺跡に掲載されている、第 164 図若宮谷遺跡土師器変遷図を年代の指標に用いた。

(7)　高橋 周　2013 「出雲平野における中世土師器の様相」『山陰中世土器研究 1』山陰中世土器検討会から引用。この論考では、出雲平野の発掘調査で出土した中世土師器が扱われており、土師器坏と皿の共伴事例を抽出の基本としている。時期は 11 ～ 16 世紀を対象として、０～６期までの土師器坏と皿の分類と編年案が提示されている。

(8)　島根県教育委員会　2021 『若宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』の第６章　総括　第１節若宮谷遺跡の報告では、15 世紀後半の土師器坏について、「器壁が薄く胎土が白い特徴は、今後の検討を必要とするが、在地土師器の中での変化ではなく山口県大内式などの外からの影響も考慮する必要がある。」と指摘されている。

(9)　若宮谷遺跡周辺の小字名は、島根県古代文化センター 2000『出雲国風土記の研究Ⅱ　島根郡朝酌郷調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書７ の「第３部景観復元の試み　6. 朝酌の地名と地理　P373」を参考とした。この報告書に掲載されている小字地図は、「明治 22 年に作成された地籍図を基礎資料として作成したものである。風土記時代の歴史景観を復元する際の手がかりになると考え、あえて小字地名の間に境界線を引いたが、これはあくまでもひとつの試案であることをおことわりしておく。」と明記されている。

参考文献

出雲市教育委員会　1996 『上長浜貝塚』

山陰中世土器検討会　2008 『山陰地方における備前焼』 第７回山陰中世土器検討会資料集

山陰中世土器検討会　2010 『山陰地方における瀬戸・美濃陶器』 第９回山陰中世土器検討会資料集

山陰中世土器検討会　2013 『山陰中世土器研究１－西尾克己さん還暦記念論集－』

島根県古代文化センター　2000 『出雲国風土記の研究Ⅱ　島根郡朝酌郷調査報告書』

島根県古代文化センター　2016 『古代文化研究　第 24 号』

島根県教育委員会　1999 『姫原西遺跡』

島根県教育委員会　2013 『史跡出雲国府跡－９　総括編－』

島根県教育委員会　2021 『若宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』

中国四国前方後円墳研究会　2015 『前期古墳編年を再考するⅡ－古墳出土土器をめぐって』 第 18 回研究会資料集

頓原町教育委員会　2001 『森Ⅴ遺跡』

奈良文化財研究所　2013 『発掘調査のてびき　各種遺構調査編』 同成社

日本貿易陶磁研究会　1998 『貿易陶磁研究　第１号－第５号（合本）復刻版』 六一書房

日本貿易陶磁研究会　2002 『中世後期における貿易陶磁器の様相』 日本貿易陶磁研究集会中国大会資料集

松江市教育委員会・松江市スポーツ・文化振興財団　2018 『魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡』

松江市・松江市スポーツ・文化振興財団　2019 『朝酌矢田遺跡』

松江市・松江市スポーツ・文化振興財団　2020 『福富松ノ前遺跡』

松江市史編纂委員会　2012 『松江市史　史料編２　考古資料』

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器・中世土師器（1）

※法量のカッコ書きの数値は、復元または残存法量を示す

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量（cm）			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
14-1	C1 区	SF01	白磁	端反碗	(12.2)	—	(3.2)	外　透明釉 内　透明釉	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀前半 森田編年白磁碗 B 群
14-2	C1 区	SF01	白磁	碗	—	—	(6.3)	外　透明釉 内　透明釉	胎土　密 焼成　良好	外　白色 内　白色	15 世紀前半
14-3	C1 区	SF01	青磁	蓮弁文碗	—	—	(3.7)	外　緑釉、蓮弁文 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　緑色 内　緑色	15 世紀後半 上田分類龍泉窯系碗 B2 類
14-4	C1 区	SF01	青磁	雷文帯碗	15.1	5.6	7.0	外　緑釉、雷文帯、蓮弁文 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　緑色 内　緑色	15 世紀前半～中頃 上田分類龍泉窯系碗 C2 類
14-5	C1 区	SF01	青磁	端反碗	(15.4)	—	(2.8)	外　緑釉 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　明緑色 内　明緑色	15 世紀中頃～後半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
14-6	C1 区	SF01	青磁	端反碗	(13.8)	—	(2.8)	外　緑釉、漆継ぎ 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　淡緑色 内　淡緑色	15 世紀中頃～後半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
14-7	C1 区	SF01	青磁	端反碗	(13.5)	—	(2.8)	外　緑釉 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　淡緑色 内　淡緑色	15 世紀中頃～後半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
14-8	C1 区	SF01	青磁	端反碗	(14.1)	—	(4.0)	外　緑釉 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　淡緑色 内　淡緑色	15 世紀中頃～後半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
14-9	C1 区	SF01	青磁	端反碗	—	5.3	(2.1)	外　緑釉 内　緑釉、草花文陰刻	胎土　密 焼成　良好	外　水色 内　水色	15 世紀中頃～後半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
14-10	C1 区	SF01	陶器	擂鉢	(26.6)	(12.2)	10.8	スリ目単位 10 本	胎土　密 焼成　良好	外　赤褐色 内　灰褐色	15 世紀中頃 備前擂鉢乗岡編年中世 4b 期
14-11	C1 区	SF01	陶器	擂鉢	(28.2)	—	(6.9)	スリ目単位 8 本	胎土　密 焼成　良好	外　赤褐色 内　赤褐色	15 世紀中頃～後半 備前擂鉢乗岡編年中世 5a 期
14-12	C1 区	SF01	陶器	卸目付大皿	(26.0)	—	(4.4)	外　黄灰釉 内　黄灰釉	胎土　密 焼成　良好	外　黄灰色 内　黄灰色	15 世紀前半 古瀬戸編年後期様式Ⅲ期
15-1	C1 区	SF01	中世土師器	坏	—	(5.9)	(1.7)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	14 世紀後半
15-2	C1 区	SF01	中世土師器	坏	—	(4.5)	(2.5)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	14 世紀後半
15-3	C1 区	SF01	中世土師器	坏	12.9	4.8	4.6	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	14 世紀後半 灯明皿として使用か
15-4	C1 区	SF01	中世土師器	坏	—	5.1	(2.7)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	15 世紀前半
15-5	C1 区	SF01	中世土師器	坏	—	6.2	(2.4)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	15 世紀前半
15-6	C1 区	SF01	中世土師器	坏	11.8	4.5	2.9	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	15 世紀前半
15-7	C1 区	SF01	中世土師器	坏	12.6	5.5	2.9	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀後半
15-8	C1 区	SF01	中世土師器	坏	15.7	5.5	3.0	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀後半
15-9	C1 区	SF01	中世土師器	坏 (墨書)	(14.8)	—	(3.4)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀後半 内外面に墨書あり
15-10	C1 区	SF01	中世土師器	坏 (墨書)	—	4.7	(1.7)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀後半 外面に墨書あり
15-11	C1 区	SF01	中世土師器	皿	(7.4)	(3.7)	1.8	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　黒色 内　黒色	15 世紀前半 灯明皿として使用か
15-12	C1 区	SF01	中世土師器	皿	(7.4)	(3.4)	2.2	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	15 世紀前半
15-13	C1 区	SF01	中世土師器	皿	7.6	3.1	1.6	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙色 内　橙色	15 世紀後半
15-14	C1 区	SF01	中世土師器	皿	(8.2)	3.6	2.0	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙色 内　橙色	15 世紀後半
20-1	C1 区	SM03	青磁	端反碗	(16.5)	—	(2.2)	外　緑釉 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　緑色 内　緑色	15 世紀前半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
20-2	C1 区	SM03	陶器	天目碗	—	3.4	(2.7)	外　鉄釉 内　鉄釉	胎土　密 焼成　良好	外　黒茶色 内　茶色	15 世紀前半
20-3	C1 区	SM03	中世土師器	坏	—	(5.6)	(3.3)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	14 世紀後半
20-4	C1 区	SM05	中世土師器	坏	(12.4)	(5.9)	3.6	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	14 世紀後半
20-5	C1 区	SM05	中世土師器	坏	—	4.8	(1.7)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	15 世紀前半
20-6	C1 区	SM02	中世土師器	坏	—	5.3	(1.6)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	15 世紀前半
20-7	C1 区	SM01	中世土師器	坏	—	(4.5)	(2.4)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀前半
20-8	C1 区	SM01	中世土師器	坏	—	(4.5)	(1.6)	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　不良	外　灰白色 内　灰白色	15 世紀前半
20-9	C1 区	SM02	中世土師器	皿	(7.6)	(3.4)	1.9	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙色 内　橙色	15 世紀前半
20-10	C1 区	SM02	中世土師器	皿	7.4	3.8	1.8	外　回転ナデ、底部糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙色 内　橙色	15 世紀前半
22-1	C1 区	礫層	須恵器	無高台坏	(11.0)	—	(2.4)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
22-2	C1 区	礫層	須恵器	高坏	(15.5)	—	(3.9)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
22-3	C1 区	礫層	須恵器	長頸壺	—	—	(5.6)	外　しぼり痕、回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
22-4	C1 区	礫層	須恵器	無高台坏	—	7.6	(1.2)	外　回転糸切、回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
22-5	C1 区	礫層	須恵器	高台付坏	—	(6.8)	(2.7)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
22-6	C1 区	礫層	須恵器	高台付碗	—	(8.4)	(3.1)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
23-1	C1 区	砂礫層	縄文土器	鉢	—	—	(5.9)	外　擦り消し縄文 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　黒褐色	縄文時代後期
23-2	C1 区	砂礫層	弥生土器	甕	—	(5.7)	(4.0)	外　ミガキ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　灰褐色	弥生時代中期 松本編年Ⅲ様式
23-3	C1 区	砂礫層	弥生土器	甕	(14.8)	—	(3.4)	口縁端部に 4 条の凹線文	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	弥生時代後期初頭 松本編年Ⅴ -1 様式
23-4	C1 区	砂礫層	土師器	壺 (複合口縁)	(12.2)	—	(2.9)	外　ヨコナデ 内　ヨコナデ	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	古墳時代前期初頭 草田編年 6 期
23-5	C1 区	砂礫層	土師器	高坏	—	—	(4.4)	脚部屈曲部付近に 3 方向の円孔、縦方向のミガキ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	古墳時代前期 草田編年 6 ～ 7 期

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器・中世土師器（2）

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量（cm）			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
26-1	C2 区	包含層 上層	須恵器	甕	—	3.5	(3.2)	外　回転ナデ、ヘラ記号 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	7 世紀後半 大谷編年出雲 6 期
26-2	C2 区	包含層 上層	須恵器	高坏	—	—	(4.2)	脚部上方に線状の切れ目の みのスカシ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	7 世紀後半 大谷編年出雲 6 期
26-3	C2 区	包含層 上層	須恵器	蓋坏	(10.7)	—	(1.6)	宝珠つまみか 外面に自然釉付着	胎土　密 焼成　良好	外　緑灰色 内　灰白色	出雲国府編年第 1 型式 (7 世紀後葉)
26-4	C2 区	包含層 上層	須恵器	蓋坏	(14.8)	—	(1.8)	輪状つまみ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 2 型式 (7 世紀末葉～ 8 世紀第 1 四半期)
26-5	C2 区	包含層 上層	須恵器	蓋坏	—	—	(1.8)	輪状つまみ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 2 型式 (7 世紀末葉～ 8 世紀第 1 四半期)
26-6	C2 区	包含層 上層	須恵器	無高台坏	(13.0)	—	(4.1)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
26-7	C2 区	包含層 上層	須恵器	高台付皿	—	(9.2)	(1.8)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府編年第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
26-8	C2 区	包含層 上層	須恵器	高台付皿	(16.3)	(10.0)	3.6	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
27-1	C2 区	包含層 下層	弥生土器	甕	(11.4)	—	(2.8)	口縁端部に擬凹線文 (摩滅)	胎土　密 焼成　普通	外　褐色 内　褐色	弥生時代後期中葉 松本編年Ⅴ -2 様式
27-2	C2 区	包含層 下層	弥生土器	甕	(9.8)	—	(3.3)	口縁端部に 6 条の擬凹線文	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	弥生時代後期中葉 松本編年Ⅴ -2 様式
27-3	C2 区	包含層 下層	弥生土器	甕	(16.6)	—	(4.8)	口縁端部に 6 条の擬凹線文	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	弥生時代後期中葉 松本編年Ⅴ -2 様式
27-4	C2 区	包含層 下層	弥生土器	甕 (複合口縁)	(12.7)	—	(4.1)	外　ヨコナデ 内　ヨコナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	弥生時代後期後葉 松本編年Ⅴ -4 様式
27-5	C2 区	包含層 下層	土師器	低脚坏	—	3.2	(2.3)	外　ケズリ 内　ケズリ、ミガキ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	古墳時代前期前葉 草田編年 5 ～ 6 期
27-6	C2 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	(10.6)	—	(3.0)	外　ヨコナデ 内　ヨコナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	古墳時代前期中葉 草田編年 7 期
27-7	C2 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	13.4	—	(20.1)	外　ハケメ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　普通	外　橙褐色 内　橙褐色	古墳時代前期中葉 草田編年 7 期
27-8	C2 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	16.8	—	(10.2)	外　ヨコナデ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	古墳時代前期中葉 草田編年 7 期
28-1	C2 区	包含層 下層	土師器	高坏	—	—	(5.5)	外　ハケメ、赤彩 内　ケズリ	胎土　密 焼成　普通	外　橙褐色 内　橙褐色	古墳時代中期前葉 松山編年Ⅱ期
28-2	C2 区	包含層 下層	土師器	高坏	6.3	—	(5.5)	外　ハケメ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　褐色	古墳時代中期前葉 松山編年Ⅱ期
28-3	C2 区	包含層 下層	土師器	甕 (単純口縁)	15.3	—	(11.4)	外　僅かなハケメ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	古墳時代中期前葉 松山編年Ⅱ期
31-1	C3 区	包含層 上層	土師器	甕 (複合口縁)	(13.2)	—	(4.3)	外　ヨコナデ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	古墳時代前期中葉 草田編年 7 期
31-2	C3 区	包含層 上層	土師器	甕 (複合口縁)	(20.2)	—	(6.0)	外　ヨコナデ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　暗褐色 内　暗褐色	古墳時代前期中葉 草田編年 7 期
31-3	C3 区	包含層 上層	土師器	甕 (単純口縁)	(18.2)	—	(3.8)	外　ハケメ (摩滅) 内　ケズリ	胎土　密 焼成　普通	外　黄褐色 内　黄褐色	古墳時代中期前葉 松山編年Ⅱ期
31-4	C3 区	包含層 上層	土師器	甕 (単純口縁)	(21.6)	—	(7.1)	外　ハケメ (摩滅) 内　ケズリ	胎土　密 焼成　普通	外　褐色 内　褐色	古墳時代中期前葉 松山編年Ⅱ期
31-5	C3 区	包含層 上層	須恵器	高坏	—	—	(7.4)	脚部上方に線状の切れ目の みの二方スカシ、ヘラ記号	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	7 世紀後半 大谷編年出雲 6 期
31-6	C3 区	包含層 上層	須恵器	蓋坏	14.4	—	(3.1)	宝珠つまみ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府編年第 2 型式 (7 世紀末葉～ 8 世紀第 1 四半期)
31-7	C3 区	包含層 上層	須恵器	蓋坏	—	—	(1.8)	輪状つまみ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府編年第 2 型式 (7 世紀末葉～ 8 世紀第 1 四半期)
31-8	C3 区	包含層 上層	須恵器	無高台坏	—	(7.2)	(1.6)	外　回転糸切、回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　淡灰色 内　淡灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
31-9	C3 区	包含層 上層	須恵器	無高台坏	—	(6.8)	(2.3)	外　回転糸切、回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
31-10	C3 区	包含層 上層	須恵器	無高台皿	(10.4)	(7.4)	2.5	外　回転糸切、回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
31-11	C3 区	包含層 上層	須恵器	高台付皿	—	(10.2)	(2.7)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
31-12	C3 区	包含層 上層	須恵器	高台付皿	(19.6)	(16.5)	(3.6)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府編年第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
32-1	C3 区	包含層 上層	須恵器	高台付坏か鉢	—	(8.2)	(4.6)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府編年第 4 ～ 5 型式 (8 世紀第 3 四半期～ 9 世紀前葉)
32-2	C3 区	包含層 上層	須恵器	高台付坏か鉢	—	(11.5)	(5.7)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 4 ～ 5 型式 (8 世紀第 3 四半期～ 9 世紀前葉)
32-3	C3 区	包含層 上層	須恵器	短頸壺	(9.6)	—	(4.5)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 4 ～ 5 型式 (8 世紀第 3 四半期～ 9 世紀前葉)
32-4	C3 区	包含層 上層	須恵器	高坏	—	(14.3)	(10.4)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 4 ～ 5 型式 (8 世紀第 3 四半期～ 9 世紀前葉)
32-8	C3 区	包含層 上層	白磁	端反碗	(15.5)	—	(5.4)	外　透明釉 内　透明釉	胎土　密 焼成　良好	外　白色 内　白色	15 世紀前半 森田編年白磁碗 B 群
32-9	C3 区	包含層 上層	青磁	端反碗	(14.9)	—	(5.9)	外　緑釉 内　緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　明緑色 内　明緑色	15 世紀中頃～後半 上田分類龍泉窯系碗 D 類
32-10	C3 区	包含層 上層	青磁	蓋付鉢	(13.4)	—	(2.4)	外　淡緑釉、波状文 内　淡緑釉	胎土　密 焼成　良好	外　明緑色 内　明緑色	16 世紀前半
33-1	C3 区	包含層 下層	弥生土器	甕	(13.3)	—	(4.2)	口縁端部に 6 条の擬凹線文 頸部内面にヘラミガキ	胎土　密 焼成　良好	外　暗褐色 内　暗褐色	弥生時代後期中葉 松本編年Ⅴ -2 様式
33-2	C3 区	包含層 下層	弥生土器	甕	(19.8)	—	(6.8)	口縁端部に 7 条の擬凹線文 頸部内面にヘラミガキ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	弥生時代後期中葉 松本編年Ⅴ -2 様式
33-3	C3 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	(14.3)	—	(10.6)	外　ヨコナデ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	古墳時代前期前葉 草田編年 6 期
33-4	C3 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	(21.0)	—	(5.9)	外　回転ナデ 内　ケズリ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	古墳時代前期前葉～中葉 草田編年 6 ～ 7 期
33-5	C3 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	(16.2)	—	(5.1)	外　ヨコナデ 内　ヨコナデ	胎土　密 焼成　良好	外　茶褐色 内　茶褐色	古墳時代前期前葉～中葉 草田編年 6 ～ 7 期
33-6	C3 区	包含層 下層	土師器	壺 (複合口縁)	(27.2)	—	(10.0)	外　ヨコナデ、有軸羽状文 内　ヨコナデ	胎土　密 焼成　良好	外　淡褐色 内　淡褐色	古墳時代前期中葉 草田編年 7 期
34-1	C3 区	包含層 下層	土師器	低脚坏	—	7.0	(2.9)	外　ケズリ 内　ヘラミガキ、ヘラ記号	胎土　密 焼成　良好	外　明褐色 内　明褐色	古墳時代前期前葉 草田編年 6 期
34-2	C3 区	包含層 下層	土師器	低脚坏	—	5.2	(3.8)	外　ケズリ 内　ヘラミガキ (摩滅)	胎土　密 焼成　良好	外　橙色 内　橙色	古墳時代前期前葉 草田編年 6 期
34-3	C3 区	包含層 下層	須恵器	無高台坏	(11.0)	—	(4.0)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器・中世土師器（3）

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量（cm）			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
34-4	C3 区	包含層下層	須恵器	無高台坏	(13.4)	―	(3.8)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
34-5	C3 区	包含層下層	須恵器	短頸壺	(21.2)	―	(4.5)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府編年第 5 型式 (8 世紀末葉～ 9 世紀前葉)
34-6	C3 区	包含層下層	須恵器	高台付瓶	―	11.4	(11.2)	外　タタキ目をナデ消す 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	8 世紀代か
34-7	C3 区	包含層下層	須恵器	甕	(35.4)	―	(6.3)	外　ナデ、波状文 内　ヨコナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	8 世紀代か
39-1	C4 区	地山面	須恵器	無高台坏	(12.8)	―	(3.6)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
39-2	C4 区	地山面	須恵器	無高台坏	―	(8.0)	(1.1)	外　回転糸切、回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)
39-3	C4 区	地山面	須恵器	高坏	―	(9.2)	(3.0)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府編年第 3 ～ 4 型式 (8 世紀第 2 ～ 4 四半期)

石器・石製品

遺物番号	調査区	遺構名	種類	石材	法量			重量（g）	備考
					長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）		
16-1	C1 区	SF01	砥石	凝灰岩	(4.5)	3.3	1.0	30.09	仕上げ砥。4 面の使用痕あり。
16-2	C1 区	SF01	砥石	粘板岩	(5.1)	3.5	0.8	24.42	仕上げ砥。2 面の使用痕あり。
16-3	C1 区	SF01	砥石	砂岩	(8.8)	3.4	2.2	136.47	荒砥。4 面の使用痕あり。
23-6	C1 区	砂礫層	石器	黒曜石	2.2	1.9	0.6	1.77	剥片。裏面の主要剥離面にリングが密集。両極剥離で分割される。
23-7	C1 区	砂礫層	石器	黒曜石	3.3	1.8	0.7	4.44	剥片。二次加工。 表面左側にノッチ状の加工がみられる。
28-4	C2 区	包含層下層	敲石	流紋岩	9.1	8.0	3.9	440.75	石の表裏中央が僅かに窪み、側面には敲打痕が顕著にみられる。
35-1	C3 区	包含層下層	石器	玉髄	1.6	2.0	0.3	0.98	剥片。上部右側に打面をもつ。
35-2	C3 区	包含層下層	石器	玉髄	1.8	2.6	0.6	2.65	剥片。上面および左右側面が折損する。
35-3	C3 区	包含層下層	石器	黒曜石	2.3	2.0	0.6	2.96	剥片。二次加工。
35-4	C3 区	包含層下層	石器	黒曜石	2.8	4.1	0.5	7.98	剥片。表面の右側面に二次加工が施され、裏面の右側面に微細な剥離痕がみられる。
35-5	C3 区	包含層下層	石器	黒曜石	3.8	3.4	1.5	17.36	残核。両極打撃で剥片を剥ぎ取った残核か。
36-1	C3 区	包含層下層	乳棒状石斧	緑泥片岩	10.4	4.3	2.8	194.38	磨製加工。表裏および左右側面に面をもつ。
36-2	C3 区	包含層下層	打製石斧	流紋岩	(15.3)	7.2	2.7	280.32	頭部～基部のみ残存。バチ形の石斧か。
36-3	C3 区	包含層下層	打製石斧	流紋岩	(8.8)	10.5	2.6	391.22	基部のみ残存。基部の左右側縁部に大まかな剥離を加えている。バチ形に近い石斧か。

金属製品

遺物番号	調査区	遺構名	種類	形状	材質	法量		備考
						大きさ (cm)	重量 (g)	
16-4	C1 区	SF01	釘	角釘	鉄	長さ(4.9)/幅0.5/厚さ0.4	5.09	頭巻部は平坦。先端が湾曲する。
16-5	C1 区	SF01	釘	角釘	鉄	長さ5.8/幅0.5/厚さ0.6	7.96	頭巻部は平坦。
16-6	C1 区	SF01	釘	角釘	鉄	長さ(7.3)/幅0.5/厚さ0.5	8.28	頭巻部は平坦。先端が湾曲する。
16-7	C1 区	SF01	小柄	柄	真鍮	長さ8.8/幅1.4/厚さ0.3	17.61	柄部のみ残存。外面は無文。
16-8	C1 区	SF01	鉄鍋	湯口	鉄	長さ(8.0)/高さ1.5/厚さ0.6～2.2	134.98	底部のみ残存。湯口部分の形状は丸型湯口。

銭貨

遺物番号	調査区	遺構名	銭種	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	残存率 (%)	質量 / 直径	備考
20-13	C1 区	SM01	天聖元寳	24.7	7.15	1.12	3.16	100	0.12	北宋銭 1023 年初鋳。

木製品

遺物番号	調査区	遺構名	種類	名称部位	法量 (cm)				木取り	備考
					長さ	幅	高さ	厚さ		
16-9	C1 区	SF01	曲物	底板	(5.7)	11.9	―	0.7	柾目	1/2 程度残存。
16-10	C1 区	SF01	部材か	用途不明	9.8	2.7	3.5	1.9 ～ 3.5	柾目	底部両端にスリット状の抉り加工。
16-11	C1 区	SF01	木錘	槌の子	16.9	4.8	―	5.0	丸木	円柱状の丸材の両端に丸木面を残し、中央に向かって両側から円錐形状に削り込む。
16-12	C1 区	SF01	木錘	槌の子	23.1	5.2	―	4.9	丸木	円柱状の丸材の両端に丸木面を残し、中央に向かって両側から円錐形状に削り込む。
16-13	C1 区	SF01	箸	両口箸	(14.0)	0.6	―	0.5	―	白木の箸。
16-14	C1 区	SF01	箸	両口箸	(15.3)	0.7	―	0.5	―	白木の箸。
16-15	C1 区	SF01	箸	両口箸	22.6	0.6	―	0.5	―	白木の箸。
16-16	C1 区	SF01	木器	叩板か杓子	29.7	6.4	―	0.7	柾目	羽子板状を呈する。

土製品

遺物番号	調査区	遺構名	種類	形状	胎土	法量		備考
						大きさ (㎝)	重量 (g)	
20-11	C1 区	SM05	土錘	紡錘形	灰褐色	残存長3.8/幅1.2/厚さ1.1	3.39	砂粒を含まない精製の土錘。管状で中央が膨らむ。
20-12	C1 区	SM05	土錘	筒形	橙褐色	残存長4.3/幅1.2/厚さ1.2	5.96	砂粒を含まない精製の土錘。管状で中央が膨らむ。
32-5	C3 区	包含層上層	土錘	紡錘形	橙褐色	残存長4.6/幅1.1/厚さ1.1	4.56	砂粒を含まない精製の土錘。管状で中央が膨らむ。
32-6	C3 区	包含層上層	土錘	紡錘形	褐色	長さ5.6/幅2.0/厚さ2.0	25.13	砂粒を含まない精製の土錘。管状で中央が膨らむ。
32-7	C3 区	包含層上層	土錘	筒形	赤褐色	長さ6.0/幅2.5/厚さ2.3	41.90	砂粒を含まない精製の土錘。管状で膨らみがない。
34-8	C3 区	包含層下層	把手	―	黄褐色	長さ(5.3)/幅3.1/厚さ2.9	68.60	2㎜前後の石英を多く含む。
34-9	C3 区	包含層下層	把手	―	橙褐色	長さ(7.0)/幅4.8/厚さ4.5	211.61	3㎜以下の砂粒を多く含む。
34-10	C3 区	包含層下層	竈	焚口側面直立部	橙褐色	長さ(13.1)/幅(4.4)/高さ7.4	210.78	1㎜以下の白色砂粒を疎らに含む。
34-11	C3 区	包含層下層	土製支脚	―	褐色	長さ(16.0)/幅8.2/厚さ8.5	864.28	突起（角）は欠損しているが、前方２方向・後方１方向の突起が付く土製支脚。外面にヘラケズリを施す。

写　真　図　版

※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例：図版 17　14-1 は第 14 図 -1 を示す)

1　調査地遠景　（西から）

2　調査地調査前全景　（南から）

図版2　調査地近景

1　松江市朝酌町字若宮谷所在の水神　（南西から）

2　水神の祠　（西から）

3　水神の南側に隣接する湧水地　（北西から）

4　大橋川北岸から松江市街地を望む　（南から）

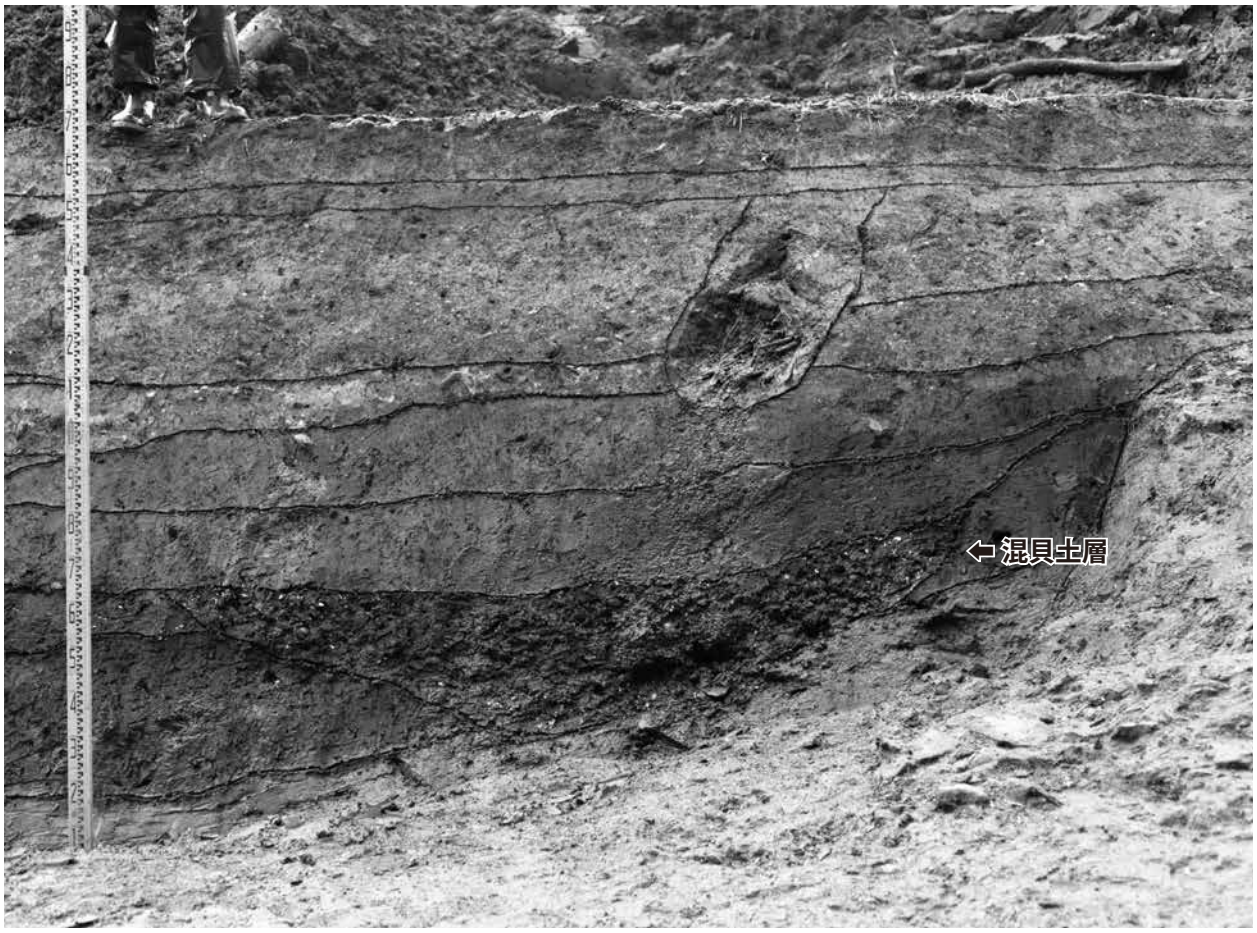
5　発掘調査風景

1　C1区　調査前全景　（南東から）

2　C1区　北壁土層断面　（南東から）

図版4　C1区

1　C1区　西壁土層断面　（南東から）



2　C1区　西壁土層断面（一部）　混貝土層と地山の落ち込み　（東から）

1　第1遺構面　道路SF01　完掘後　（西から）

2　SF01と北東方向の延長線上に水神　（南西から）

3　SF01北側側溝　埋土断面　（南西から）

4　SA01　木杭　（北から）

図版6　C1区

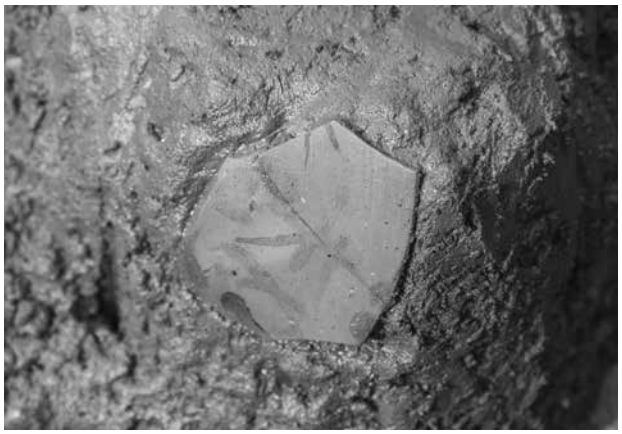
1　SF01北側側溝　備前擂鉢出土状況　（第14図-10）

2　SF01北側側溝　土師器坏出土状況　（第15図-6）

3　SF01　土師器坏出土状況　（第15図-3）

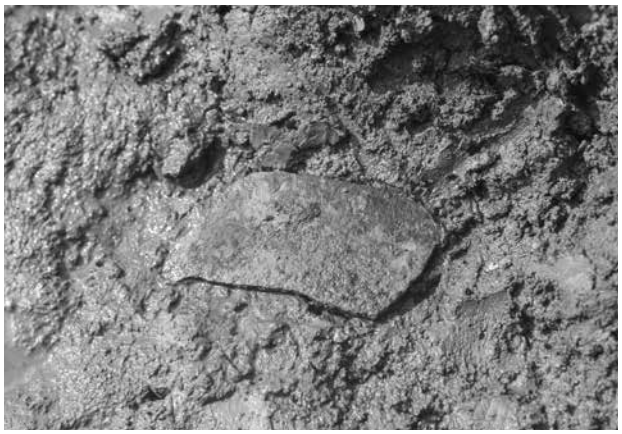
4　SF01　土師器皿出土状況　（第15図-13）

5　SF01　土師器坏出土状況　（第15図-5・7・8）



6　SF01北側側溝　墨書土師器坏出土状況　（第15図-9）

7　SF01南側側溝　小柄出土状況　（第16図-7）



8　SF01北側側溝　鉄鍋出土状況　（第16図-8）

1　第2遺構面　貝塚SM01～05　検出状況　（南から）

2　SM02　貝層の広がり　（南から）

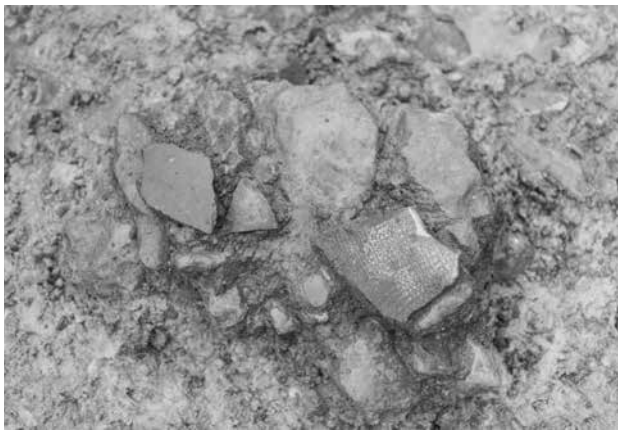
3　調査区内西壁　混貝土層接写　（東から）

4　SM01　獣骨（イヌ下顎骨）出土状況　（南東から）

5　SM01と地山（基盤層）の境界部分　（北から）

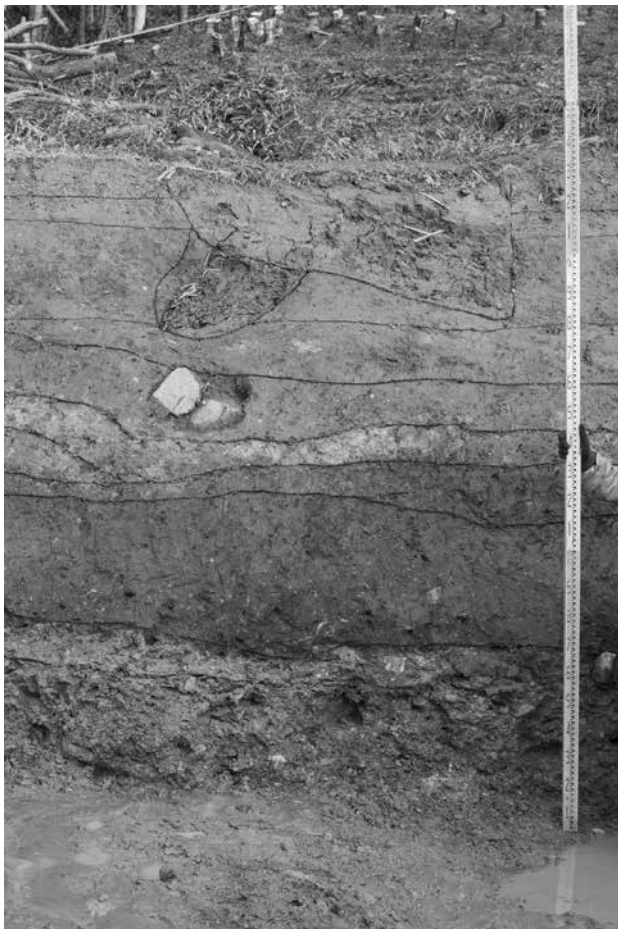
図版8　C1区

1　C1区　地山面　完掘後　（南西から）



2　礫層遺物出土状況①

3　礫層遺物出土状況②



4　C1区　南東角付近東壁　礫層・砂礫層断面　（西から）

1　C2区　調査前全景　（南から）

2　C2区　北壁土層断面　（南から）

図版10　C2区

1　C2区　東壁土層断面（一部）（西から）

2　遺物包含層下層　古墳時代前期の土師器壺出土状況　（北西から）

1　遺物包含層上層　須恵器皿出土状況　（第26図-8）

2　遺物包含層下層　土師器壺出土状況　（第27図-8）

3　遺物包含層下層　土師器壺出土状況　（第27図-7）

4　C2区　地山面　完掘後　（南から）

図版12　C3区

1　C3区　調査前全景　（南西から）

2　C3区　北壁土層断面　（南から）

1　C3区　西壁土層断面　（南東から）

2　遺物包含層上層　完掘後　（南から）

3　遺物包含層上層　遺物出土状況　（北から）

4　遺物包含層上層　須恵器無高台坏出土状況

図版14　C3区

1　遺物包含層上層　須恵器高台付坏出土状況

2　遺物包含層上層　須恵器甕片出土状況

3　遺物包含層下層　土師器壺口縁部出土状況

4　遺物包含層下層　弥生土器甕口縁部出土状況

5　C3区　地山面　完掘後　（南から）

1　C4区　調査前全景　（南西から）

2　C4区　南壁土層断面（下方に地滑りによる土層堆積が乱れがみられる）（北西から）

図版16　C4区・出土遺物整理作業

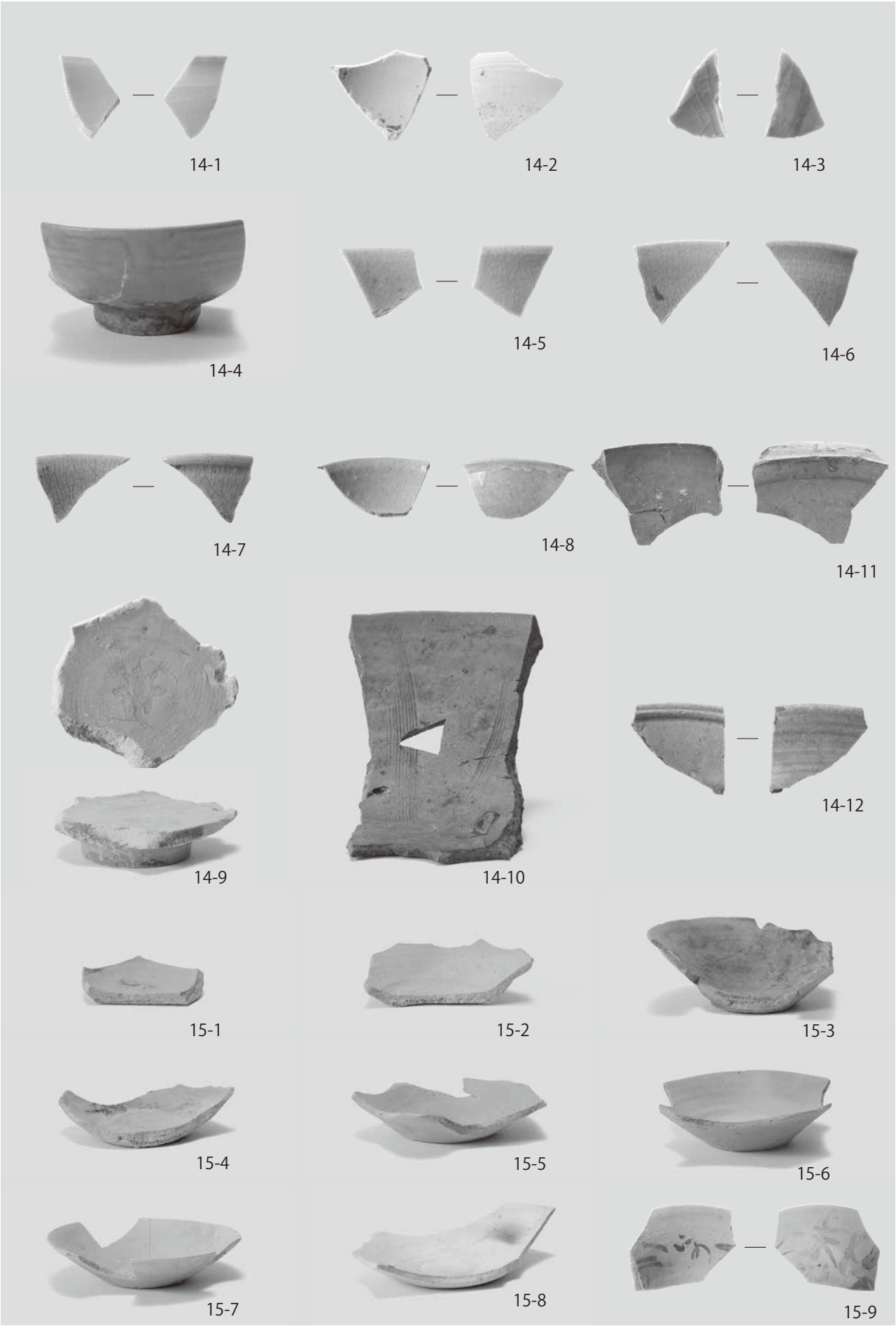
1　C4区　地山面　完掘後　（北から）

2　出土貝層水洗選別作業①

3　出土貝層水洗選別作業②

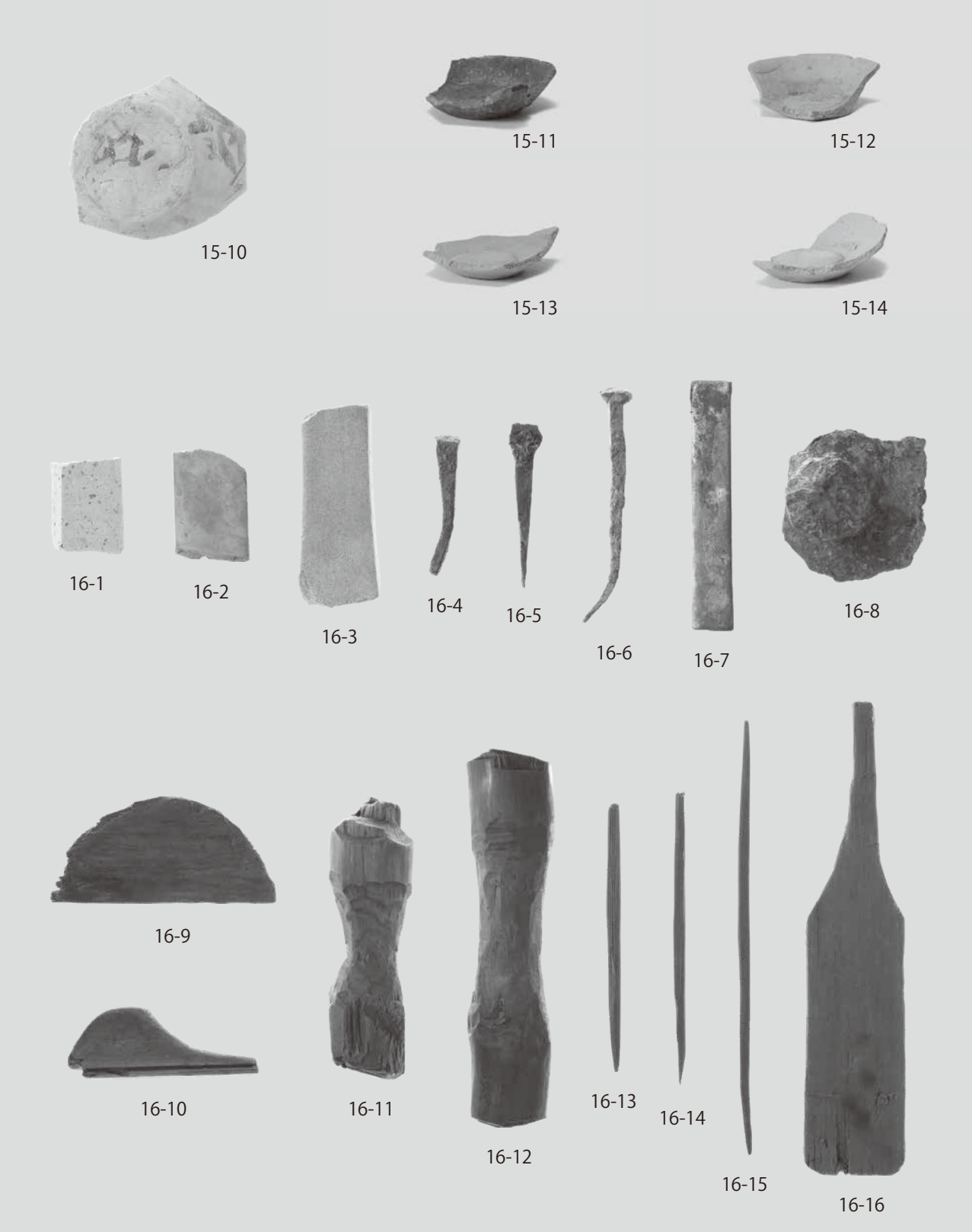
4　動物遺存体調査指導状況

5　貝類等採取遺物分類作業



C1区　SF01出土遺物（1）

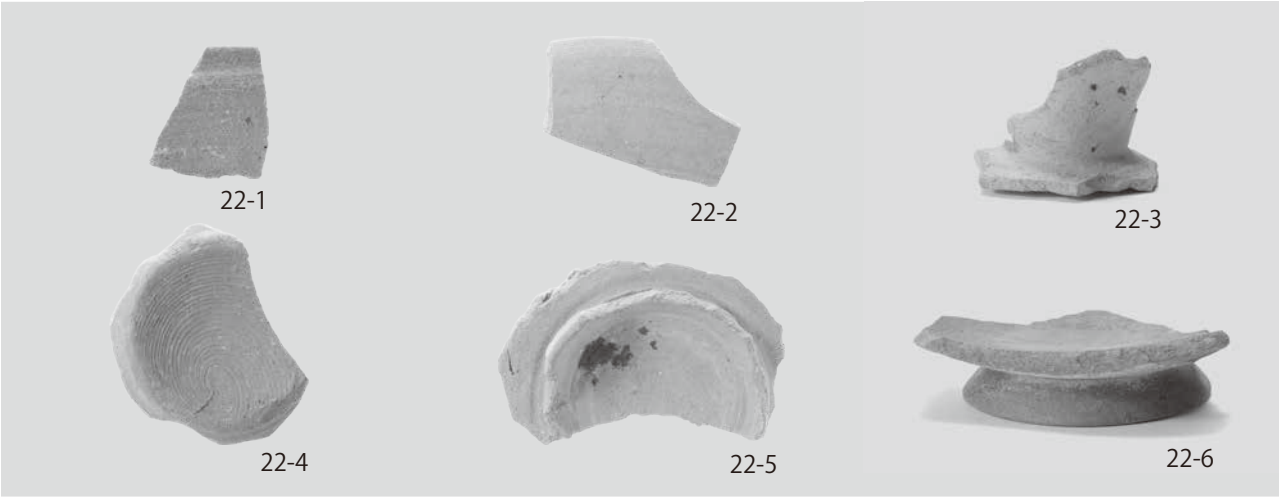
図版18　出土遺物②



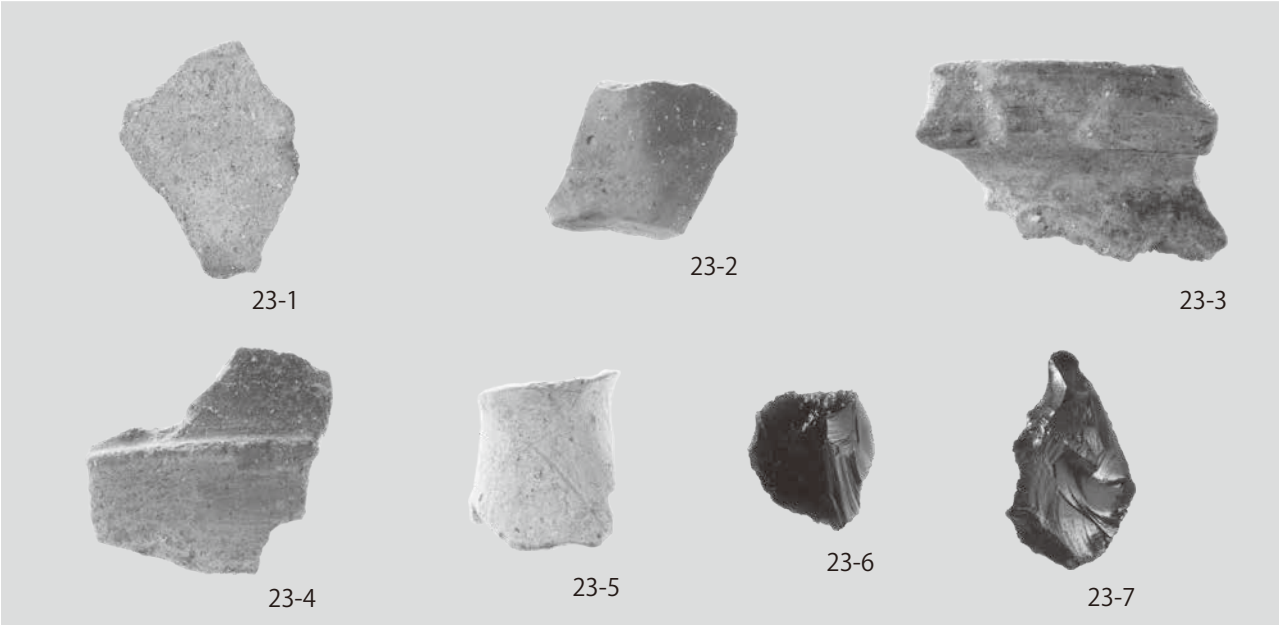
C1区　SF01出土遺物（2）

C1区　SM01～05出土遺物（1）

C1区　SM01～05出土遺物（2）

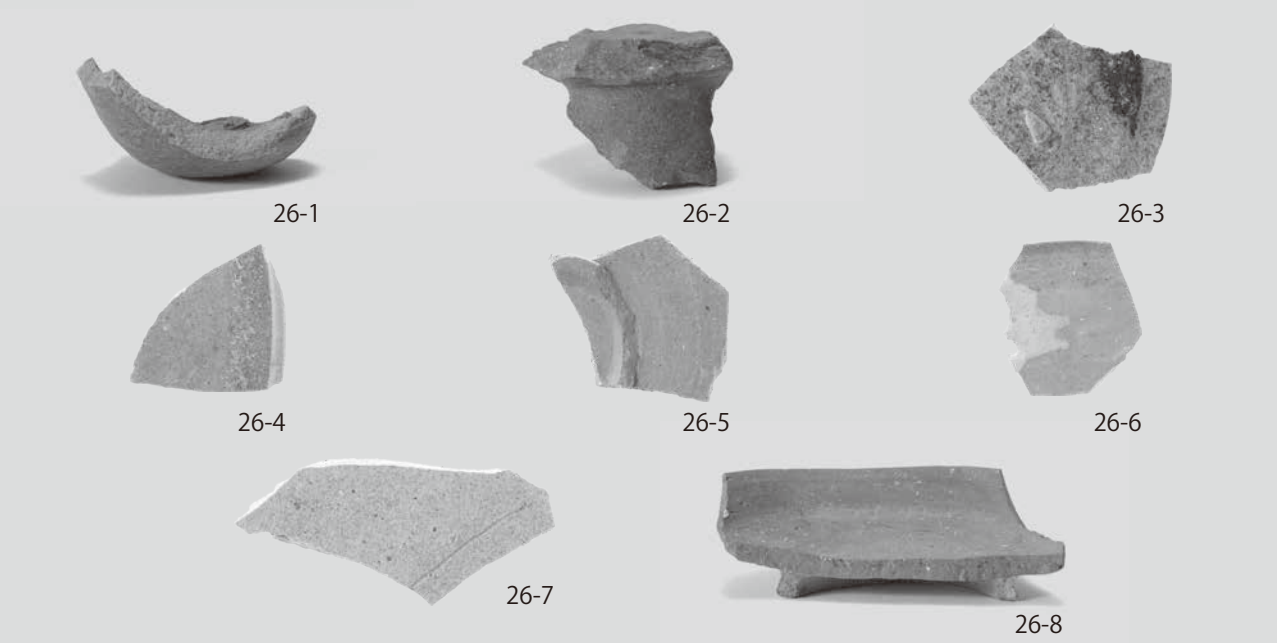


C1区　礫層出土遺物



C1区　砂礫層出土遺物

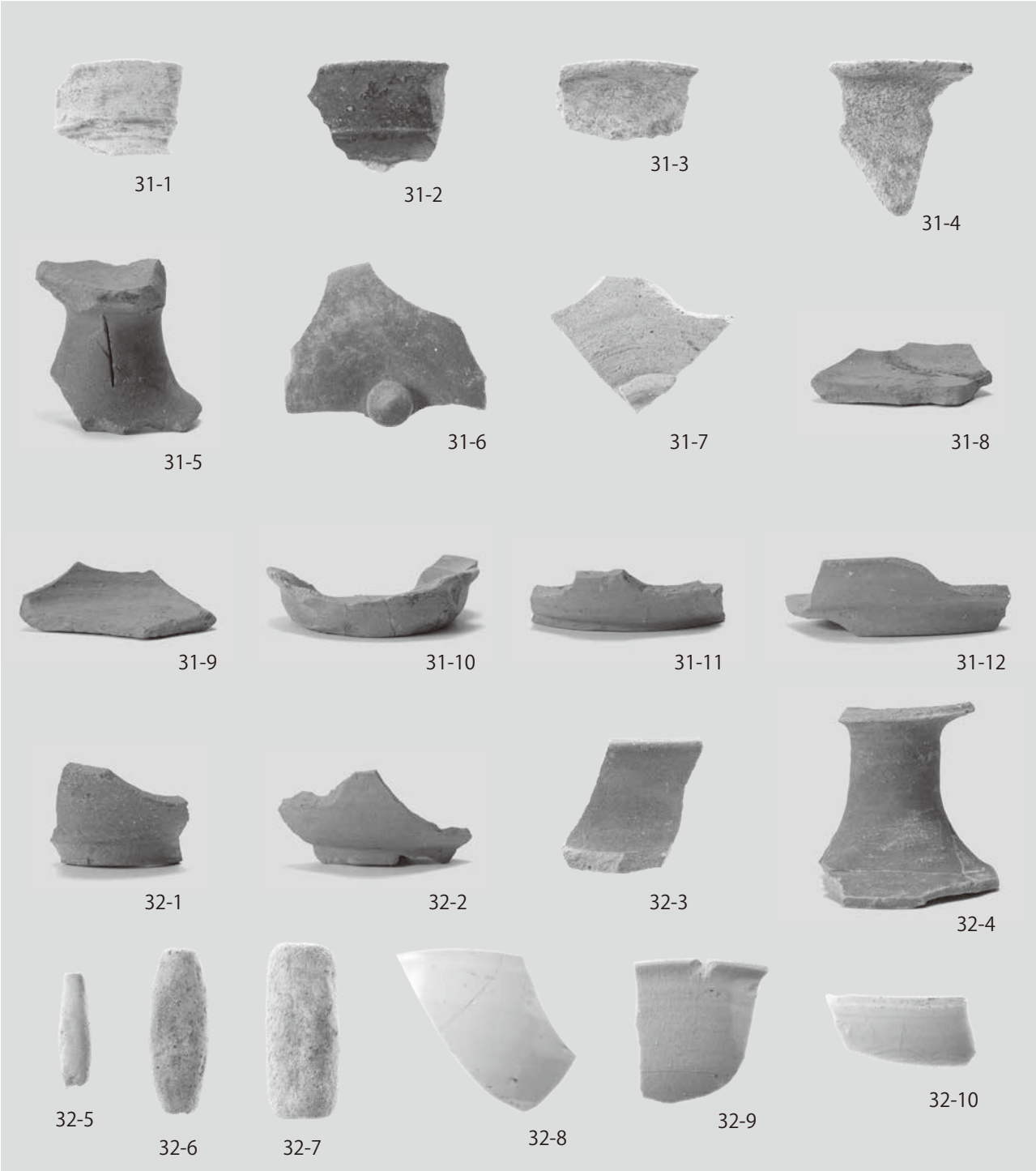
図版20　出土遺物④



C2区　遺物包含層上層（第3層）出土遺物

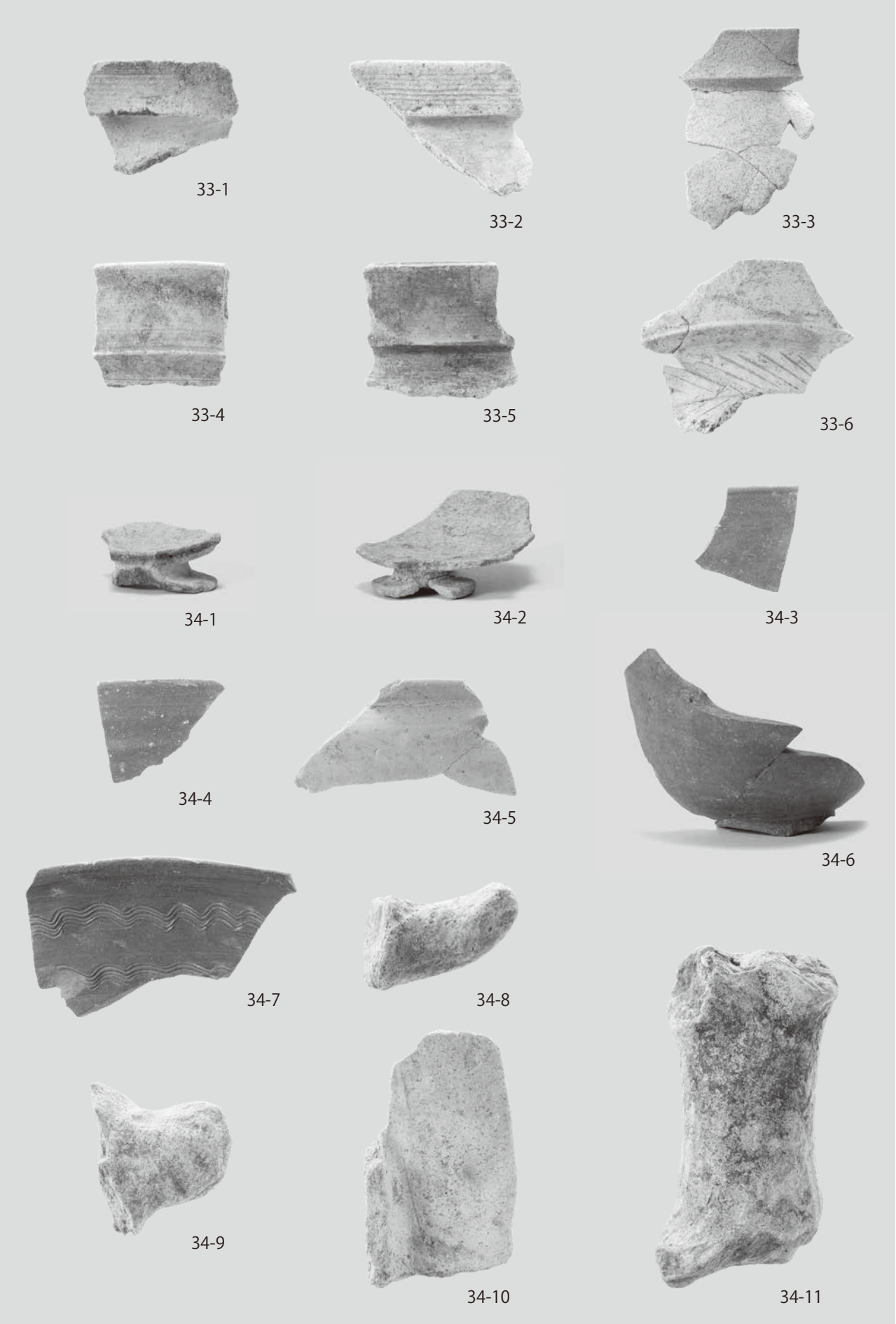
C2区　遺物包含層下層（第4層）出土遺物（1）

C2区　遺物包含層下層（第4層）出土遺物（2）

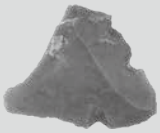


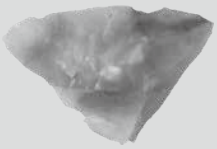
C3区　遺物包含層上層（第3・4層）出土遺物

図版22　出土遺物⑥

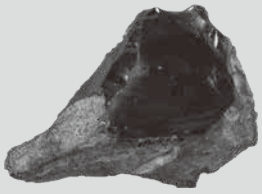


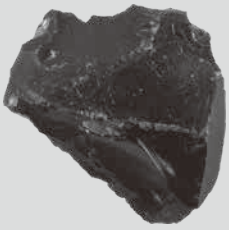
C3区　遺物包含層下層（第5層）出土遺物（1）


35-1


35-2

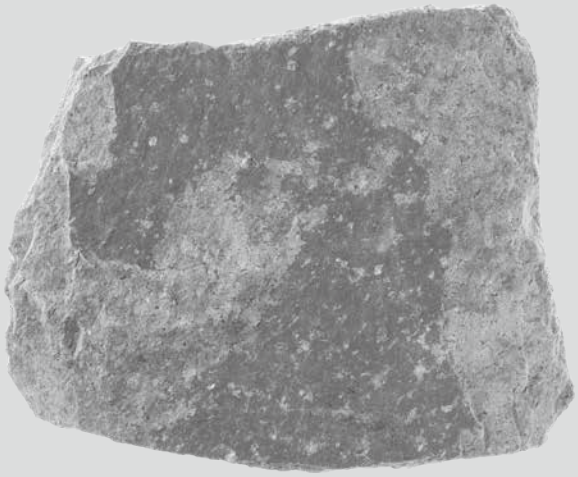
35-3


35-4

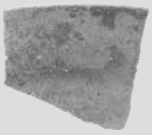

35-5

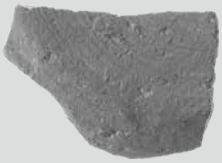
36-1

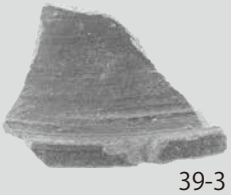
36-2


36-3

C3区　遺物包含層下層（第5層）出土遺物（2）


39-1

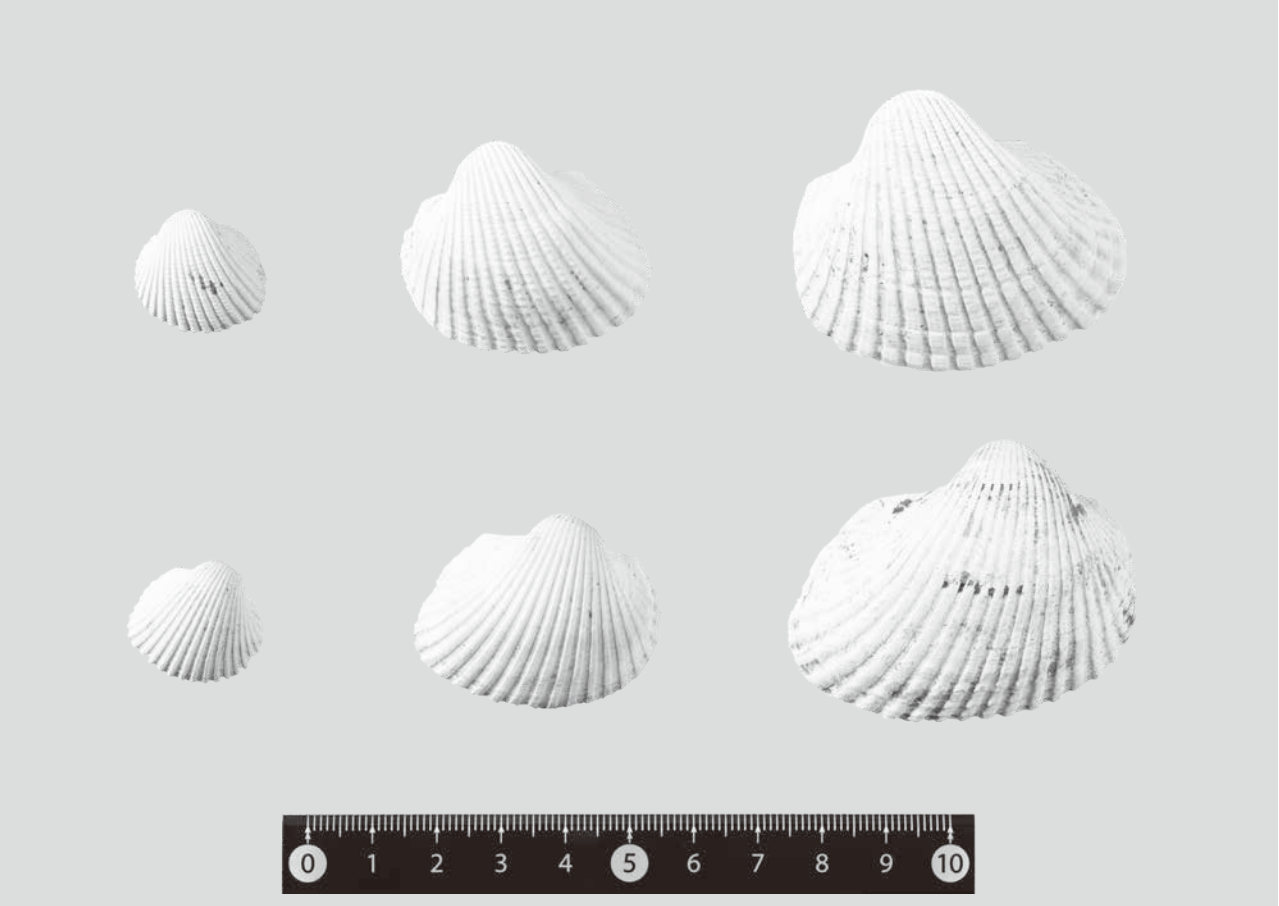

39-2


39-3

C4区　地山面出土遺物

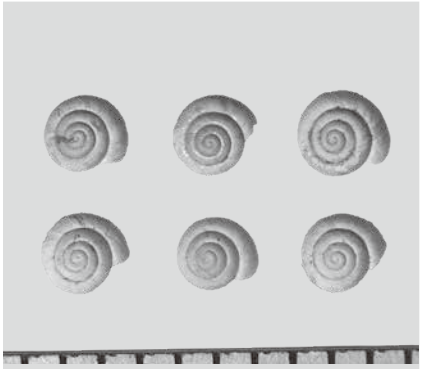
図版24　動物遺存体①（貝類）

ヤマトシジミ（上段：左・下段：右）



サルボウ（上段：左・下段：右）

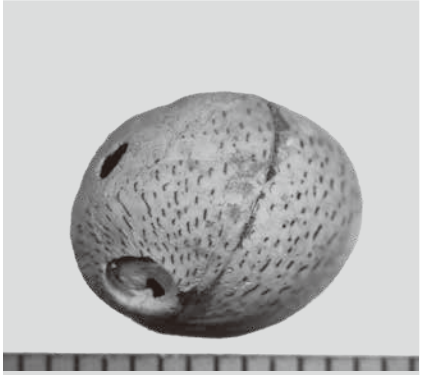
その他の貝類



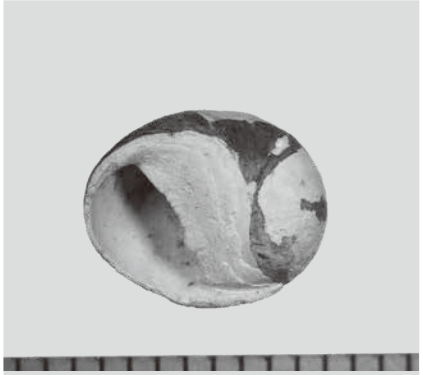
No.54
ナタネガイ科

No.55
ホソオカチョウジガイ

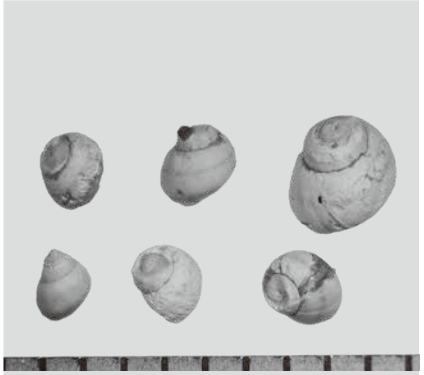
No.56
サツマオカチョウジガイか



No.111
イシマキガイ



No.161
イシマキガイ



No.169
カワザンショウガイ科

微小貝

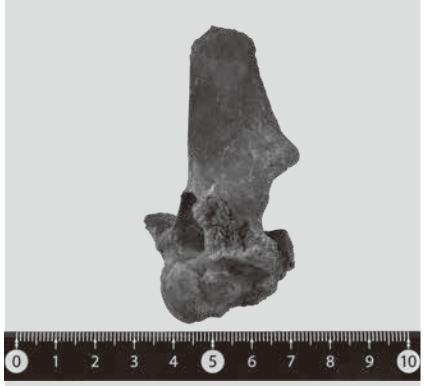
※貝類の掲載番号は表3の遺物番号と対応する。

図版26　動物遺存体③（骨類）

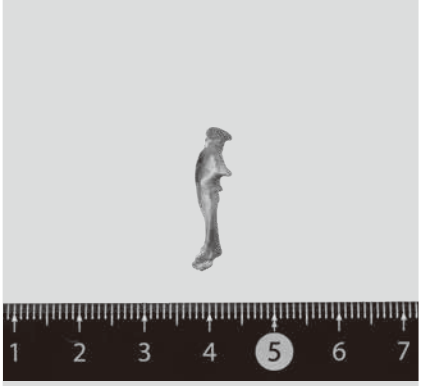
No.1
サメ類（椎骨）

No.2
サメ類（歯）

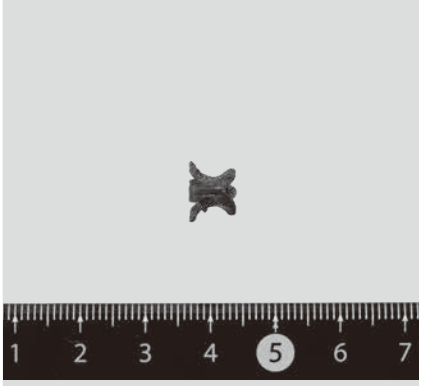
No.3
イヌ（下顎骨：右）



No.4
ニホンジカ（胸椎）



No.18
モグラ科（尺骨：右）



No.24
ヘビ類（椎骨）

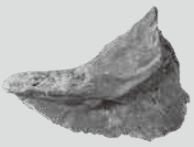
No.30
アジ科（椎骨）

No.7
マダイ亜科（前上顎骨：左）

No.6
ボラ科（主鰓蓋骨：左）

No.8
クロダイ属（前上顎骨：右）

No.11
クロダイ属（角骨：左）



No.12
クロダイ属（前鰓蓋骨：左）

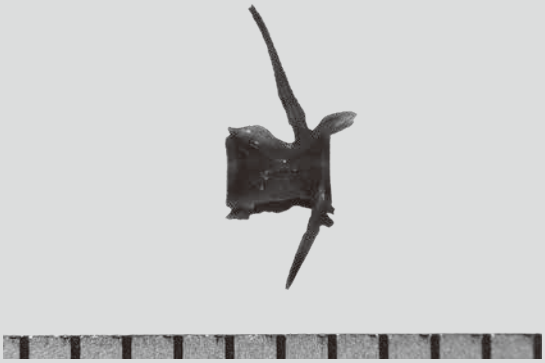
No.19
クロダイ属（角舌骨：右）

No.28
クロダイ属（舌顎骨：左）

骨類

※骨類の掲載番号は表4の遺物番号と対応する。

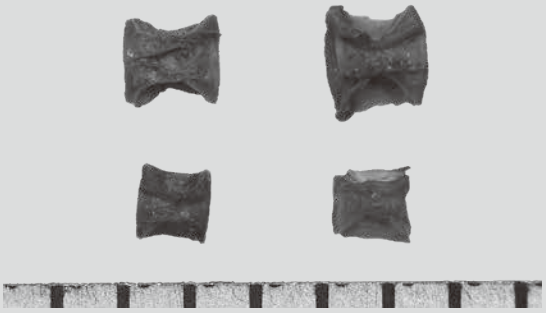
No.60
ハゼ科（前上顎骨：右）



No.62
ニシン科（椎骨）

No.66
コイ科（咽頭歯）

No.74
コイ科（咽頭歯）



No.76
ニシン科（椎骨）

No.79
ハゼ科（椎骨）

No.80
コイ科（背鰭/臀鰭棘）

No.88
カエル類（椎骨）

微細骨

報告書抄録

ふりがな	わかみやだにいせき
書名	若宮谷遺跡
副書名	朝酌矢田地区共同墓地整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 203 集
編著者名	小山泰生（編）、石丸恵利子、野村豪士
編集機関	松江市 （松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室） 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86 番地　　TEL：0852-55-5284
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 （埋蔵文化財課） 〒 690-0401　島根県松江市島根町加賀 1263-1　　TEL：0852-85-9210
発行年月日	2021（令和 3）年 12 月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
若宮谷遺跡（わかみやだにいせき）	島根県松江市（しまねけんまつえし）朝酌町（あさくみちょう）1034 番地（ばんち）1 外（ほか）	32201	D-1167	35° 27′ 08″ 133° 06′ 20″	20191120 ～ 20200323	581㎡	共同墓地整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮谷遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 室町時代	遺物包含層 中世貝塚 道路 溝	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石製品 鉄製品 木製品 土製品	若宮谷遺跡は大橋川が最も川幅を狭めるところの北側低丘陵上に所在する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。 当遺跡の調査では、谷底から縄文時代～弥生時代の土器や石器が出土し、埋没谷に堆積する遺物包含層から古墳時代～奈良・平安時代の土器が出土した。また、室町時代の貝塚を検出し、当該期の集落景観を知る上で貴重な資料を得た。

松江市文化財調査報告書　第 203 集

朝酌矢田地区共同墓地整備事業に伴う発掘調査報告書

若宮谷遺跡

令和 3(2021) 年 12 月

編集・発行　島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印　　刷　有限会社　黒潮社
島根県松江市向島町 182-3